の平面形を呈するものと思われるが、南西に掘られた現代の井戸によって大半を削平されている。美濃焼と思われる天目茶碗が1個、埋土の中層より出土している。木棺等の痕跡は、認められなかった。

ＳＥ01　調査区中央部において検出された1.0×0.8m、深さ60cmの隅丸方形を呈する井戸である。

ＳＫ01　調査区中央部に位置する直径1.2m、深さ20cmの円形の土坑である。中世の須恵器、土師器が出土している。

ＳＫ03　調査区の南西隅において検出された落ち込み状の遺構である。中世の遺物が比較的多く出土した。粘土、砂の堆積がみられる。

ＳＫ04　1.5×1.3m、深さ35cmの隅丸方形の土坑である。壁は直にたちあがり底部は平らである。ＳＫ07に上方を切られている。

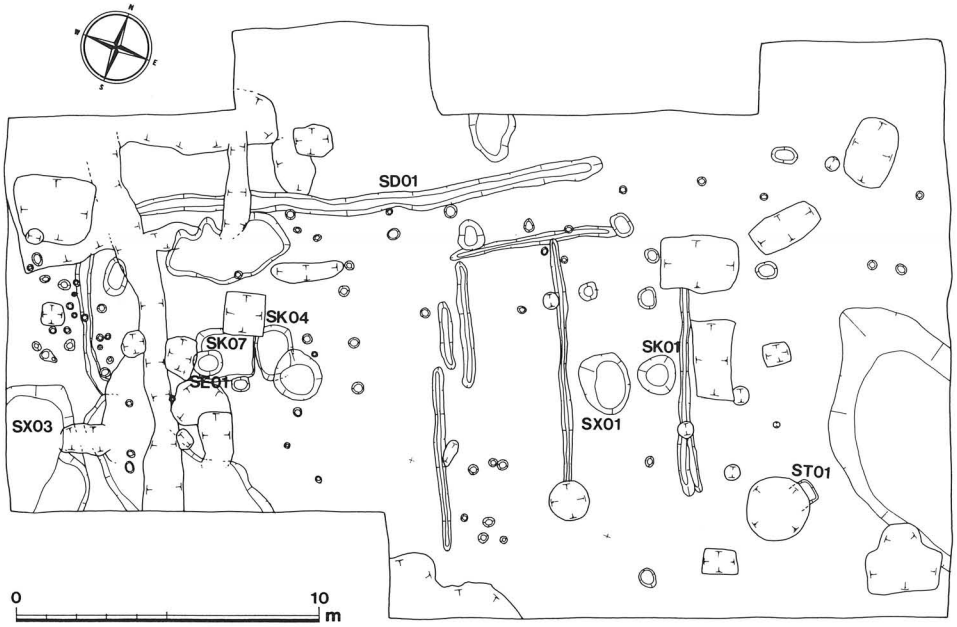


fig. 93
第１遺構面平面図

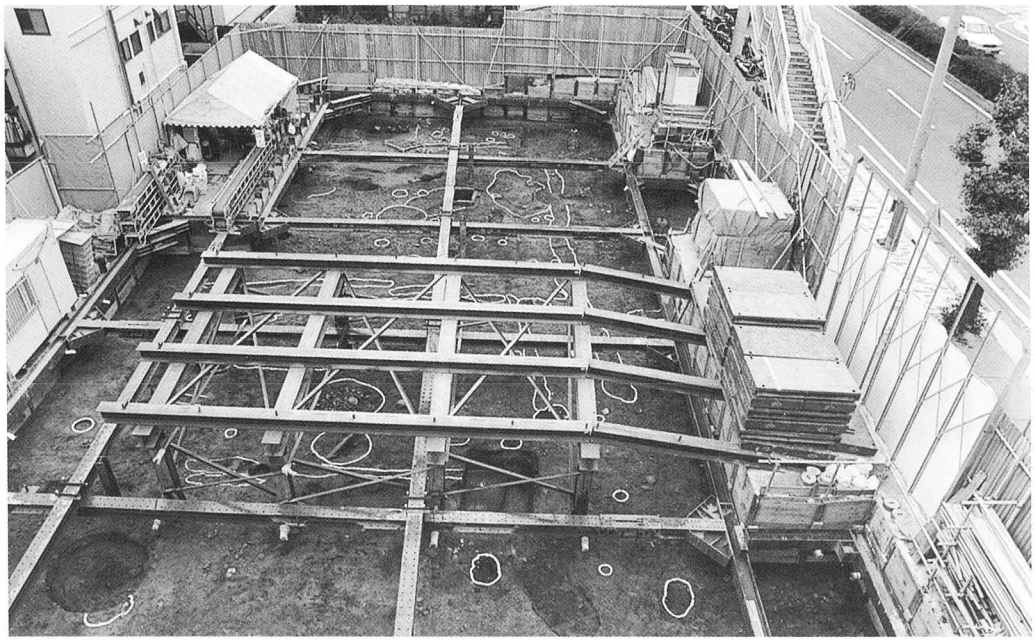


fig. 94
第１遺構面全景

ＳＤ01　調査区を東西に流れる幅50㎝、深さ35㎝ほどの溝である。西側ほど削平を受けて残りが悪い。

ＳＸ01　拳大の礫および遺物によって埋まった2.0ｍ×1.6ｍの楕円形の土坑である。深さは15㎝ほどである。中世の須恵器、土師器が出土している。

第２遺構面　調査区の東部約３分の１ほどをおおう洪水砂上において確認された遺構面で奈良～平安時代前期のピットが集中する。

建物11　調査区の南東隅において検出された、２×３間以上の掘立柱建物である。南へさらに延びるようである。柱間は、南北２ｍ、東西1.7ｍであり柱掘形は、30×50㎝ほどのやや崩れた隅丸方形である。

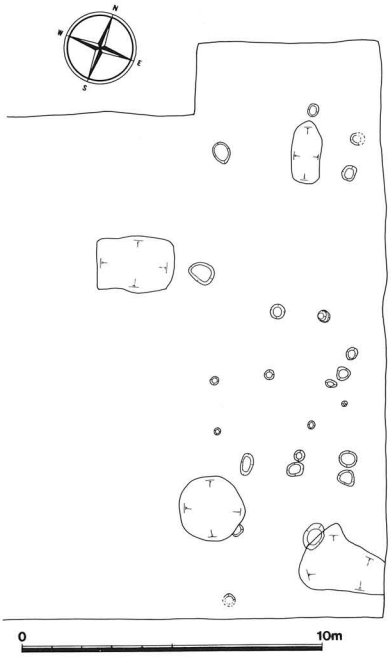


fig. 95　第２遺構面平面図

第３遺構面　弥生時代後期の竪穴住居址１棟、古墳時代の掘立柱建物１棟などを検出した。

ＳＢ01　調査区北西隅において検出された、南北5.3×東西5.6ｍの隅丸方形の竪穴住居址である。東辺部分を現代の井戸によって大きく削平されている。北西隅に140×170㎝、深さ30㎝ほどの四角い土坑が掘り込まれているほか中央部分にも80×40㎝の楕円形の土坑がある。

北東部分の床面に多量の土器が出土した。

建物21　調査区の中央～南部に位置する、３×３間以上の掘立柱建物である。柱間は、南北1.6ｍ、東西1.6ｍで、柱掘形は直径30～40㎝ほどの円形である。

建物22　調査区の南西部において柱穴３基２間分を検出した。柱間は2.0ｍである。南側の未掘部分に広がるようである。

出土遺物　遺物は、包含層および遺構埋土より、陶磁器、土師器、須恵器、弥生土器など、総量で

fig. 96　土器溜まり

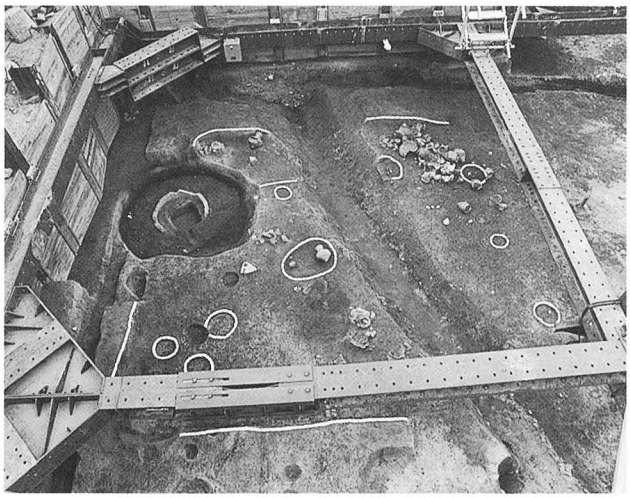


fig. 97　ＳＢ01

28ℓ入コンテナに約15箱の遺物が出土した。

その大部分を占めるのは、ＳＢ01および土器溜まりから出土した一括遺物である。これらの土器は、概ね弥生時代末から古墳時代初頭にかけての時期のものと考えられる。

3．まとめ

今回の調査においては、３面にわたる遺構面に、掘立柱建物、竪穴式住居、土坑、溝などの遺構が確認された。

また、北に存在する古墳群の広がりは認められなかったものの、かわりに弥生時代末から古墳時代初頭にかけての住居址や土器溜まりが検出され、多量の遺物が出土した。この地域における土器組成を知るうえで良好な資料になるものと思われる。

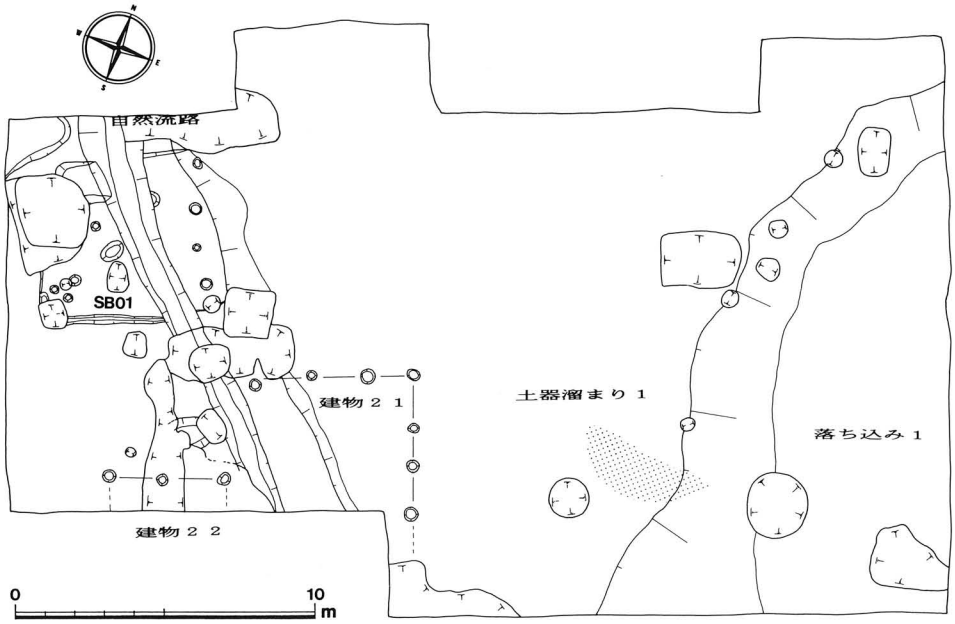


fig. 98
第３遺構面平面図

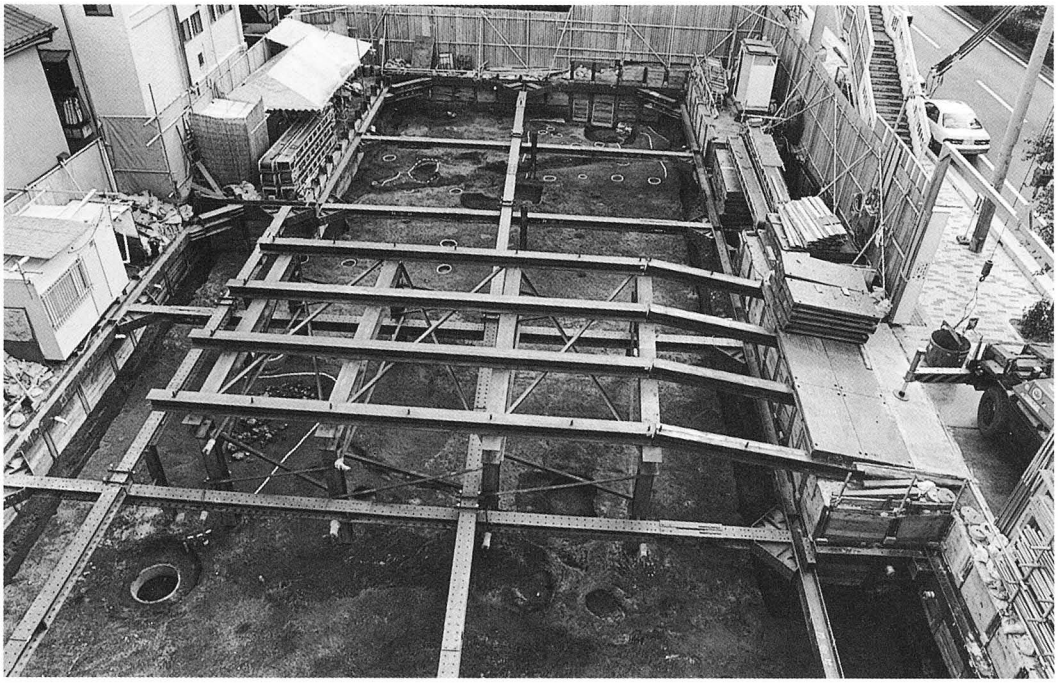


fig. 99
第３遺構面全景

11. 住吉宮町遺跡（すみよしみやまち）　第26次調査

1．はじめに

住吉宮町遺跡は、住吉川と石屋川に形成された標高約19m～28mの扇状地に位置する遺跡であり、旧住吉村に存在している。

これまでの調査では、古墳時代中期～後期には前方後円墳と考えられる坊ケ塚古墳の周囲から南側に広がる古墳群が存在することが判明している。

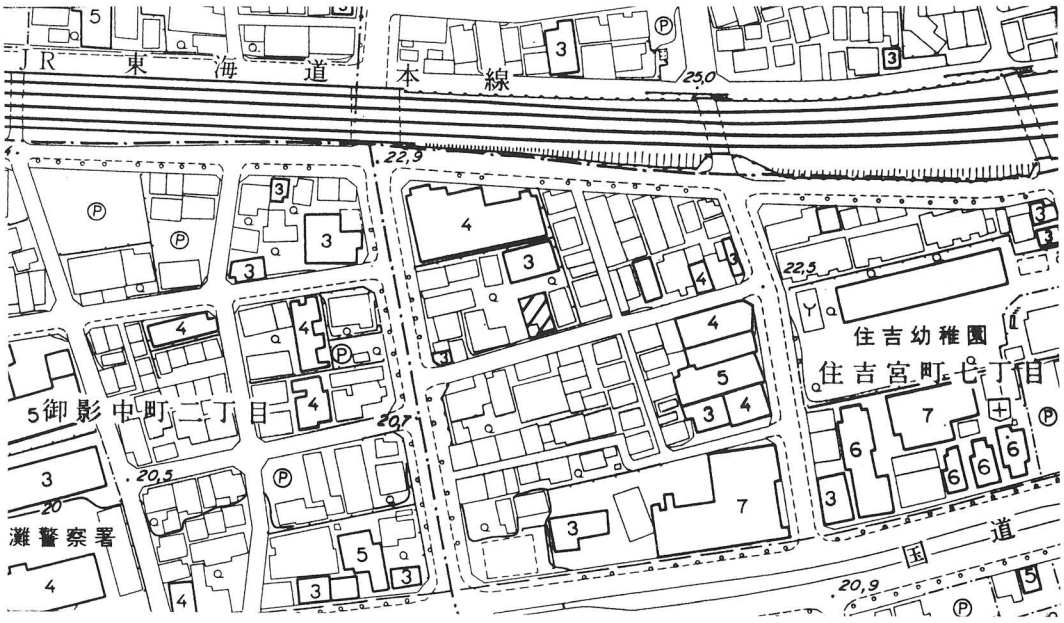


fig. 100
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

基本層序　基本層序は盛土、表土、淡灰褐色砂質土（中近世遺物包含層）、黄褐色砂質土（奈良時代遺物包含層）、灰褐色砂質土（古墳時代遺物包含層）、淡黒茶褐色砂質土・暗灰褐色砂質土～黄褐色砂質土である。

第1遺構面　中世の遺構面であり、土坑、ピットが確認された。

ＳＫ101　径約118cm×約88cm、深さ約10cmを測る不整円形の土坑である。土坑から多くの礫が出土した以外に遺物は確認していない。

第2遺構面　基本的に奈良時代の遺構面である。ただし、遺構面は東西方向へ緩やかに傾斜しており、最も標高の高い西端では、古墳時代後期の遺構面（第3遺構面）を同一遺構面で検出した。奈良時代の掘立柱建物や柵列等の他、古墳時代後期の竪穴住居等を確認している。

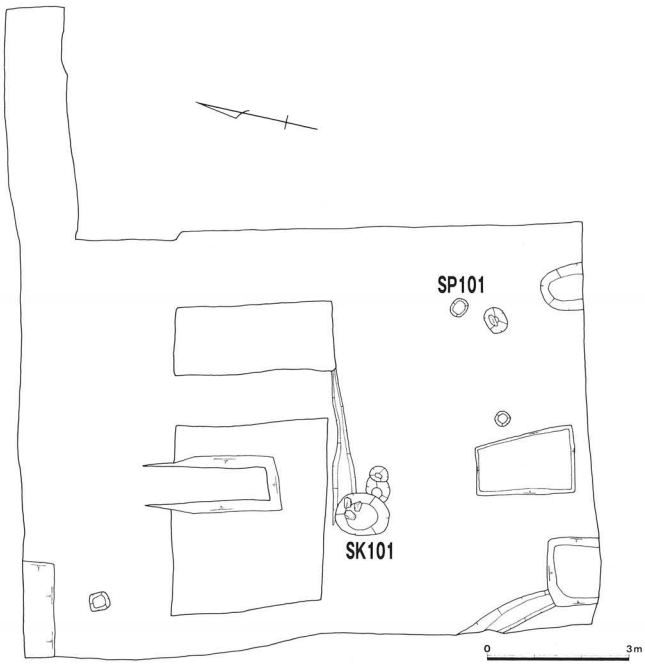


fig. 101　第1遺構面平面図

ＳＢ201　奈良時代で、1間×2間以上の

掘立柱建物である。柱穴の掘形は楕円形で、径約80cm×120cm、深さ約30cm～50cmを測る。柱間は東西約3.8m、南北約1.4mである。

ＳＢ202　調査区の東端で検出した、古墳時代後期の竪穴住居である。東西幅は約3.4mを測る。竪穴住居の上層から、須恵器の坏蓋等が出土している。

柵列201　調査区の中央付近から、柱穴と杭痕が南北方向に並ぶ、奈良時代の柵列を検出した。柱穴は径約50cm、深さ約20cm～35cmを測り、柱間は約1.8m～2.2mである。

柵列201　調査区の南側から、ほぼ南北方向に並ぶ奈良時代の柵列を検出した。柱穴は径約20cm、深さ約6cm～10cmを測り、柱間は約1.2m～1.6mである。

第３遺構面　古墳時代後期の遺構面である。主に柱穴を検出したが、建物等としての確認はできなかった。

ＳＲ301　調査地の西端から検出した。幅約2.3m、深さ約0.4mの流路である。中砂～粗砂が主に堆積している。

下　層　第３遺構面を形成する暗灰褐色砂質土から、少量の土師器片が出土している。その為トレンチを設定し下層の調査を行ったが、遺構は確認できなかった。

３．ま　と　め

今回の調査では中世後期、奈良時代、古墳時代後期の遺構が確認できた。

古墳時代後期　竪穴住居と多数の柱穴を確認している。ただし柱穴から建物等としてのまとまりは確認できなかった。調査地の東側に隣接した地域でも、古墳時代後期の竪穴住居と掘立柱建物が確認されている。

奈良時代　掘立柱建物、柵列の他、多数の柱穴を確認している。遺構の密度は最も高い。

中世　柱穴、土坑等を確認した。遺構の密度は希薄である。これまでの調査結果から、周囲には中世集落も存在し、広い範囲に遺構の散在する状況が確認されている。

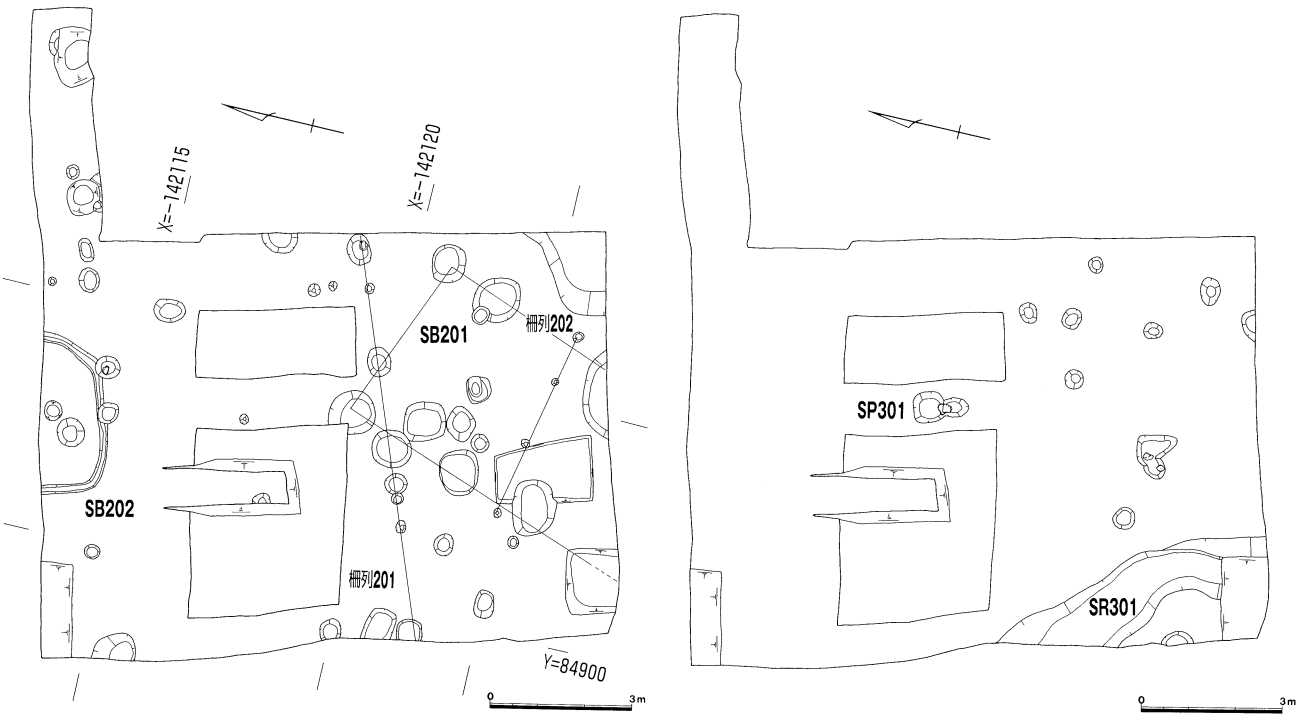


fig. 102　第２・３遺構面平面図

12. 住吉宮町遺跡（すみよしみやまち）　第27次調査

1. はじめに

住吉宮町遺跡は住吉川と石屋川が形成した複合扇状地上に立地する遺跡で、標高は約20mである。六甲山の南麓は早くから市街化が進み、埋蔵文化財の存在は現在でもよく分かっていないケースがある。住吉宮町遺跡も存在が明らかになったのは昭和60年のことであり、周知の遺跡となってからまだ年月が浅い。しかし市街地再開発に伴う発掘調査や阪神・淡路大震災の復興に伴う発掘調査が進み、今回で27回目の調査となった。

fig. 103
調査地位置図
1：2,500

2. 調査の概要

調査範囲は東西33m、南北23mのほぼ「L」字状であるが、遺構面までが深いために法面幅を大きく設定し、現地表面での掘削範囲は東西約40m、南北約30mである。調査区は東西方向の部分を南区、南北方向の部分を東区、東区の西隣にある突出部を北区とそれぞれ呼称した。

層序

扇状地特有の、細部によって土層の堆積が異なる状況であるが、概ね以下のようにまとめることができる。近現代の造成土・撹乱、江戸時代以降の旧耕作土の下には60～70cmの厚さで乳褐色系の洪水堆積層がある。この層は土質によって数層に細分できる。その下には黒褐色～茶褐色砂質土、黒色系の砂質土があり、同様黒色系の砂質土も土質によって数層に細分できる。さらにその下には再び黄褐色系の洪水堆積層がつづくが、特に北区を中心に複雑な堆積状況を呈しており、複数回の洪水の存在が推定できる。乳褐色系の洪水堆積層上が江戸時代、黒褐色～茶褐色砂質土上が奈良時代、黒色系の砂質土上が古墳時代、黄褐色系の洪水堆積層上が弥生時代の遺構面と考えられる。

第１遺構面　江戸時代の遺構面であるが、溝を１条、ピットを１基検出したのみである。

ＳＤ101　北区で検出した東西方向の溝である。長さ4.8m以上、幅60～80cm、深さ約10cmで、両側共に未調査部分へ延びている。断面の形状は浅い皿状で、埋土は淡灰色砂質土である。遺物は土師器片・須恵器片・瓦片が出土した。水田段差の下に位置する溝で、この溝を境界として北側の水田が１段高い。

ＳＰ101　ＳＤ101の東側底面で検出した円形のピットである。直径約40cm、深さ約10cmで、埋土は灰色砂質土である。遺物は土師器片・須恵器片が出土した。

第２遺構面　奈良時代の遺構面で、溝を１条検出した。

ＳＤ201　北区で検出した北西から南東方向の溝である。長さ5.9m以上で、両側共に未調査部分へ延びている。幅40～60cm、深さ20～30cmで、断面の形状は逆台形である。埋土は上部が黄灰褐色シルト、下部が茶灰褐色粗砂である。調査区周囲の地形の傾斜とは逆に底面は北西へ傾斜している。遺物は土師器片・須恵器片が少量出土した。

第３遺構面　古墳時代の遺構面で、土坑墓を１基、ピットを１基検出した。

ＳＴ301　南区の西端で検出した土坑墓である。墓坑は東西75cm、南北180cmの長方形であるが、後世に削平されて深さは５cmしか残っていなかった。埋土は茶灰褐色粗砂で、墓坑の形状から木棺の存在が推定できるが、棺材は完全に腐朽してしまったのか確認できなかった。遺物は土師器片・須恵器片が少量出土した。住吉宮町遺跡でこれまで確認されている古墳

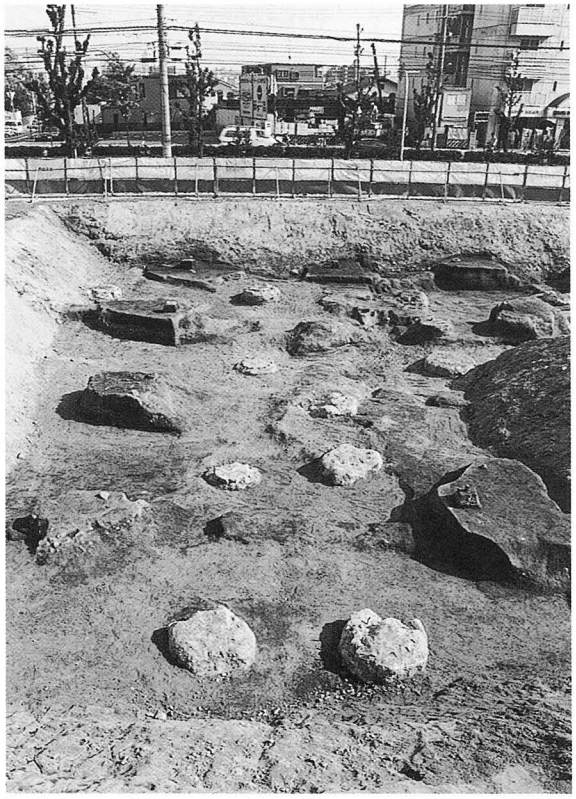


fig. 104　調査区全景

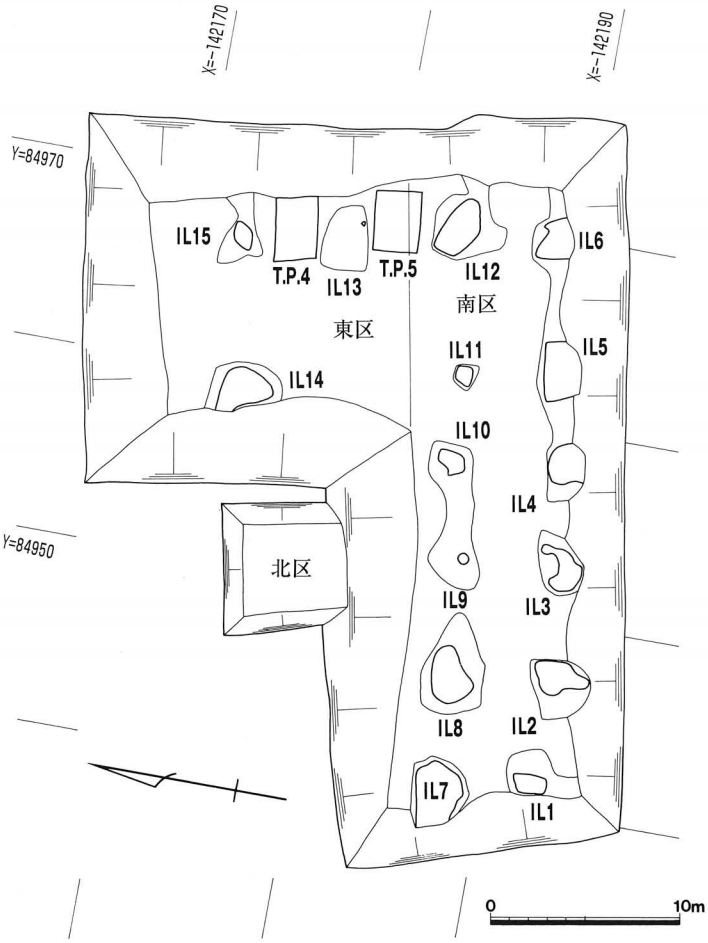


fig. 105　調査区平面図

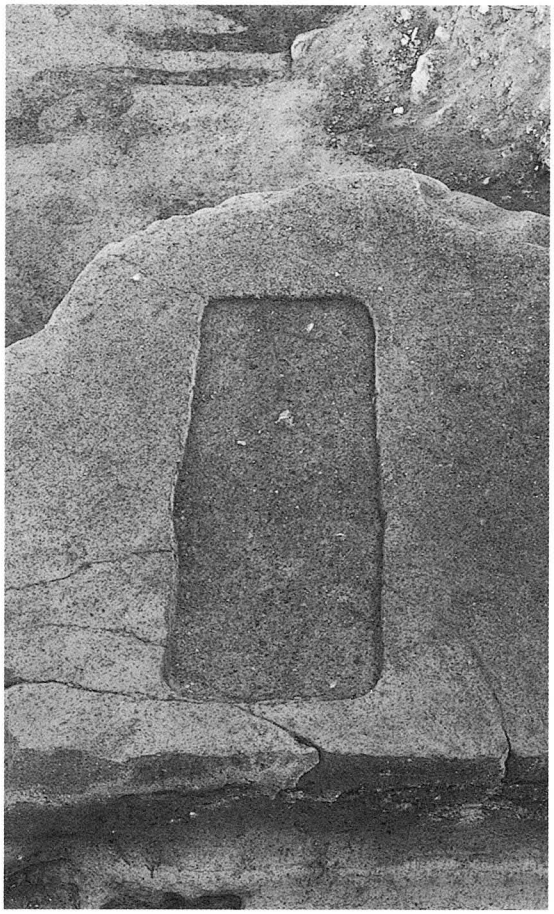


fig. 106　ＳＴ01

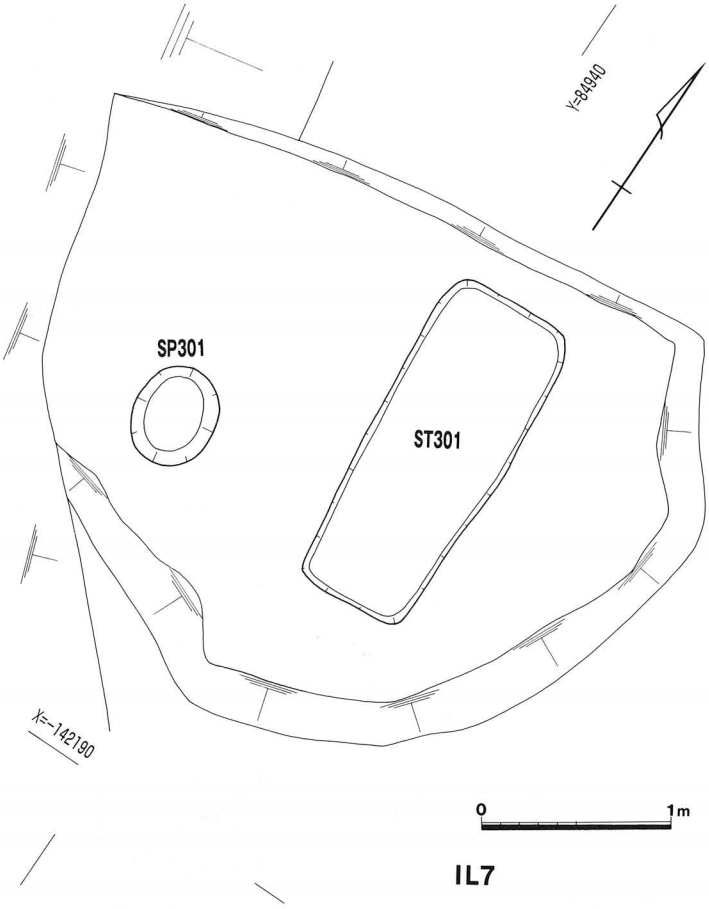


fig. 107　第３遺構面平面図

のように、この土坑墓にも周囲に溝や貼石が存在した可能性があるが、後世の削平および現代の撹乱で破壊されてしまったのか確認できなかった。したがって今回は土坑墓として取り扱った。

ＳＰ301　南区の西端で検出した楕円形のピットである。長径約50cm、短径約40cm、深さ15cmで、埋土は暗灰褐色粘性砂質土である。遺物は土師器片・須恵器片が少量出土した。

第４遺構面　弥生時代の遺構面で、竪穴住居を１棟、ピットを３基検出した。

ＳＢ401　南区の南辺西寄で検出した方形の竪穴住居であるが、住居の大半は法面下の工事影響範囲外であり、国土座標の方位から約45°振れている住居の隅の一つを検出したに過ぎない。北東辺は2.4m、北西辺は1.1mまでを確認した。深さは約10cmである。住居の角から北西辺にかけての位置には幅約10cm、深さ３cmの周壁溝が巡っている。床面の上で直径10～30cm、深さ約10cmの浅いピットを７基検出したが、主柱穴は法面下の位置にあるのか確認できなかった。埋土は住居本体が淡灰褐色砂質土、周壁溝が暗オリーブ灰色シルトである。遺物は埋土の上面から弥生時代後期の土器が出土したが、状況から判断して住居が埋まっていく過程で捨てられた物と考えられる。

ＳＰ401　南区の南西隅で検出した円形のピットである。直径約30cm、深さ15cmで、埋土は暗灰褐色砂質土である。遺物は出土しなかった。

ＳＰ402　ＳＰ301の南側で検出した円形のピットである。直径約50cm、深さ20cmで、埋土は暗灰褐色粘性砂質土である。遺物は弥生土器片が少量出土した。

ＳＰ403　　ＳＰ302に一部破壊される状態で検出した円形のピットである。直径約50cm、深さ約20cmで、埋土は暗灰色粘性砂質土である。遺物は弥生土器片が少量出土した。

3．まとめ

住吉宮町遺跡は近年急に調査事例が増加してきた遺跡で、埋没古墳群の発見など、通常の集落遺跡にはない特殊性を有している。ただ今回の発掘調査では遺構面の遺存状況が極めて悪く、検出した土坑墓も古墳であったかどうか判断がつかない。しかし第４次調査でも小規模な箱式石棺を確認しているなど、大きな墳丘を持たない埋葬施設が存在していることも事実である。従来今回の調査地点周辺が古墳群の西端付近になるであろうとの想定がなされていた。調査によって古墳群の範囲を確定することはできなかったが、埋葬地としてはまだ西方へ広がっていたことが考えられる。

弥生時代に関しても遺構面の遺存状況が悪いことは同様であるが、竪穴住居を確認したことにより、当時の集落の広がりを確認することができた。しかし敷地東隣の市道をはさんで向かいの第１次調査では鎌倉時代の遺構が確認されているが、今回の調査では遺構面の広がりは確認できなかった。鎌倉時代頃に相当する部分には厚く洪水堆積層が存在しており、遺構面はこの洪水層によって削られてしまった可能性が高い。

fig. 108　ＳＢ401

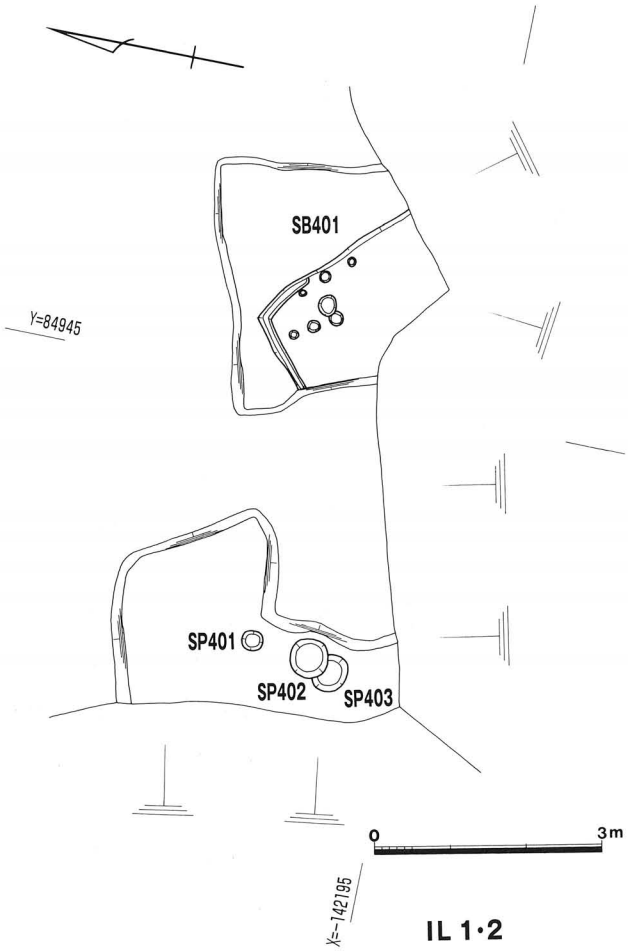


fig. 109　第４遺構面平面図

13. 住吉宮町遺跡（すみよしみやまち）　第28次調査

1．はじめに

住吉宮町遺跡は、これまでに27次にわたる発掘調査が実施されており、弥生時代～中世にいたる複合遺跡として周知されている。

近年調査数が増加しているが、昨年度に実施した第23次調査では、地震によって井戸枠の上半部が大きく倒れた状態で検出された奈良時代の井戸などを検出した。

今回の調査は、基礎部分において発掘届出書による工事影響深度（現地表下1.2m）までについて実施した。

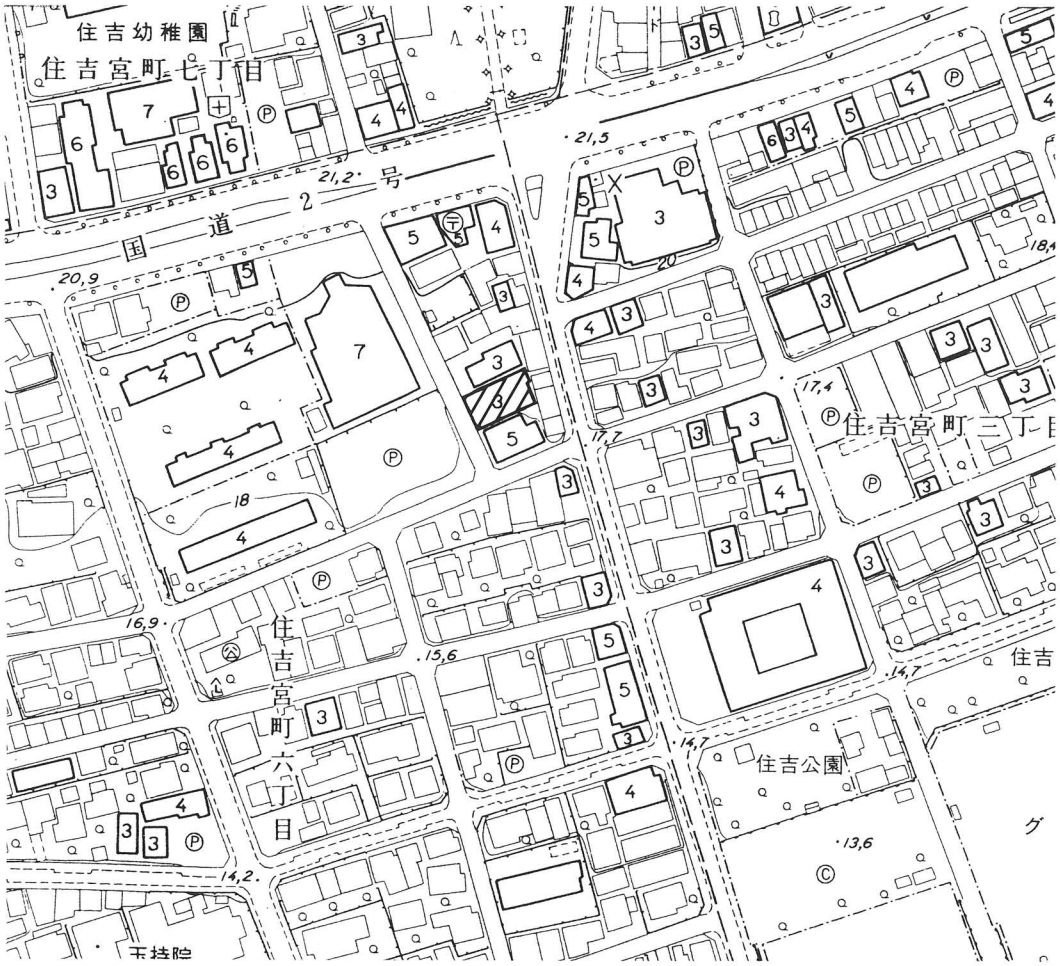


fig. 110
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

調査区は南・北2ケ所に分かれており、北側の調査区を1トレンチ、南側の調査区を2トレンチと呼称する。

1トレンチ　現地表下に約70cmの盛土が存在し、その下層に旧耕土、灰色～灰茶色系の細砂層が堆積している。調査区の中央やや西よりの約11㎡のみで遺構面を確認したが、東部は細砂層の途中で影響深度に達し、西部は大半が攪乱を受けていた。

検出遺構　検出した遺構は、溝1条、土坑2基、ピット5基で、大半が中世の遺構と考えられるが、SD01及び一部のピットの埋土が灰褐色細砂で、他の遺構が灰色細砂であることや切り合い関係をもつものもあり、時期差が考えられる。以下主な遺構について述べる。

SD01　幅22cm、深さ4～9cm、検出した長さ5.8mで、東側はさらに延びる。須恵器・土師器

が出土した。

ＳＸ01　幅70cm、長さ1.2m以上を測る。土師器の小片が出土した。

ピット　径15～30cmのピットを検出したが、ＳＰ01のみ須恵器片が１点出土した。ＳＰ01は径25cm、深さ５cmを測る。

２トレンチ　現地表下に約50～80cmの盛土が存在し、その下層に旧耕土、灰茶色系の細砂層が堆積している。遺構面は確認されず、また遺物も少量出土したのみである。

３．まとめ

今回は、工事影響深度までの限定された調査であったため、中世のものと思われる遺構をいくつか検出したにとどまった。よって当該期の本調査地の状況を明らかにするには至らなかっものの、周辺の調査結果から判断すれば、下層および未調査部分においても埋蔵文化財が存在することは確実である。

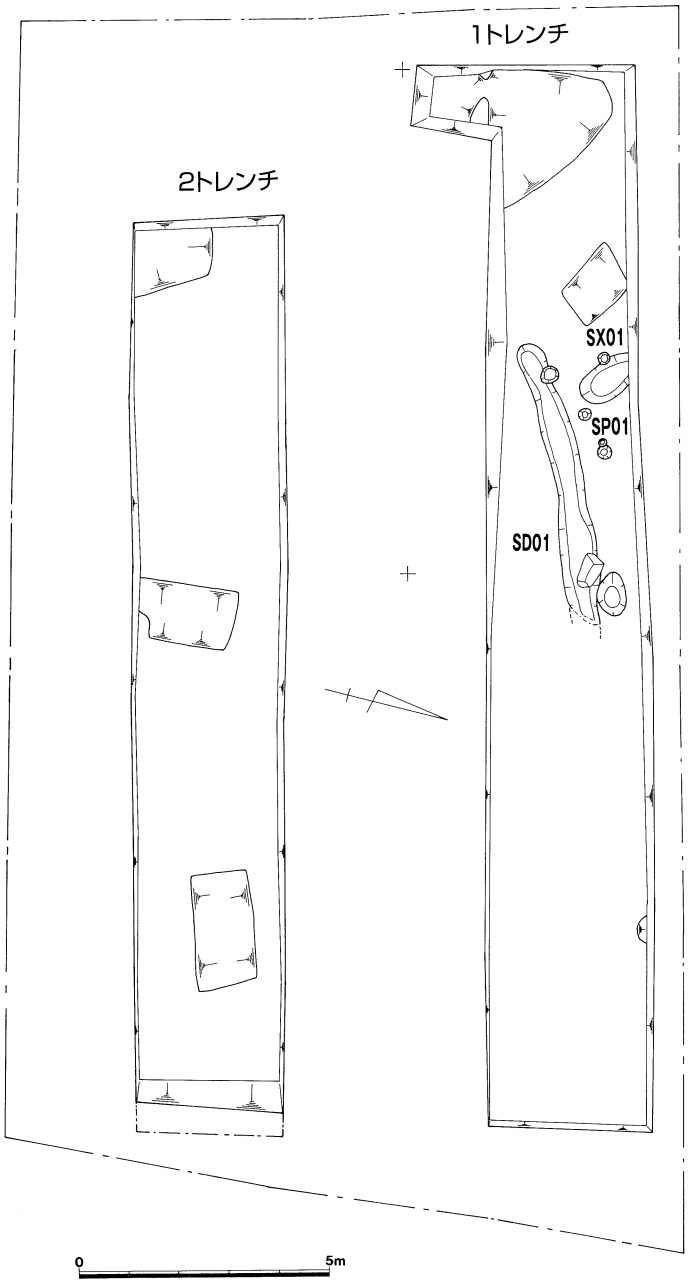


fig. 111　調査区平面図

14. 本庄町（ほんじょうちょう）遺跡　第6次調査

1. はじめに

本庄町遺跡は、六甲山麓から流れ出る芦屋川と高橋川に挟まれた平野の三角州帯及び自然堤防帯に立地する。当遺跡の一部は既に兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会によって発掘調査が行われており、縄文時代後期のドングリ貯蔵穴、弥生時代の水田などが確認されている。

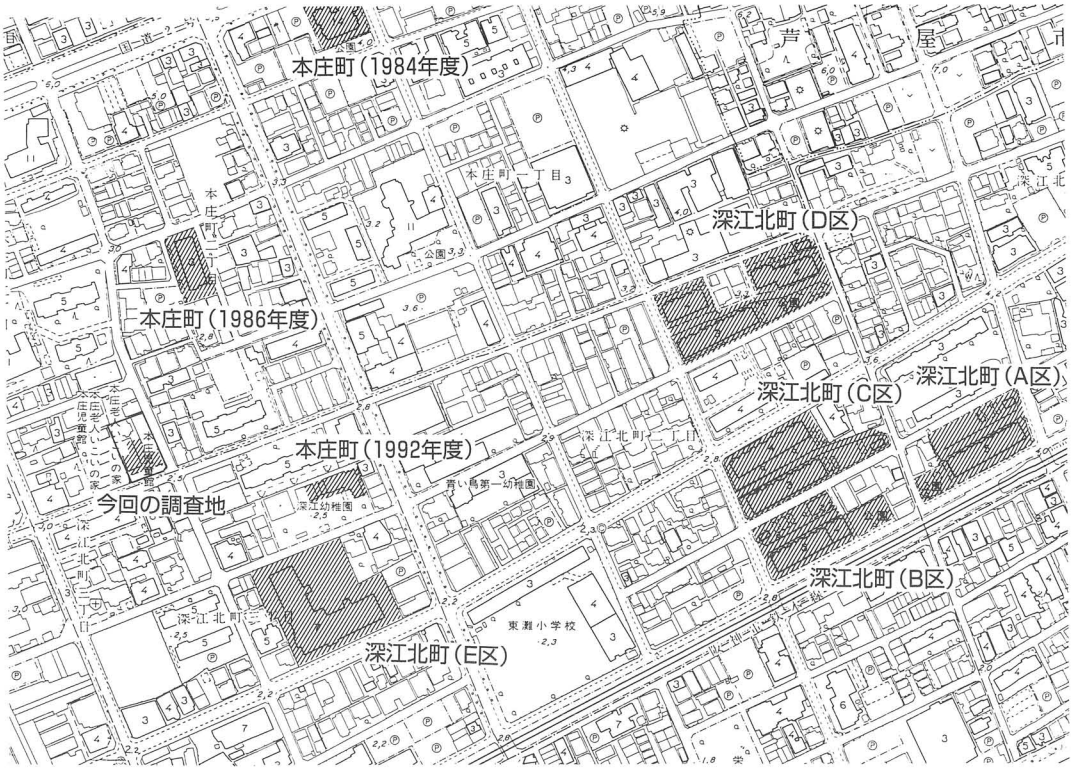


fig. 112
調査地位置図
1：2,500

	遺跡名	調査年次	調査機関	遺構・遺物	文献
1	本庄町	1984年	(財)古代学協会	弥生時代前期末の水田。縄文時代晩期の土器。	片岡ほか1985年
2	本庄町	1986年	兵庫県教育委員会	縄文時代後期初頭のドングリ貯蔵穴5基。弥生時代後期の水田。縄文時代前～後期の土器。	別府ほか1991年
3	本庄町	1992年	神戸市教育委員会	縄文時代晩期の土器。古墳時代の田下駄。奈良・平安時代の水田。	斎木1995年
4	深江北町（A地区）	1984年	兵庫県教育委員会	弥生時代後期～平安時代後期の柱穴。土錘、飯蛸壺等の漁具。	山下ほか1988年
5	深江北町（B地区）	1984年	兵庫県教育委員会	弥生時代中期～平安時代初期の土器。時期不明の杭列と土坑。	山下ほか1988年
6	深江北町（C地区）	1985年 1986年	兵庫県教育委員会	弥生時代中・後期の溝、土坑。古墳時代初頭の径7～8mの円形周溝墓11基と土器棺墓。古墳時代後期の竪穴住居3基。奈良時代～平安時代初頭の掘立柱建物3棟。銅製銙帯。小銅鏡。	山下ほか1988年
7	深江北町（D地区）	1984年	兵庫県教育委員会	奈良時代以降の水田。	山下ほか1988年
8	深江北町（E地区）	1989年	兵庫県教育委員会	弥生時代後期後半の掘立柱建物2棟、土坑多数。中世の掘立柱建物、土坑、水田。埴輪片1点。	村上ほか1991年

本庄町遺跡発掘調査一覧表

今回の調査は震災復興事業マンション新築に伴って行った。調査地に最も近い本庄町遺跡（1986年度）は北へ150mの位置にあって、砂堆後背湿地であり、南東へ150mの位置には深江北町遺跡（E地区）があり、これもまた南側へ広がる砂堆の後背湿地である。これら2地点の中心に位置する今回の調査地もまた砂堆の後背湿地と考えられた。

基本層序　現地表から下に大きくⅧ層に分けられる。

Ⅰ層：現代盛土。

Ⅱ層：近現代耕作土。２層に細分可能。Ⅱａ層；耕作土。Ⅱｂ層；床土。

Ⅲ層：近世堆積土。層下半には薄い洪水砂が認められる。土器、陶磁器を若干含む。

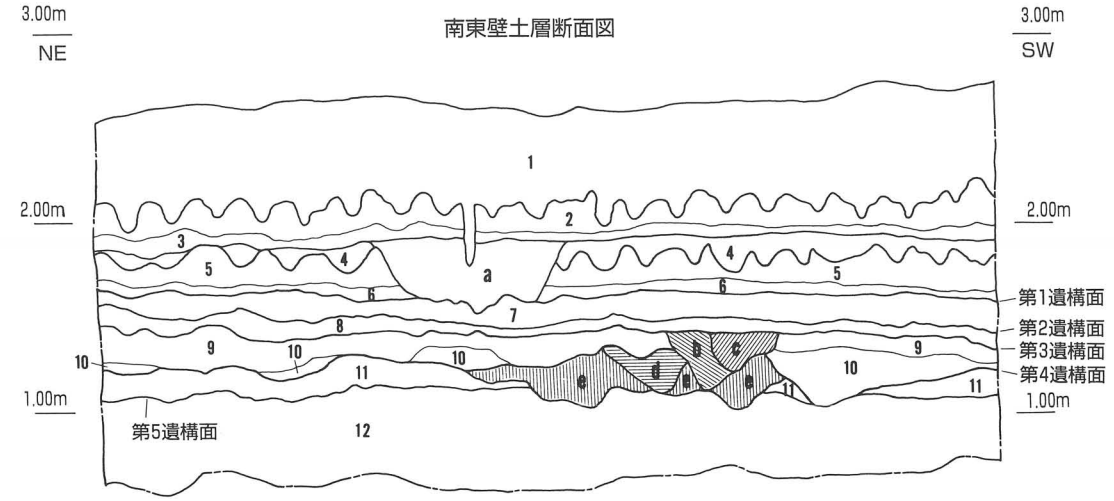
Ⅳ層：近世耕作土。２層に細分可能。Ⅳａ層；耕作土。Ⅳｂ層；床土。

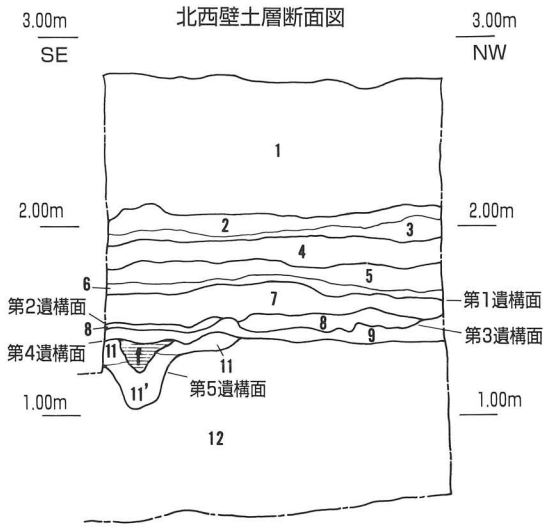
Ⅴ層：古墳時代末～中世堆積土。層下半には薄い洪水砂が認められる。古墳時代末～中世の土師器、須恵器、瓦器などの破片を多く含む。上面が第１遺構面。

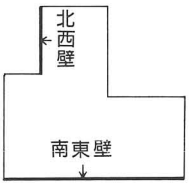
Ⅵ層：古墳時代末耕作土。土師器、須恵器などの破片を少量含む。上面が第２遺構面。

Ⅶ層：縄文時代後期～古墳時代堆積土。３層に細分可能。Ⅶａ層；古墳時代堆積土。古墳時代の須恵器、土師器を少量含む。Ⅶｂ層；洪水砂層。Ⅶｃ層；縄文時代後期～弥生時代末堆積層。縄文土器、弥生土器を少量含む。Ⅶａ層上面が第３遺構面。Ⅶｃ層上面が第４遺構面。

Ⅷ層：無遺物砂層。上面が第５遺構面。







〔土層注記〕

1. 淡褐色砂（緑色粘土ブロック混入）―Ⅰ層
2. 暗灰色粘質土―Ⅱa層
3. 灰色砂質土―Ⅱb層
4. 緑灰色砂質土―Ⅲ層
5. 緑灰色粘質土―Ⅳa層
6. 暗緑灰色砂質土―Ⅳb層
7. 暗緑灰色砂質土（砂多く混入）―Ⅴ層
8. 暗灰色砂質土―Ⅵ層
9. 黒色粘質土（砂粒多く混入）―Ⅶa層
10. 黄褐色粗砂―Ⅶb層
11. 黒色粘土
11'. 黒色粘土（砂多く混入）―Ⅶc層
12. 褐色細砂―Ⅷ層

a. 灰色砂質土―近現代土坑
b. 黄灰色粗砂（暗褐色細砂・黒色粘土ブロック混入）―SD301B
c. 黄灰色粗砂―SD301A
d. 褐色砂―SD403
e. 灰褐色砂（黒色土混入）―SD401
f. 黄褐色粗砂―SX402

fig. 113　調査区東壁・北西壁土層断面図

fig. 114　第１・２遺構面平面図・断面図（平面図１：200、断面図１：80）

近世～現代耕作地遺構　Ⅱ層上面で、近現代の畝跡、Ⅳ層上面で近世の畝跡が存在する。いずれも調査区壁面の土層断面によって確認した。調査区南東壁で凹凸のある畝の横断面、南西壁で水平な土層断面が見られ、北に向かって西に振った方向の畝であって、現在の街割りの方向に沿ったものであったことがわかる。いずれの畝遺構も洪水によって廃絶する。

第１遺構面　本来はⅤ層上面に形成された遺構であるが、Ⅴ層上面では検出が難しかった為に、後述するⅥ層上面において第２遺構面の遺構と同一面で検出した。Ⅴ層には、古墳時代末～中世の遺物を含むが、近世陶磁器を含まないため、中世以後、近世にⅣ層の耕作土層が形成されるまでの間の時期の所産である。

ＳＫ101　調査区北半で検出した。一辺1.2ｍの隅丸方形。深さ50㎝。埋土はⅤ層の土と似ており、灰色粘質土に多く砂が混入したものの単層である。湧水点まで掘り抜かれているため井戸と考えられる。井戸枠等の施設は遺存していなかった。遺物は土師皿の小破片が１点出土した。

ＳＫ102　調査区東半で検出した。1.2×0.9ｍの隅丸長方形で、深さ60㎝。埋土の状況はＳＫ101

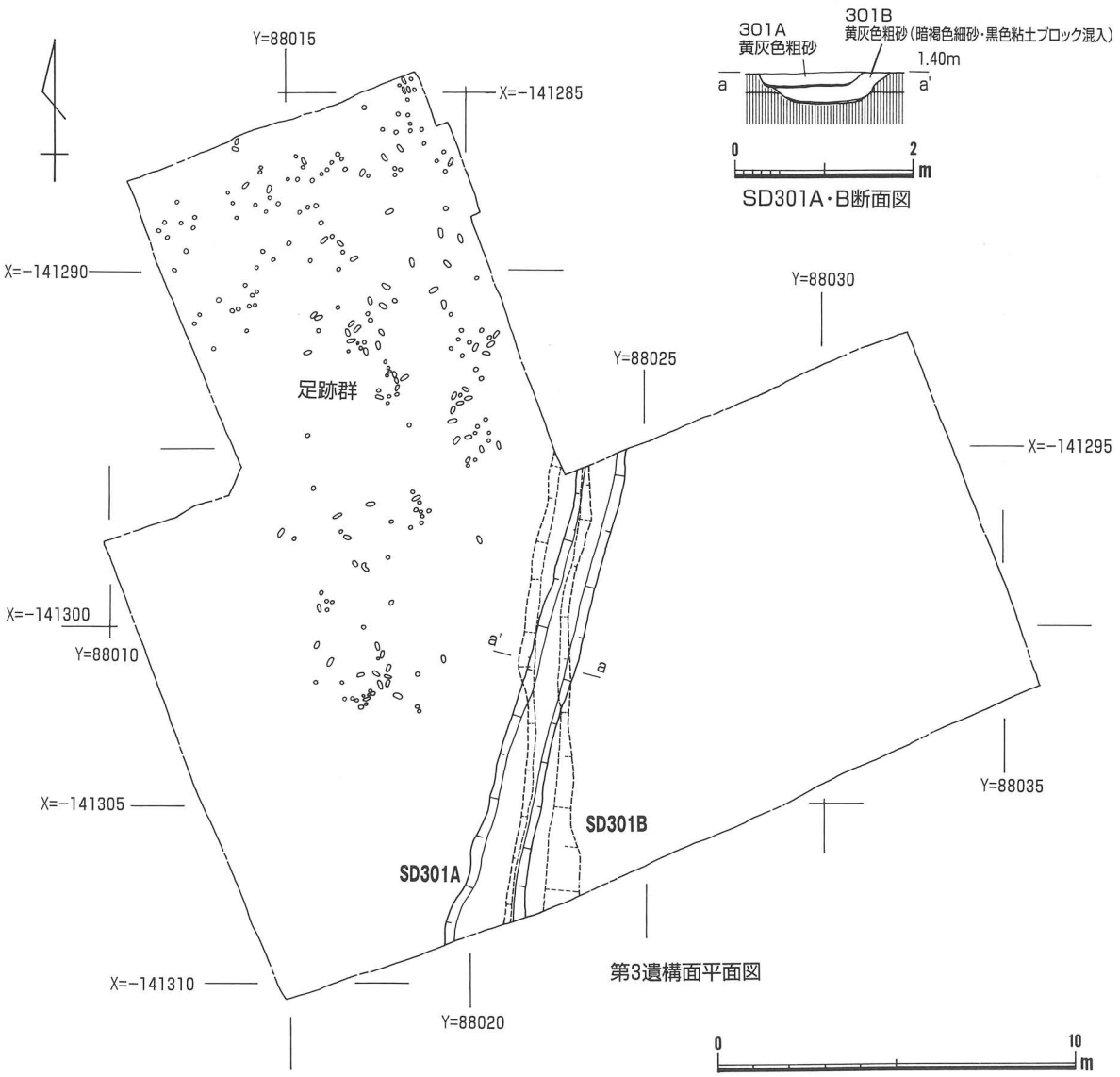


fig. 115　第３遺構面平面図・断面図（平面図１：200、断面図１：80）

と同様であって、湧水点まで掘り抜かれており、井戸と考えられる。遺物は出土しなかった。

第２遺構面　Ⅵ層上面で検出した。古墳時代末～中世の間のある時期の水田遺構である。調査区全体に、ヒト、獣の足跡の他に棒で突いた様な小円孔、幅 20㎝の浅い溝数条、小ピット２個があり、それらはⅤ層下部に見られる洪水砂が貫入した状態で検出できた。足跡は調査区北半部に多く見られた。溝の方向は北に向かって西に振っており、水田の方向は現在の街割りに沿ったものである。畦畔は検出できなかった。

第３遺構面　Ⅶａ層上面で検出した。古墳時代後半～末の間のある時期の水田遺構である。溝１条（ＳＤ301）とヒト、獣の足跡などが検出できた。それらはⅥ層下部に見られる洪水砂によって埋没していた。

ＳＤ301　調査区の中央を南北に走る溝である。一度流れを付け替えており、先行する溝を301Ｂ、それが埋没してから方向を若干振って掘られた溝を301Ａとする。いずれの溝も南北の高低差はほとんどないが、わずかに南が低い。

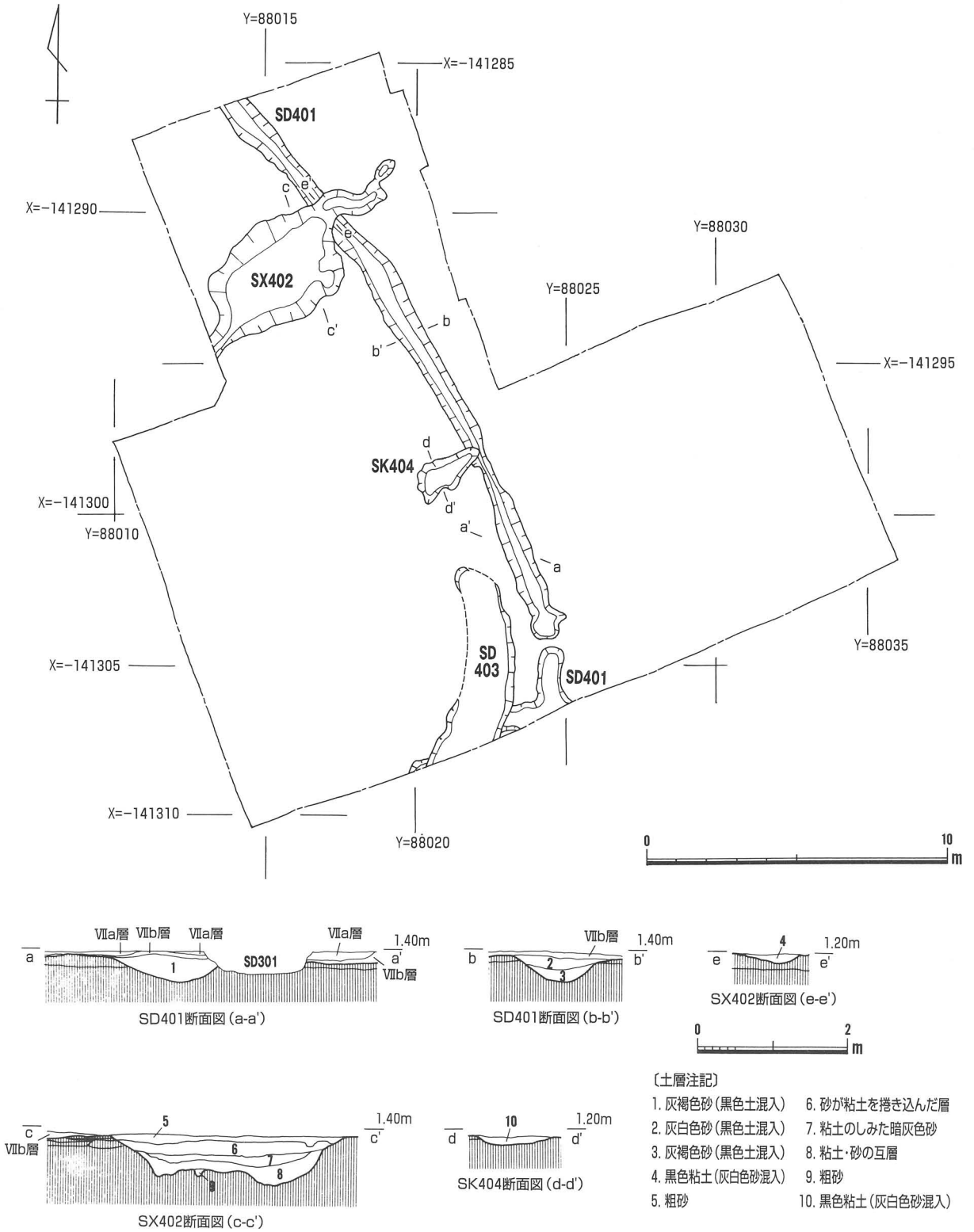


fig. 116　第4遺構面平面図・断面図（平面図1：200、断面図1：80）

301Aは幅1.5m、深さ15cmで、底が平たい。埋土は、底に若干薄く黒色粘質土の堆積があるが、ほとんどが粗い黄灰色砂で洪水によって埋没したと考えられる。遺物は土師器小型壺のほか土師器の破片が少量出土した。

301Bは幅1.5m、深さ35cmで、底は301Aに比べて若干丸い。埋土は、底に薄く黒色粘

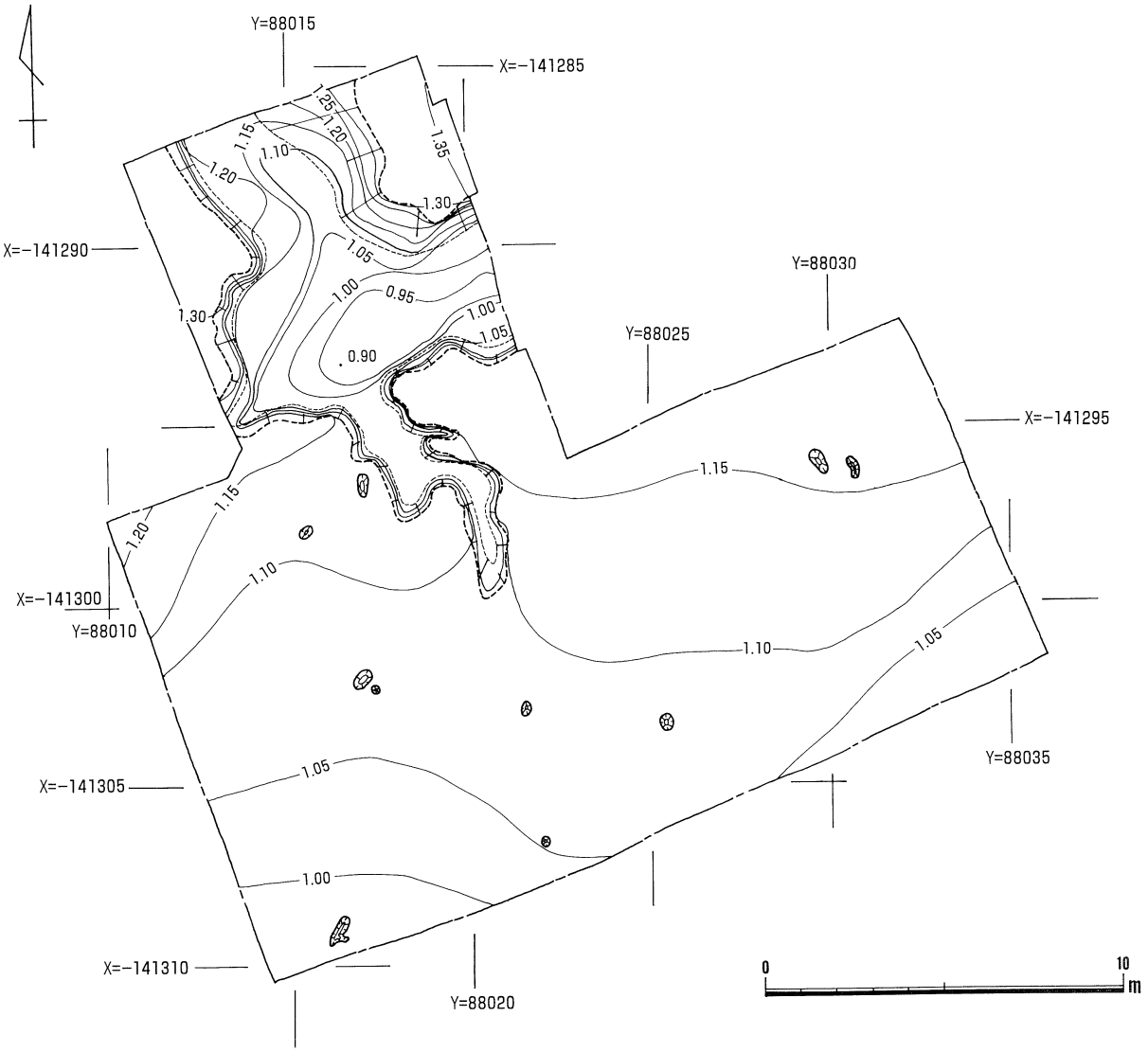


fig. 117　第５遺構面平面図（１：200）

質土の堆積があり、それ以上は黄灰色粗砂、暗褐色細砂が互層に堆積しながら、ときおり黒色粘土ブロックが混入するものである。遺物は土師器甕や軽石のほか土師器の破片が少量した。また、弥生土器の壺の底部も混入していた。

ＳＤ301の東側では全く足跡が検出されないことから、この溝は水田の東側を区画する溝の可能性がある。

第４遺構面　本来はⅦｃ層上面に形成された遺構であるが、Ⅷ層上面で検出した。弥生時代末の溝２条（ＳＤ401、403)、溜め池状土坑（ＳＸ402)、土坑（ＳＫ404）が検出できた。それらは、洪水砂層であるⅦｂ層によって埋没していた。遺構の切り合い関係から、ＳＤ401はほかの遺構よりも先行するものである。

ＳＤ401　調査区の中央を北に向かって西に振った方向に走るほぼ直線的な溝である。調査区南端付近で一旦途切れ、30cmの間をおいて再び始まるやいなやすぐ南西方向に屈曲する。幅１ｍ、深さ35cmで底が丸い。埋土は褐灰色砂に黒色土が混入するものである。溝の南北の高低差はほとんどないが、わずかに南が低い。遺物は弥生土器の破片が少量出土した。

ＳＸ402　調査区北半で検出した径３～４ｍ、深さ65cmの不整形土坑に幅70cmの溝が北東と南西に取りつく遺構である。ＳＤ401を切って形成される。底は湧水点に達し、常に水が湧き出る状況である。埋土は粘土と砂の互層となっており、水が流れている時と枯れた時があったようである。溝が両脇に取りついていることから、溜め池として使われたと考えられる。また、土坑がかなり埋まって機能を果たさなくなった後、窪んだ部分に弥生時代末の壺、高杯が遺棄された状態で出土した。その他、弥生土器の小破片が少量出土した。

ＳＤ403　調査区南半で検出した幅２ｍ、深さ10cmの浅い南北方向の溝である。ＳＤ401を切って形成される。遺物は弥生土器の壺の破片が１点のみ出土した。

ＳＫ404　調査区中央で検出した径１～２ｍ、深さ10cmの浅い不整形土坑である。ＳＤ401を切って形成される。遺物は出土しなかった。

第４遺構面では耕作地は確認できなかったが、溝、溜め池状土坑の検出から、耕作の水利に関係する遺構群と考えられる。

第５遺構面　Ⅷ層上面で検出した。調査区南半で径30～70cmのピットをいくつか検出したほか、北半で不整形な広い範囲で深さ40cmほどの窪みを検出した。この窪みにもⅦｃ層が堆積しており、その中より縄文後期の深鉢が出土した。よって、Ⅶｃ層は縄文後期より堆積が始まったと考えられ、Ⅷ層には遺物が含まれないことから、縄文時代後期以前と以後では周囲の環境に大きな変化があったと考えられる。

出土遺物　出土した遺物のうち、実測可能な遺物については実測し、観察結果は表にまとめた。

３．ま　と　め

縄文時代後期以降、現代に至るまで、土層断面において７面の遺構面を確認し、そのうち中世以前の５面について平面的な調査を行った。その結果、縄文時代後期において初めて文化面が認められ、その後洪水や堆積、盛土を繰り返しながら、弥生時代末に耕作関係の水利施設、古墳時代後半～末に水田と区画溝、古墳時代末～中世に水田、中世以降に井戸をもつ生活面、近世に耕作地、近現代に耕作地という順に文化面が形成されたことが明らかとなった。つまり、本庄町遺跡の今回の調査地は有史以来耕作地として機能してきた土地であって、現代になって初めて宅地となったのである。

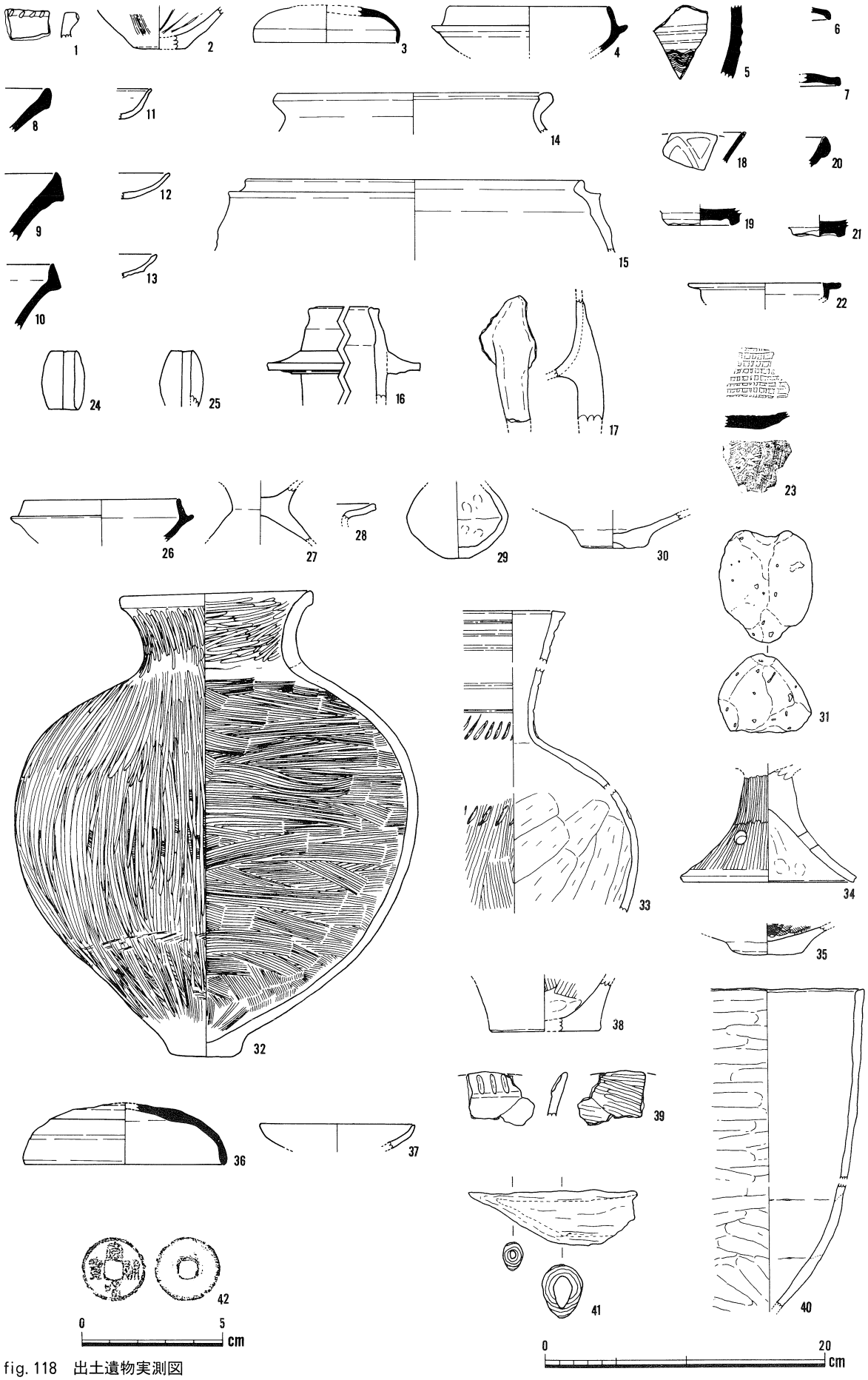
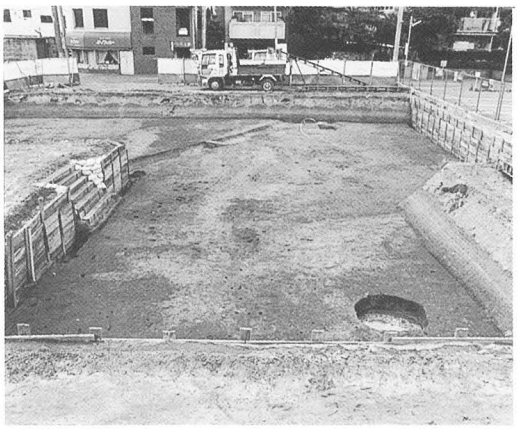


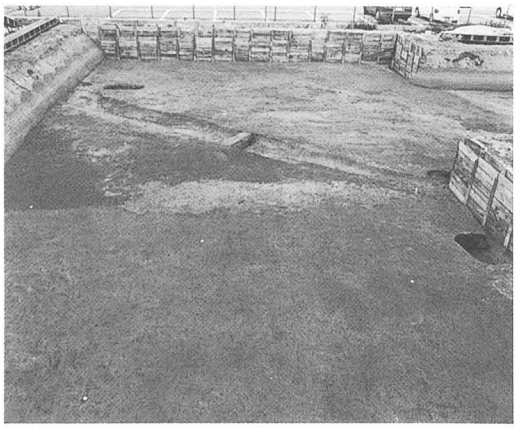
fig. 118　出土遺物実測図

	種　類	器　種	色　調	胎　　土	形態の特徴	技法の特徴	法量（cm）	出土遺構	備　考
1	弥生土器	甕・口縁部	淡橙色	１㎜未満の橙色粒多く含む。	外反する口縁端部に刻み。			Ⅴ層	
2	弥生土器	甕・底部	暗褐色	１㎜未満の長石、チャート多く含む。	狭い平底。	外面タタキ。内面板ナデ。	底径：4.0 残存高：3.0	Ⅴ層	底部１／４周残存。
3	須恵器（古墳）	杯蓋	淡灰色	１㎜粒のチャート含む。	口縁部と天井部の境の稜は不明瞭。	天井部ヘラ切りの後ナデ。	口径：10.5（復元） 残存高：2.6	Ⅴ層	口縁部１／６周残存。
4	須恵器（古墳）	杯身	灰色	１㎜粒のチャート含む。	内傾ぎみの口縁。	ナデ。	口径：11.5（復元） 受部径：14.0（復元） 残存高：3.3	Ⅴ層	受部１／８周残存。
5	須恵器（古墳）	壺または甕・頸部	灰色	１㎜未満の長石含む。	２条の低い凸帯と波状文。	ナデ。	器壁厚：0.7	Ⅴ層	
6	須恵器（奈良）	杯蓋	灰色	㎜未満の長石含む。	口縁端部は下方に屈曲。	ナデ。		Ⅴ層	
7	須恵器（奈良）	杯蓋	灰色	㎜未満の長石含む。	口縁端部は「て」字状に屈曲。	ナデ。		Ⅴ層	
8	須恵器（東播系）	片口鉢・口縁部	灰白色	１㎜未満の長石、チャート多く含む。	口縁端部が立ち上がりぎみに肥厚する。	ナデ。	残存高：3.0	Ⅴ層	
9	須恵器（東播系）	片口鉢・口縁部	灰白色	１㎜未満の長石、チャート多く含む。	口縁端部が肥厚し、上下につまみ出される。	ナデ。	残存高：4.7	Ⅴ層	
10	須恵器（東播系）	片口鉢・口縁部	灰白色	１㎜未満の長石、チャート多く含む。	口縁端部が屈曲して上方に立ち上がる。	ナデ。	残存高：4.5	Ⅴ層	
11	土師器	杯または皿	淡橙色	１㎜未満の長石含む。	口縁端部が外反し、内面に１条の沈線。		残存高：2.2	Ⅴ層	
12	土師質土器	皿	淡橙色	１㎜未満のチャート含む。	内湾する口縁。		残存高：1.8	Ⅴ層	
13	土師質土器	皿	橙色	１㎜未満の長石含む。	口縁部と底部の境に段を有する。	口縁部外面に強いナデ。底部に指頭圧痕。	残存高：1.7	Ⅴ層	
14	土師質土器	羽釜・口縁部	橙色	１㎜未満の細かい砂粒含む。	口縁端部内面が肥厚。	ナデ。	口径：20.0（復元） 残存高：2.8	Ⅴ層	外面に煤付着。口縁部１／10周残存。
15	土師質土器	羽釜・口縁部	淡橙色	１㎜未満の石英、チャート多く含む。	口縁部と鍔の間は短く、口縁端部は外反。	体部に指頭圧痕。	口径：24.0（復元） 残存高：5.2	Ⅴ層	外面に煤付着。口縁部１／12周残存。
16	瓦質土器	羽釜・口縁部	灰～橙色	１㎜未満のチャート多く含む。	口縁部内外面に強いナデによる１段の屈曲。	鍔下半及び体部上半にケズリ。	残存高：6.3	Ⅴ層	
17	瓦質土器	羽釜・脚部	灰～橙色	１㎜未満のチャート多く含む。	体部下半に踏ん張るように断面円形の脚が取りつく。	ナデ。	残存高：9.0	Ⅴ層	脚部下半破損。
18	青磁	碗・口縁部	緑黄色		口縁端部はやや外反ぎみ。外面に鎬蓮弁文。		残存高：2.0	Ⅴ層	
19	青磁	底部	緑黄色		短い高台。釉は外面及び内面の一部にかかる。	削りだし高台。	高台径：5.5 残存高：1.2	Ⅴ層	
20	白磁	碗・口縁部	乳白色		口縁端部粘土帯貼り付け。	全体に貫入。	残存高：2.0	Ⅴ層	
21	白磁	碗・底部	乳白色		高台畳付部分が４カ所を残して浅く削られる。	削りだし高台。全体に貫入。	高台径：4.0 残存高：1.2	Ⅴ層	
22	灰釉陶器	皿・口縁部	黄灰色		「て」字状に屈曲する口縁。内面にのみ釉がかかる。		口径：11.0（復元）	Ⅴ層	口縁部１／８周残存。
23	陶器（瀬戸・美農系）	おろし皿	灰白色	砂粒ほとんど含まず。	内面底部に格子状の沈線。	底部外面に糸切り痕。	器壁厚：0.7	Ⅴ層	
24	土錘		灰白色	１㎜未満の長石、チャート多く含む。		外面に指頭圧痕。内面に縦方向の擦痕。	長さ：4.2 幅：3.0（復元） 孔径：1.6（復元）	Ⅴ層	
25	土錘		赤褐色	１㎜未満の長石、チャート多く含む。		内面に縦方向の擦痕。	残存長：3.9 幅：3.0（復元） 孔径：1.2（復元）	Ⅴ層	
26	須恵器（古墳）	杯身	灰色	砂粒ほとんど含まず。	内傾ぎみの口縁。	ナデ。	口径：11.0（復元） 受部径：13.0（復元） 残存高：3.0	Ⅵ層	受部１／８周残存。
27	土師器	高杯	橙色	１㎜未満の長石、チャート多く含む。	脚部は大きく外へひらく。		残存高：3.5	Ⅵ層	弥生土器鉢の可能性もある。
28	土師器	甕・口縁部	橙色	１㎜未満の長石含む。	外方に屈曲してひらく口縁。	口縁部内側に強いナデ。	残存高：1.0	301Ｂ	内側に煤付着。
29	土師器	小型壺	橙色	１㎜未満の長石含む。	平底ぎみの底部と算玉状にゆるく屈曲する体部。	内面に指頭圧痕。	胴部最大径：7.2 残存高：5.2	301Ａ	
30	土師器	壺・底部	淡褐色	１～２㎜の長石、チャート、石英多く含む。	輪台底部。	ナデ。	底径：4.8 残存高：2.5	301Ｂ	
31	軽石		白色				8.0×6.7×5.6	301Ｂ	３カ所に紐擦れの痕跡。
32	弥生土器	壺	淡橙色	１㎜未満の長石、チャート多く含む。	狭い平底。胴部上半で最大径になる。単純口縁。	外面はハケメ後ミガキ。内面は口縁部ミガキ、胴部以下ハケメ。外面胴部下半にタタキ痕跡。	口径：13.7 胴部最大径：28.5 器高：33.0	402	ほぼ完形。
33	弥生土器	壺	橙色～暗褐色	１～２㎜の長石、チャート、石英多く含む。	頸部外面に数条の凹線文と刻み目文。胴部に刻み目文。	外面胴部はハケメ。内面は胴部以下でケズリ。	残存高：17.0	402	接合破片少ない。
34	弥生土器	高杯・脚部	橙色	１㎜の長石多く含む。	末広がりの脚部に３方向の小円孔。	外面は縦方向のミガキ。	脚裾径：13.0（復元） 残存高：7.5	402	
35	弥生土器	甕・底部	淡褐色	１～２㎜の長石、石英多く含む。	平底。	外面はナデ。内面はハケメ。	底径：5.0 残存高：2.0	403	
36	須恵器（古墳）	杯蓋	灰色	１㎜未満の長石含む。	口縁部と天井部の境は１条の凹線。	天井部の½反時計回りの回転ヘラケズリ。	口径：14.5（復元） 残存高：4.4	Ⅶ層	口縁部１／６周残存。
37	土師器	高杯	暗褐色	１㎜未満の長石わずかに含む。		ナデ。	口径：11.0（復元） 残存高：1.7	Ⅶ層	口縁部１／８周残存。
38	弥生土器	甕・底部	褐色	１㎜未満の長石多く含む。	平底。	内面はハケメ。	底径：8.0 残存高：3.5	Ⅶ層	外面煤付着。底部１／３周残存。
39	縄文土器	口縁部	暗褐色	１㎜未満の長石、チャート含む。	口縁部内面に刻み。	外面ミガキ状のナデ。	残存高：3.0	Ⅶｃ層	
40	縄文土器	深鉢	暗褐色	１㎜未満の長石、チャート含む。	単純口縁。	外面ミガキ状のナデ。内面ナデ。内面に粘土紐接合痕。	残存高：23.0	Ⅶｃ層	
41	木製品	石突状加工品			槍の石突状の形態で内側をくり抜く。		残存長：12.0 幅：4.0×3.0	Ⅶ層	
42	銭貨	宣和通寶	宣和通寶は北宋銭で、初鋳は1119年。通常北宋銭は直径24㎜を越えるのに対して、本出土品は23㎝であるうえ、文字の鋳上がりが不明瞭なことから、模鋳銭と見られる。				直径：2.3 孔径：0.6	Ⅴ層	

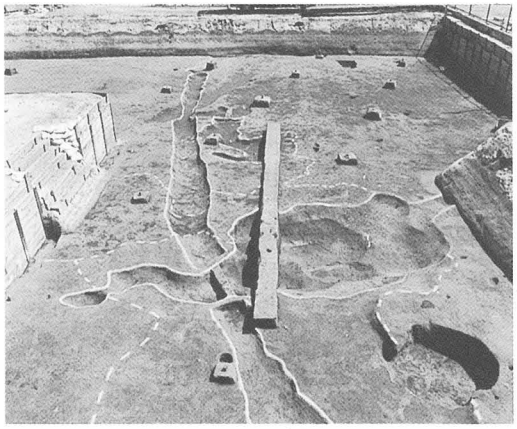
本庄町遺跡出土遺物観察表



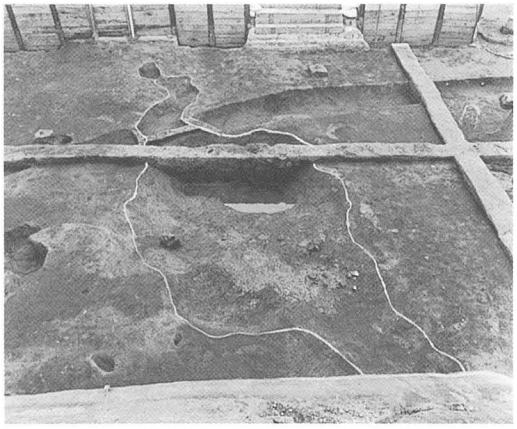
第3遺構面全景



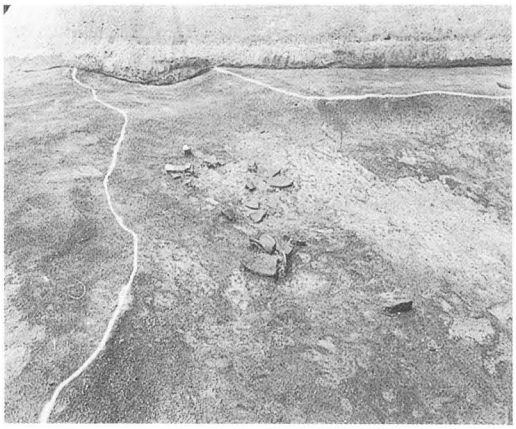
SD301完掘状況



第4遺構面全景

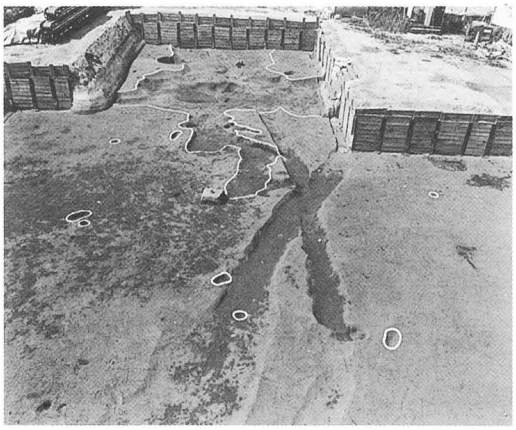


SX402完掘状況

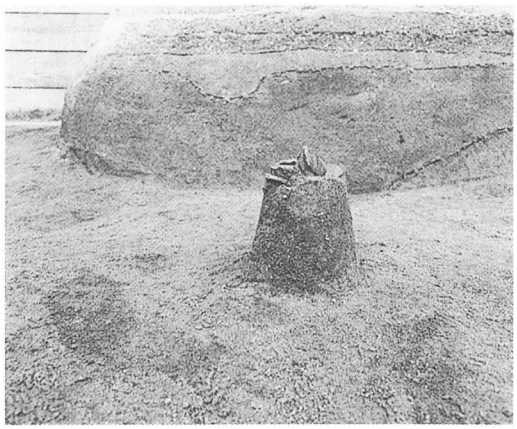


SX402遺物出土状況

SX402遺物出土状況



第5遺構面全景



Ⅶc層縄文土器出土状況

fig. 119　遺構検出状況

15. 東灘（ひがしなだ）No.22地点遺跡　第２次調査

１．はじめに

東灘No.22地点遺跡は、東灘区本山北町周辺に広がる遺跡である。

付近では古くから弥生土器片が散布することが知られており、近年になって宅地開発等で調査が数回行われたが、いずれも明確な遺構を検出するに至っていない。これは主に近世～近代にかけての畑地耕作などによる削平を受けたことが要因といえる。ただ、明確な遺構の発見はないものの、遺物の出土はみられ、周辺に集落址などの遺構・遺物が存在するものと考えられている。

調査地は、保久良神社が鎮座する金鳥山より派生する丘陵の先端部に位置しており、標高約32ｍを測る。調査地の南を走る阪急電鉄神戸線を境に丘陵部から段丘面への地形変換が認められ、線路敷の北と南では比高差約４ｍを測る。これ以南、海岸部までは段丘から扇状地へと緩やかに傾斜した地形が続く。

周辺の遺跡では、銅戈が発見された保久良神社遺跡・金鳥山遺跡などの弥生時代の高地性集落、南側の段丘上に営まれた本山北町遺跡・本山遺跡などの集落遺跡が挙げられる。

今回の調査は、住宅建設に伴う発掘調査で、埋蔵文化財に影響を及ぼすと考えられる擁壁部分の調査を行った。

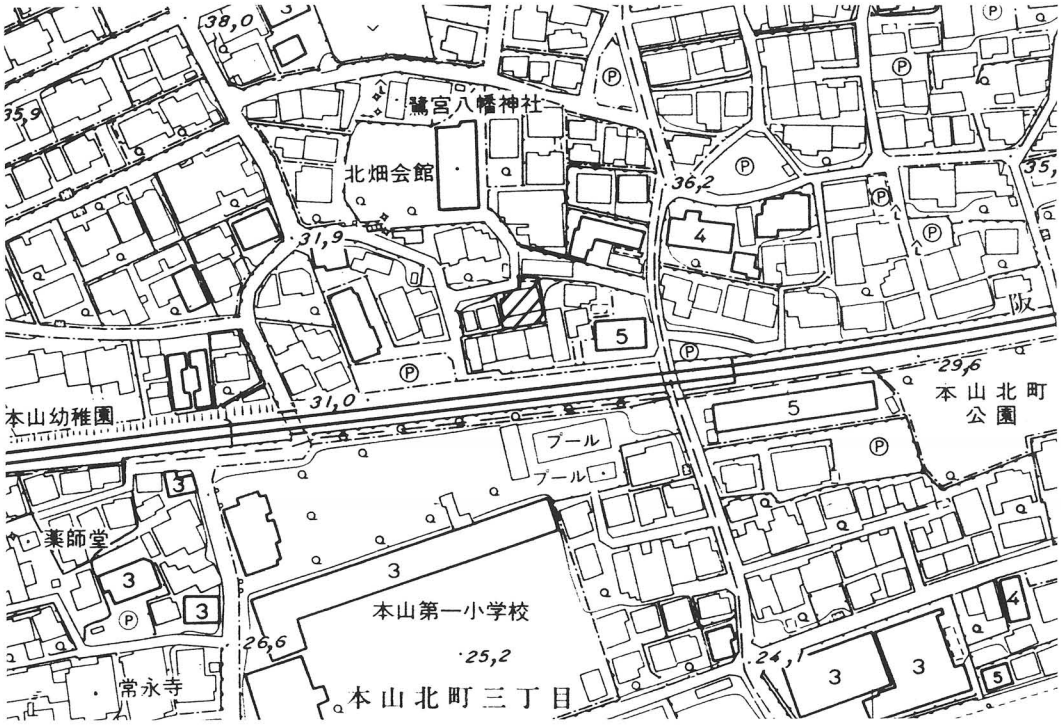


fig. 120
調査地位置図
１：2,500

２．調査の概要

基本層序

調査区内の基本層序は、上から盛土層・耕土層・暗灰色砂性粘質土層（遺物包含層）、褐色礫混砂質土（地山）である。

暗灰色砂性粘質土層上面及び褐色礫混砂質土層で遺構精査を行ったが、いずれの層面でも遺構は確認されなかった。遺物は暗灰色砂性粘質土・褐色礫混砂質土からそれぞれ出土しているが、磨耗がひどく、また出土量も僅かである。近在に遺構が存在する可能性は低いものと考えられる。

3．ま と め　今回の調査でも、従前の調査結果と同様、中世の須恵器・土師器、弥生土器が流れ込みと考えられる状況で確認されたのみで遺構は確認されなかった。調査地周辺の地形は傾斜がきつく、後世の畑地耕作、あるいは宅地造成時にかなりの地形改変を受けているようだが、遺物の混じり方からすると、やはり調査地の北方の丘陵上に遺跡が存在し、そこからの流れ込みによる遺物が確認されたと考えるのが妥当と思われる。

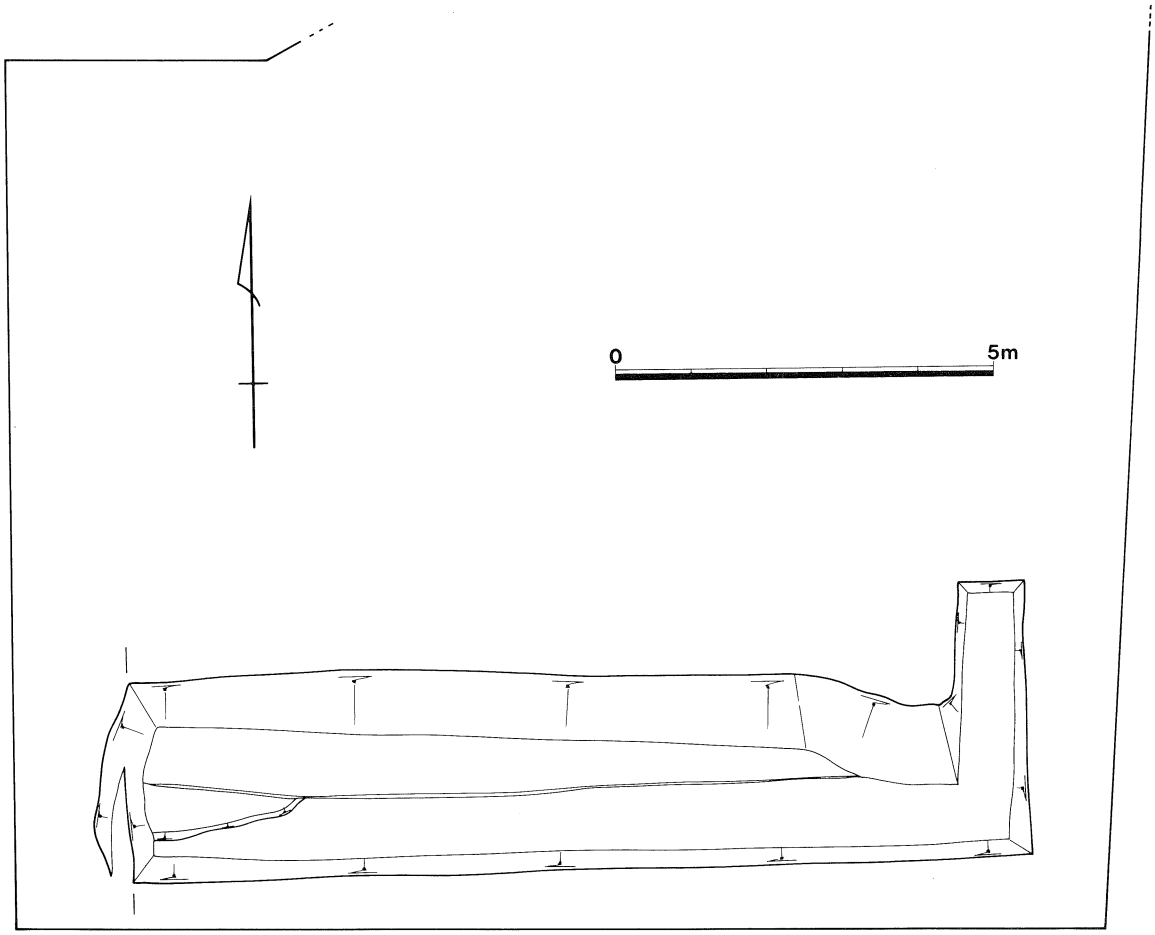


fig. 121　調査区平面図

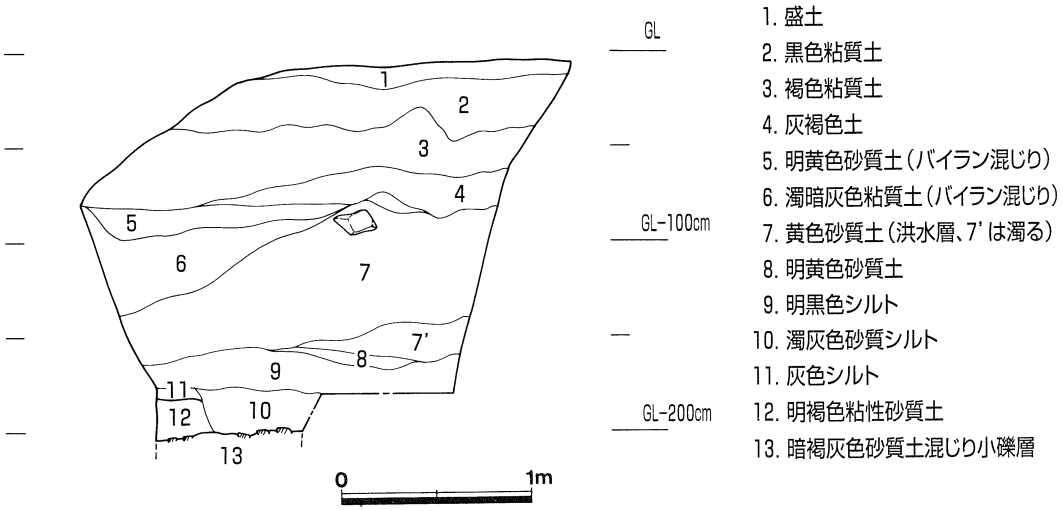


fig. 122　調査区断面図

16. 篠原（しのはら）遺跡　第16次調査

1．はじめに

当調査区は、篠原遺跡の北部に位置する。篠原遺跡については、現在まで、15次にわたる調査が実施されている。その結果、縄文時代～中近世の、複合遺跡であることが判明してきた。とくに、第２次調査における縄文時代晩期の遮光器土偶や第12次調査における弥生時代後期の小型仿製鏡の出土が著名である。

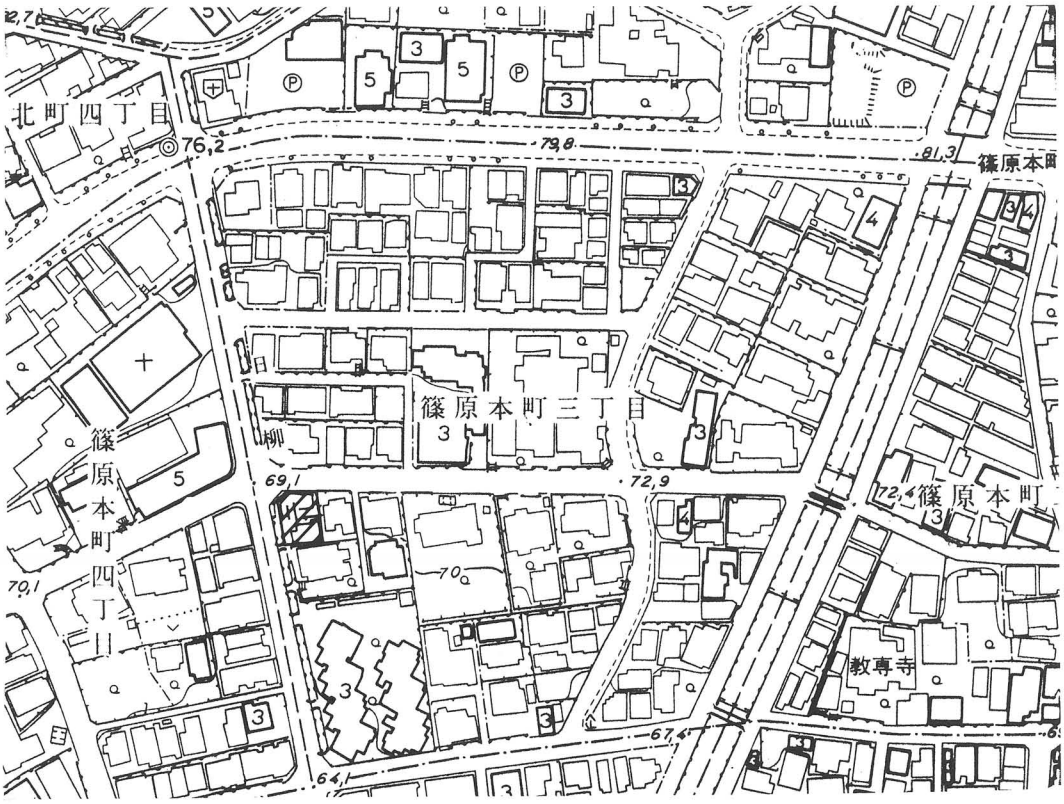


fig. 123
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

調査地は、南北16m、東西10mの長方形で、北から南へと緩やかに傾斜している。

基本層序は、層厚が60cmほどの盛土の下に、中世の遺物を含む包含層がはじまり、地表下約120cmで明褐色土（縄文時代遺構面）に至る。

第１遺構面　表土直下２～３層にわたる、包含層を挟んでG.L.－40～70cmで第１遺構面にいたる。

土坑２基、溝１条および多数の耕作痕を検出した。

ＳＫ01　一辺2.5mほどの隅丸方形の土坑である。埋土が他の遺構とやや異なり、近世の遺物が出土している。比較的新しい時期の遺構のようである。

ＳＫ02　調査区中央部において検出された南北4.0m以上、東西2.0m以上、深さ10cmほどの土坑である。中世の遺物が少量出土したが、耕作痕を切る。

ＳＤ01　調査区を東西に横切る幅80cmほどの溝である。この溝を境として地形に沿うように、

圃場面　南北に10cmほどの段が造られており、耕作痕と切り合いもなく方向も揃えることから、共に中世の圃場面に伴うものと考えられる。また、この圃場面を南北方向の幅20～40cm、

耕作痕　深さ10cm前後の明瞭な耕作痕が数cmの間隔で検出された。

他に、ＳＤ01を挟んで南側に東西方向の殆ど削平された耕作痕が認められた。

第２遺構面　第１遺構面下、古墳時代の包含層を挟んで第２遺構面となる。竪穴住居１棟、ピット８基を検出した。

ＳＢ01　調査区の南東隅において検出された竪穴住居である。北側約半分が未調査区へ続いている。かなり削平を受けており、周壁溝および柱穴を数基検出した。遺物は、細片のみで時期については不明である。

第３遺構面　地表面より 80～120㎝で明褐灰色土をベースとする第３遺構面となる。この面で土坑３基、溝１条、ピット５基と落ち込み状遺構を検出した。縄文時代晩期の遺構面と考えられる。

ＳＤ10　調査区の東側において検出された幅 120～80㎝、深さ 40㎝ほどの弧状をえがく溝である。上面において、炭層がみられた。

ＳＫ10　調査区東辺において半分だけ検出された、直径 1.2ｍほどの円形の土坑である。拳大の石が多く含まれていた。

３．ま と め　今回の調査は、調査面積が狭かったこともあり、検出された遺構等についても、性格付けをすることは難しい。篠原遺跡は、非常に多様なありかたをする遺跡であるにもかかわらず、調査の機会が比較的少ないこともあり、未だにその実態について不明な部分も多い。今後、このような地道な小規模調査の成果の積み重ねにより、次第に遺跡の全貌が明らかにされていくであろう。

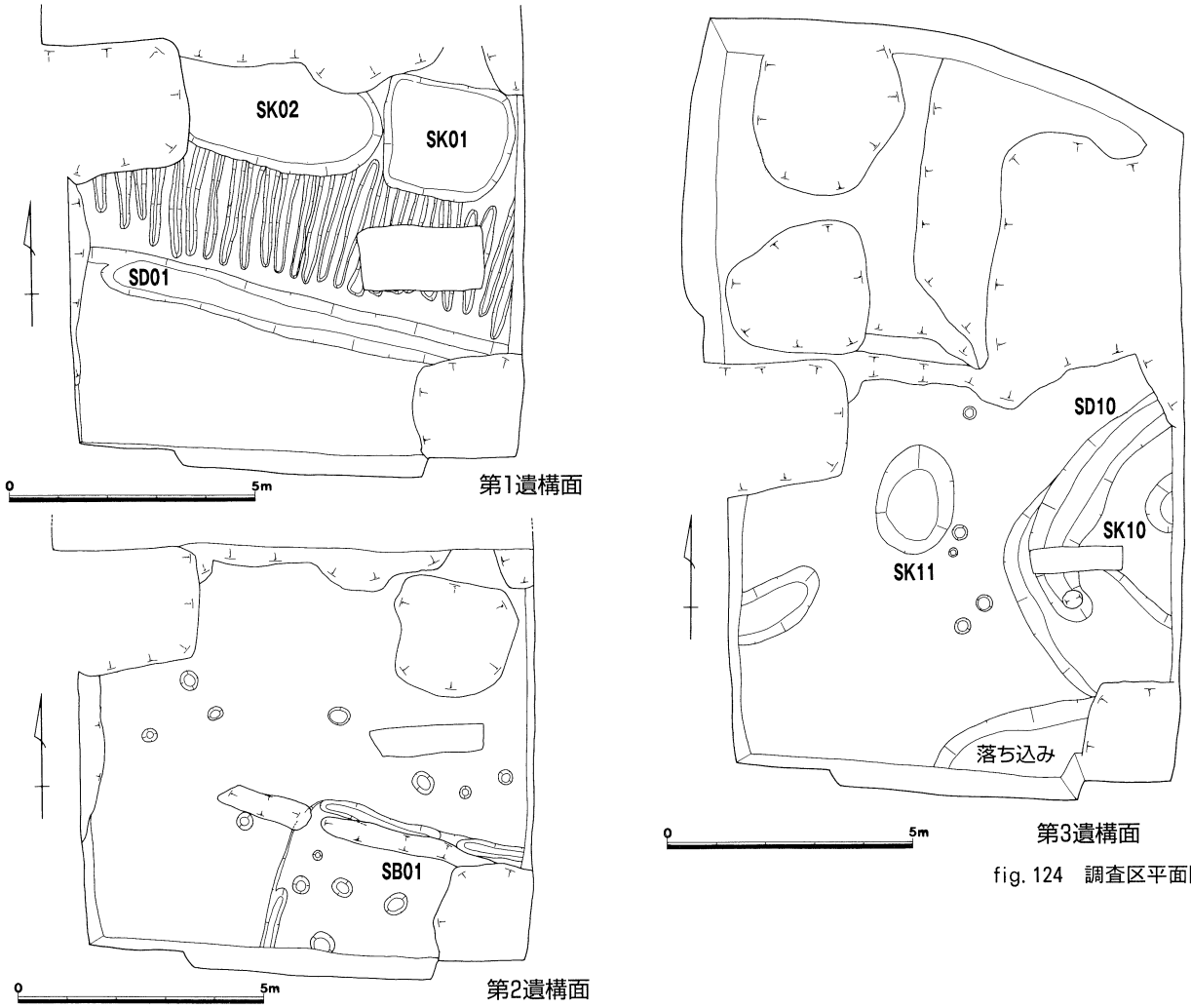


fig. 124　調査区平面図

17. 西求女塚古墳（にしもとめづか）　第9次調査

1. はじめに

西求女塚古墳は、六甲山南麓にひろがる扇状地末端に立地しており、標高6.0mの微高地上に築造されている。

今回の調査地は、西求女塚古墳の前方部の南西約30mに位置しており、第4次調査や第6次調査で確認された周湟の可能性のある落ち込みあるいは溝状遺構が検出する可能性が予想された。

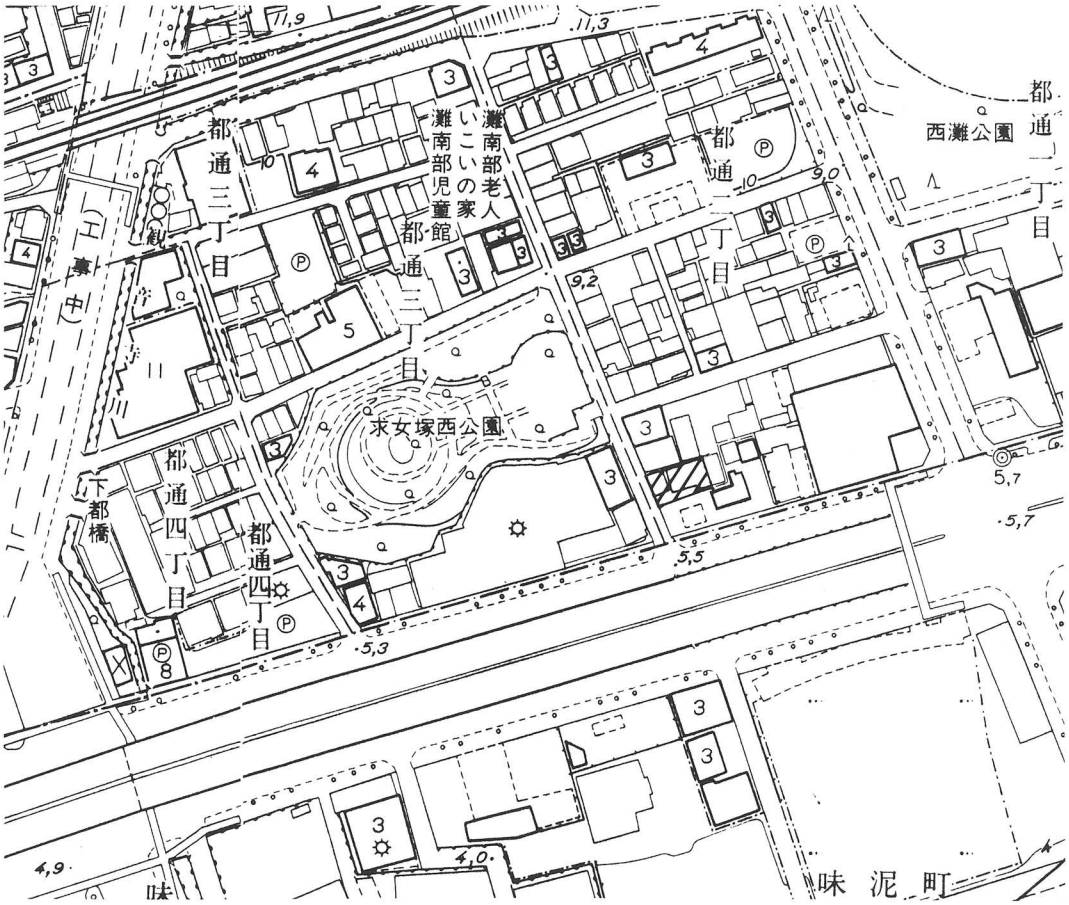


fig. 125
調査地位置図
1：2,500

2. 調査の概要

地表下約1.0m～1.2m（標高5.95m～6.22m）で、遺構面を検出した。

検出した遺構は、土坑1基、溝1条、ピット4基である。

SK01　調査区の南西側で検出された楕円形の土坑で、長径2.2m以上×短径1.2m、深さ20cm～30cmを測る。南側は、調査区外にのびている。

SD01　調査区の南東側で検出された溝状遺構で、幅15cm～30cm、深さ3cm～6cmを測る。東側及び西側は、調査区外にのびている。

ピット　SP101～SP104は、直径15cm～45cm、深さ10cm～25cmを測る。建物としては纏まらなかった。

遺構の時期については、遺構内より出土した遺物がいずれも小片であるため、明確ではないが、遺物包含層より出土した遺物等から見て、奈良時代～平安時代頃のものと考えられる。

地割れ　また、調査区の北東隅から中央部北側付近にかけて東西方向にのびる地割れの跡が、確認されている。地割れの跡は、総延長6.0m以上、幅30cm～1.0m、深さ50cm～70cm以上を測る。なお、通産省地質研究所の寒川旭先生により、この地割れは、海岸部付近で、地震が発生した際に、『はらみ出し現象』と呼ばれる、海岸際の面が、海側に強く引っ張られたことによって生じたと考えられているものであることが判明した。

この地割れの中に流入した土砂からは、遺物が全く出土しなかった。しかし、土層の堆積状況から見て、奈良時代～平安時代の遺物包含層を切っていないため、それ以前のものと考えられる。

fig. 126　地震痕跡

下　層　また下層についてもトレンチを設定し地表下1.8mまで掘り下げたが、遺構・遺物は確認されなかった。

3．ま と め　今回の調査では、調査着手前に予想していた周湟等の西求女塚古墳に関連する可能性のある遺構・遺物は、全く検出されなかったが、奈良時代～平安時代以前に発生した地震によって生じた地割れの跡が、確認された。

今後は、周辺の調査によって、この地震の規模や時期が明らかになっていくものと考えられる。

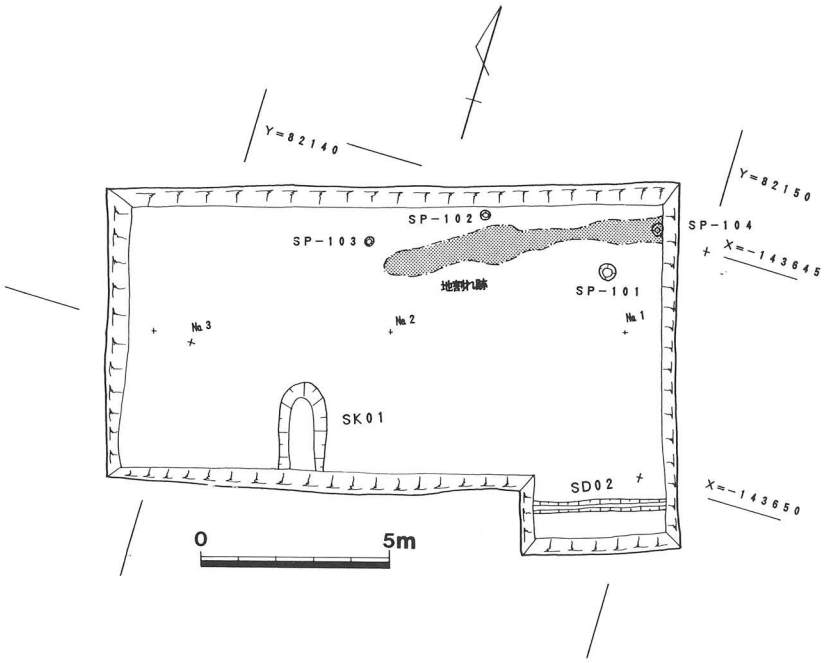


fig. 127　調査区平面図

18. 西求女塚古墳（にしもとめづか）　第10次調査

1．はじめに　西求女塚古墳は、六甲山麓の扇状地末端に位置する前方後方墳で、その築造年代は３世紀末～４世紀初頭と推定されている。

古墳本体とその周辺は、数次に及ぶ調査が実施され、後方部の埋葬主体から三角縁神獣鏡７面を含む12面の舶載鏡が出土している。また、周辺の調査では、周湟と推定される落ち込みと、『敏馬の泊』との関わりが考えられる奈良～平安時代の遺構が検出されている。

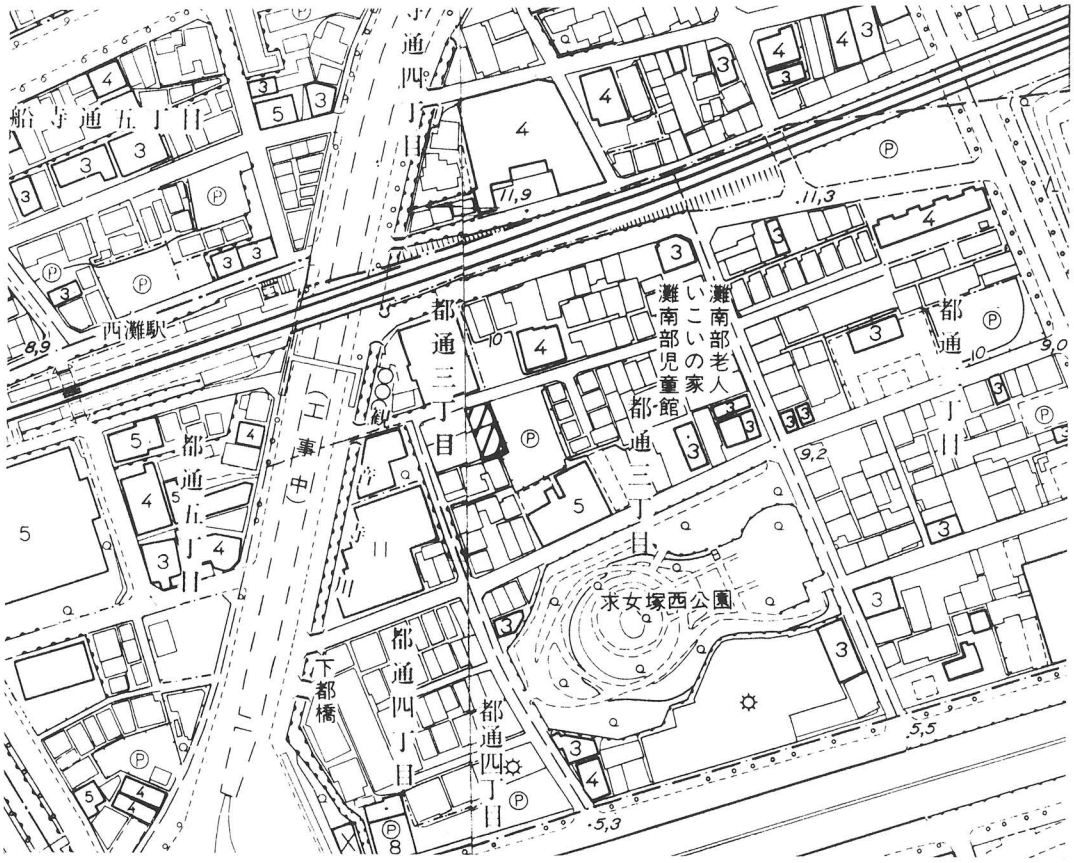


fig. 128
調査地位置図
１：2,500

2．調査の概要　今回の調査は個人住宅建築に伴うもので、工事により文化財が影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

基本層序　調査地の基本層序は、１．盛土・撹乱、２．暗灰色シルト混じり細砂、３．黄灰色細砂、４．黒色シルト混じり細砂～中砂、５．黄褐色粗砂、６．暗灰褐色極細砂～細砂、７．暗褐色粗砂である。

このうち、４層上面が遺構検出面である。この面は南西に向かって緩やかに傾斜している。

検出遺構　調査区は撹乱が著しいが、調査区中央部東側で直径40cm、深さ15cmの落ち込みを１基検出した。埋土に土器を含まず、時期は不明である。

この面での調査終了後、工事影響レベルまで掘り下げ、精査したが、遺構は検出されなかった。

出土遺物　遺構検出面直上より、土器が10ℓコンテナ１箱出土している。その殆どが小破片で時

期の特定は困難であるが、古墳時代後期と平安時代の土器が含まれている。

3．ま と め　今回の調査では調査範囲が限られていたため、時期不明の落ち込み１基のみの確認にとどまった。土器も小破片ばかりで二次堆積の可能性が考えられ、当該地は文化財の希薄な場所であると言える。

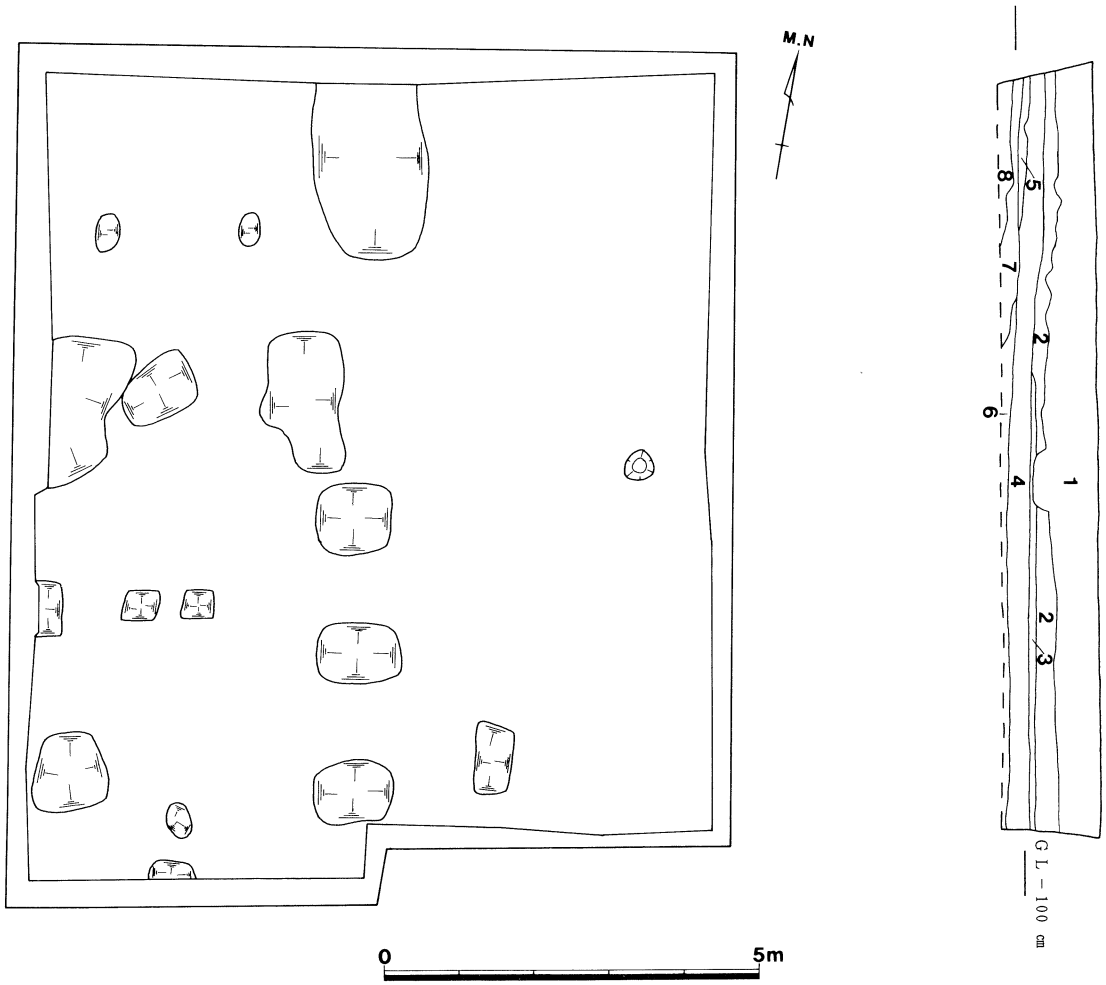


fig. 129　調査区平面図・断面図

19. 都賀（とが）遺跡　第８次調査

１．はじめに　都賀遺跡は、六甲山麓の都賀川東岸、標高約40m前後の扇状地上に立地している。昭和62年に実施した試掘調査で、弥生時代の遺物包含層が確認され、その存在が明らかになった。

それ以降、７次にわたる調査の結果、縄文時代早期の遺構をはじめ、弥生時代中期の方形周溝墓、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の竪穴住居、奈良時代末～中世の掘立柱建物などが検出されている。

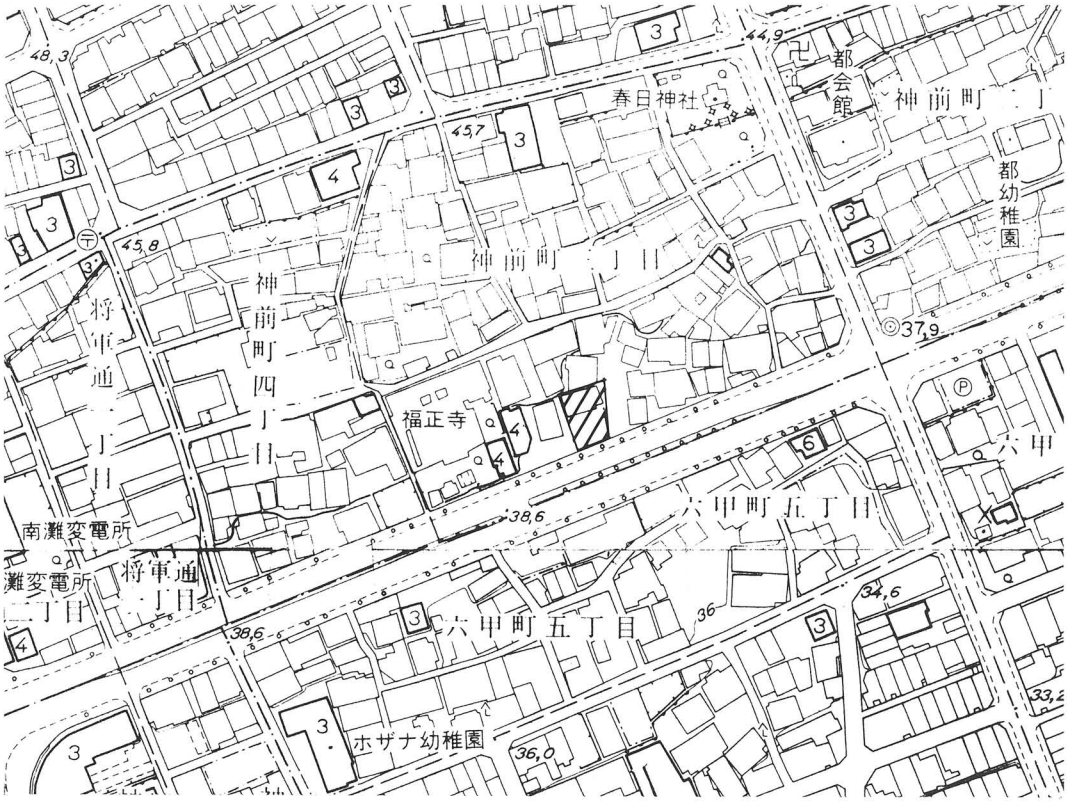


fig. 130
調査地位置図
１：2,500

２．調査の概要　今回の調査は個人住宅建築に伴うもので、工事により文化財が影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

基本層序　調査地の基本層序は、第１層現代の盛土、第２層黒褐色細砂、第３層灰褐色礫混じり細砂～中砂（人頭大の礫を多量に含む）である。このうち、第２層が遺物包含層である。

検出遺構　調査区西側から東側に向かって傾斜している土石流を検出した。北東から南西にかけての流れで、人頭大の礫を多数含んでいる。調査区の東側は土石流の上に弥生時代後期～中世の遺物包含層が堆積している。工事影響深度までの調査であるので、この部分は遺構面には到達しなかった。

３．ま　と　め　今回の調査では調査範囲が限られていたことと、工事影響深度以下の調査を実施していないために、遺構を検出することができなかった。

しかしながら、これまでの調査で検出された土石流が今回の調査でも検出され、広範囲にわたりこの付近を土石流が覆っていることが確認された。

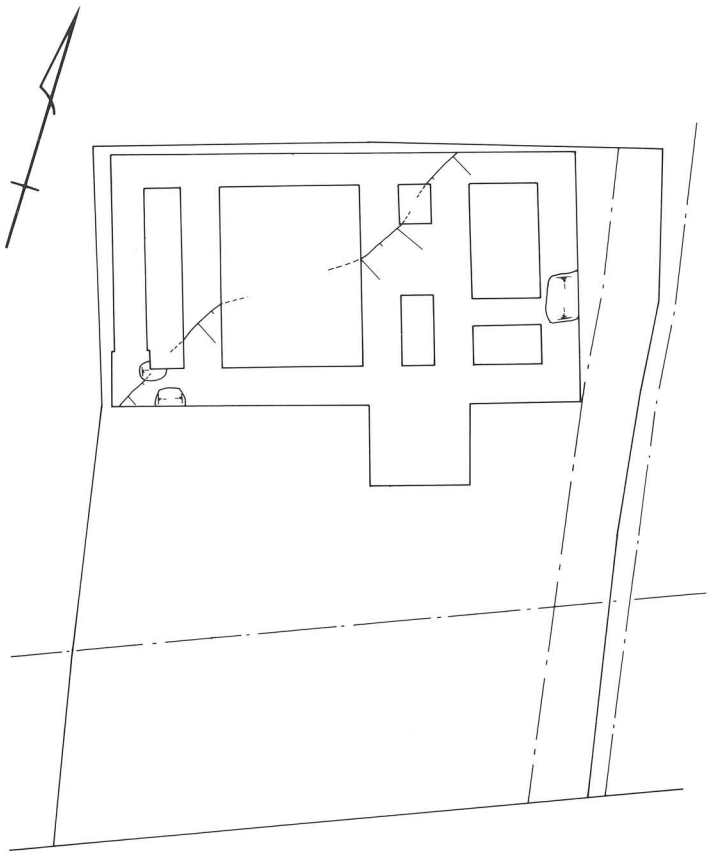


fig. 131
調査区平面図

0 10m

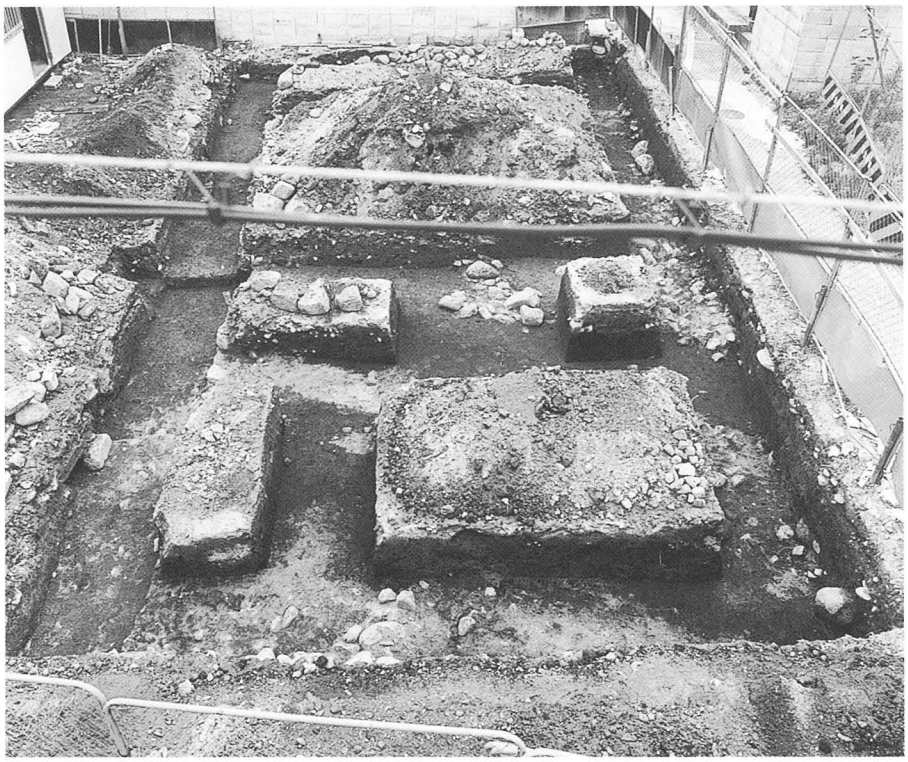


fig. 132
調査区全景

20. 都賀（とが）遺跡　第９次調査

１．はじめに

都賀遺跡は、六甲山南麓に流れる都賀川左岸に位置する標高40ｍ前後の扇状地上に立地している。昭和62年に試掘調査が行われ、弥生時代の遺物包含層が確認され、はじめて遺跡の存在が明らかとなった。

これまでの調査の結果、縄文時代早期の遺物包含層・土坑、弥生時代中期の方形周溝墓・土坑・溝、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の竪穴住居、奈良時代～平安時代初頭の掘立柱建物・土坑・溝など、鎌倉時代～室町時代の溝・土坑・ピット、江戸時代の溝・土坑などを検出している。

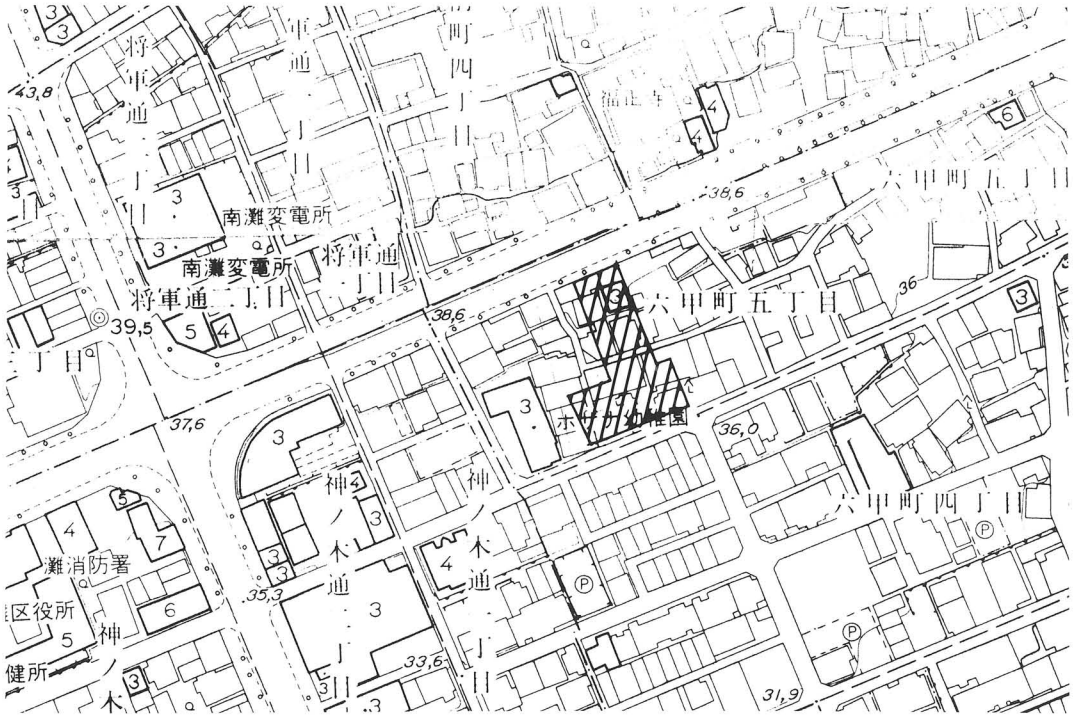


fig. 133
調査地位置図
１：2,500

２．調査の概要

今回の調査地は、都賀遺跡に南接したため、事前に試掘調査を実施したところ遺物包含層を確認した。その結果をもとに工事影響範囲を対象に発掘調査を実施した。

基本層序

基本層序は、盛土、近現代整地層、旧耕土層、乳茶褐色粘質土（第１遺構面）、黒褐色粘質土（包含層）、茶褐色極細砂シルト（第２遺構面）、暗茶褐色極細砂シルト、暗褐色シルト質細砂円角礫（土石流層）、茶褐色砂質土（第３遺構面）、淡黄褐色砂質土（地山）となっている。北半調査区では、宅地造成時の撹乱のため、暗褐色シルト質細砂円角礫（土石流層）が、かろうじて残る状態であった。

近現代遺構

北半調査区の北壁に半分かかる形で石組みの井戸と同じ壁面西端には共同便所と思われる大瓮が２基並んで検出した。また、調査区のほぼ中央で防空壕と思われるものを１基確認した。規模は、平面が南北３ｍ東西2.6ｍの長方形で深さ1.5ｍである。南東隅に三段の階段が削りだしており、壁面に沿うように二間三間の柱跡を検出した。南調査区の長方形の地下収納庫と思われるものからは、未開封の「大日本ビール」２本と日本酒の瓶２本が出土した。

第１遺構面　南半調査区では、現在の町割りとほぼ同一の東西方向に鋤溝を多数検出した。この鋤溝は、鋤先が両端で突出する風呂鋤と呼ばれるタイプのものである。これは、当地が耕作地としては石の多い固い土壌であったことから風呂鋤を使用して開墾していったものと思われる。また、鋤溝とは異なった方向の溝、２条を検出した。これは、幅約50㎝深さ約15㎝の規模で北西から南東方向に検出した。出土遺物に明確に時期を示すものが出土しなかったため、時期と溝の用途は不明であるが、鋤溝との切り合い関係から鋤溝よりも古いものと思われる。鋤溝の時期としては、出土遺物から概ね近世（江戸時代）以降の物と思われる。

北と南に調査区を分けていた旧道の下に沿うように溝（ＳＤ120）を検出した。この溝の南肩は旧道に伴う埋設施設と側溝により削平されているため幅は明確ではないが、幅２ｍ以上、深さ50㎝の規模の溝である。溝の中からは、多量の近世陶磁器と獣骨が出土した。特に、東端の溝の底を掘り込んだ用途不明遺構（ＳＸ101）からは、獣の顎部の骨などがまとまって投棄されたように出土した。歯の形状から、牛の骨と思われる。

北西隅では、北東から南西方向へ流れる溝（ＳＤ121）を検出した。この溝の西肩についても調査区の外になるため幅が明確ではないが、幅２ｍ以上、深さ80㎝の規模の溝である。溝の中からは、多量の中近世陶磁器と獣骨が出土した。出土遺物から、ＳＤ120よりも古い段階で構築された溝と思われる。

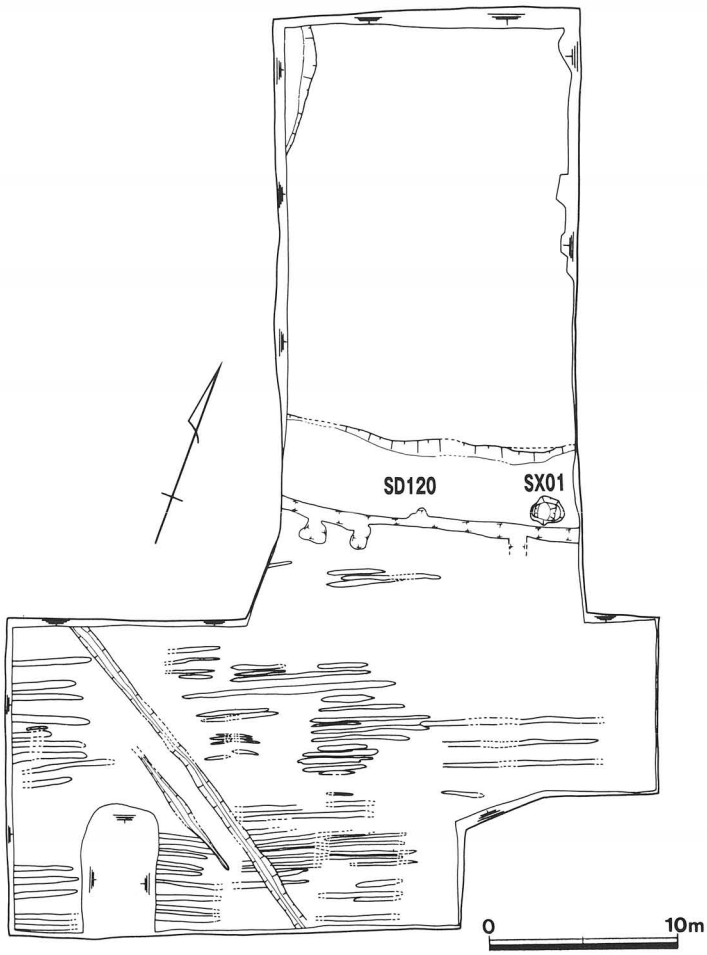


fig. 134　第１遺構面平面図

fig. 135　ＳＸ01

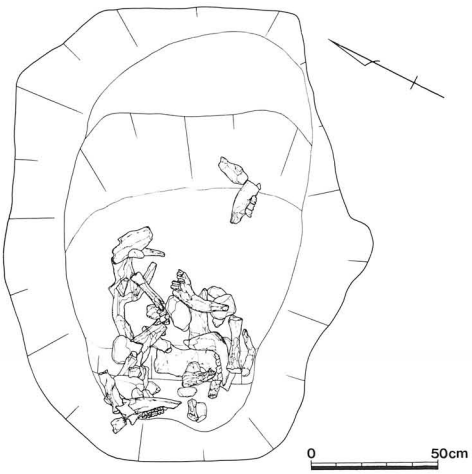
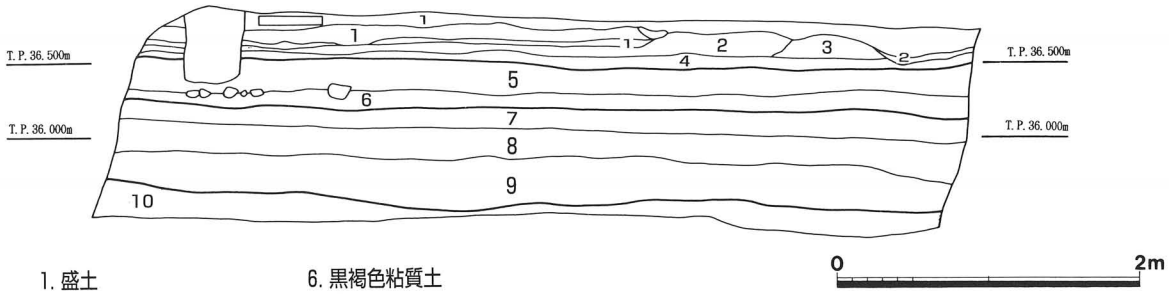


fig. 136　ＳＸ101平面図



1. 盛土
2. 灰褐色シルト質細砂（耕土）
3. 褐灰色シルト質細砂
4. 茶褐色粘質土（床土）
5. 乳茶褐色粘質土
6. 黒褐色粘質土
7. 茶褐色極細砂まじりシルト
8. 暗茶褐色極細砂まじりシルト
9. 暗褐色シルト質細砂円角礫（土石流）
10. 茶褐色砂質土

fig. 137　調査区断面図

第２遺構面　第２遺構面は、南半調査区でのみ検出した。主な遺構としては、ピット５基と溝１条である。ピットは、直径20cm前後の大きさのもの８基が南半調査区の北東に固まって検出したが、建物としてはまとまらない。南半調査区の南東隅において溝（ＳＤ201）を検出した。この溝の、西肩についても調査区の外になるため幅が明確ではないが、幅２ｍ以上、深さ80cmの規模の溝である。溝の中からは、多量の弥生時代後期の土器片が出土した。

第３遺構面　第３遺構面は土石流の下から検出した面で、遺構は直径２～３ｍの不定形な不明遺構（ＳＸ301～315）のみである。これらの遺構は、埋没過程において地山の土を中層から上面まで巻き上げたものが多いことから、土石流に押し流された木などの痕跡と思われる。ＳＸ301とＳＸ312からはサヌカイトのチップとスクレイパー・石鏃が出土した。その他の遺物は出土しなかった。

fig. 138
土石流検出状況

3．ま と め　今回の調査では今までの調査で検出してきた弥生時代中期を中心とする遺構は存在せず、縄文時代早期から中世にかけての明確な遺構・遺物も確認できなかった。しかし、弥生時代後期の溝が検出され、都賀遺跡の南限を当調査範囲の南に特定することができた。また、弥生時代後期以前に土石流災害が発生しているが遺物がほとんどないことから周辺に集落の存在は推定できない。近世においては、調査区中央を東西に流れるＳＤ120を境として北半は集落が形成され、南半には耕作地が営まれていたものと思われる。

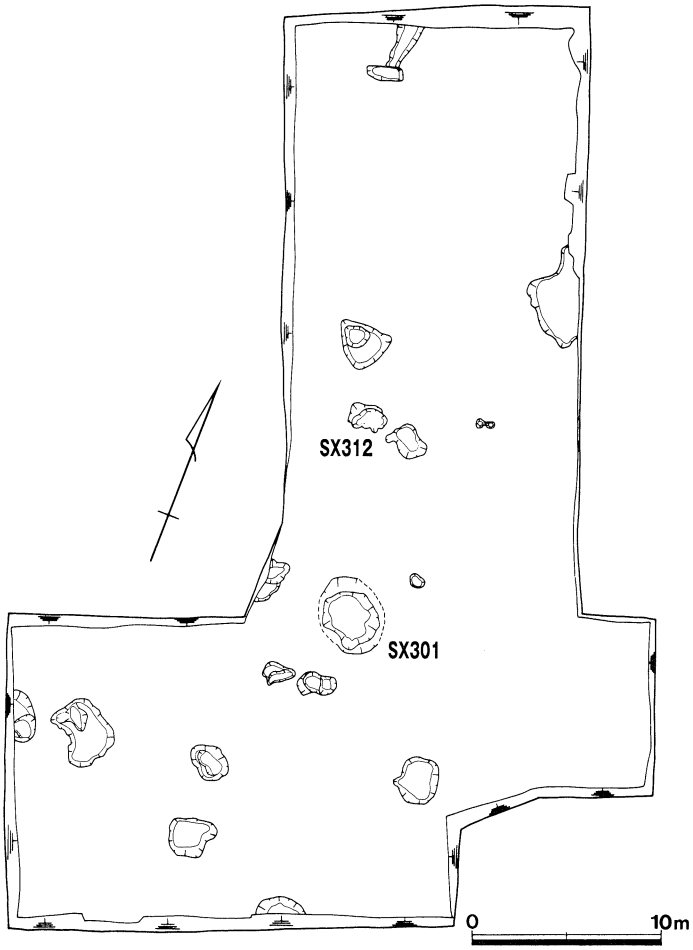


fig. 139　第３遺構面平面図

21. 西郷古酒蔵群（にしごうこさかぐらぐん）　第２次調査

１．はじめに

当該地である月桂冠北蔵は、日本一の酒処として有名な灘五郷の内、都賀川の河口付近一帯に広がる「西郷」と呼ばれる地域に位置している。北蔵の西約250ｍには都賀川が、南約100ｍには蔵築造当時の海岸線があり、標高約2.0ｍの砂丘上に位置している。

酒蔵は、神戸におけるひとつのシンボル的な存在であったが、震災によってその殆どが倒壊し、早晩には、古い酒蔵の様子は忘れ去られる危機にある。近現代の酒造史においても、既に消えてしまった技術や伝統が多く存在し、近現代の産業史の中で、生産施設に係わるものを、生産遺構として位置づけることによって、発掘調査を行い、記録保存を行う必要性が高まっている。特に、神戸市における酒造関連遺構は、全国的にみても貴重な存在であり、近現代の酒造史においても重要な位置を占めている。

今回の調査は、酒蔵関連の調査として実施されたもので、神戸市内において、３例目となる。また、灘五郷の内、西郷地区内では、沢之鶴大石蔵に続いて２例目となる調査である。

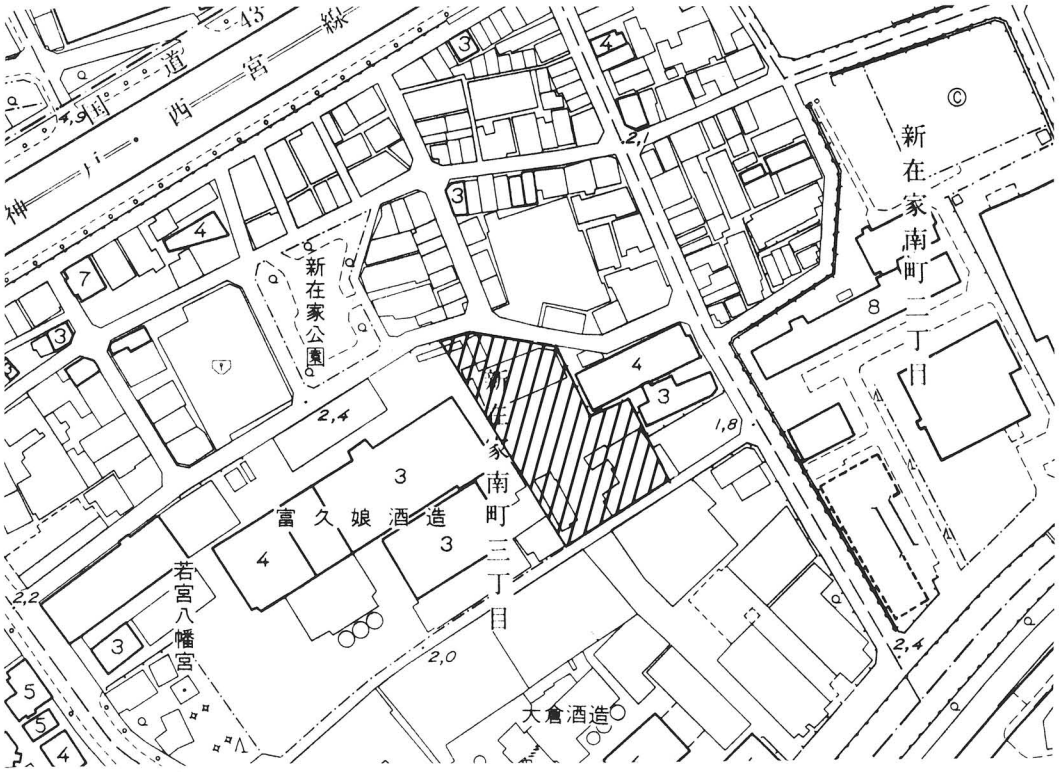


fig. 140
調査地位置図
１：2,500

２．調査の概要

調査によって検出された蔵は、大正時代の蔵配置の典型とも言える並び蔵の配置をとるもので、その前面に釜屋を設けるものであった。そこで、調査にあたっては、北の蔵を「大蔵」、その南にある蔵を「前蔵」、その南の部分を「釜屋」と呼称し、その前面にひろがる建物の内、西側を「会所部屋」、東側を「事務所」と呼称した。

また蔵は、大正年間に一度火災に逢っており、これを焼土面として時期を分ける際の根拠とした。さらに戦災によって焼失しているため、この面も遺構の並行関係をさぐる決め手とした。以下、調査した建物・遺構にそって記述していく。

大　蔵　大蔵は、調査区の北端に僅かにかかる形で調査を行った。その結果、大蔵の南側の石垣の一部とその根石の抜き取り穴を検出した。また、大蔵と前蔵を繋ぐ通路も検出した。

大蔵は最初、前蔵から半間北に離れた場所に築かれていたようである。そして、築造後、まもなく通路が築かれたようである。このことは、建物の石垣と通路の石垣が高さが一致するものの、その積み方が、かなり隙間のある荒い積み方となっており、建物の石垣と一体に築造した石垣にしては違いがあり、後に、溝部分に石材を嵌め込んで作ったと考えられる。その後、この蔵全体が火災に逢うようであり、その時期に大蔵も火災によって焼失している。この後、大蔵は建て替えられるが、その位置は、前蔵からやや離した地点に前蔵とやや方向を異なるようにして建てられるようである。

前　蔵　前蔵は、大蔵の南にあり、大蔵と前蔵は典型的な並び蔵の型式をとる。前蔵の築造には、黒灰色の細砂を叩き締めてそれをベースとしてその上に礎石や石垣を築いており、基礎部分において一切掘り込み地業をおこなっていない。礎石や石垣を築いた後、前蔵内部を砂等で盛土して床面を築いている。前蔵の東側には、槽場が築かれており、3回の作り替えが行われている。

第4槽場　一番新しい槽場は、前蔵北東端に長辺を東西方向にむけて築かれている。コンクリート造りで、南側に煉瓦造りの階段を設けるものである。戦災の面と一致しており、そのころには存在していた可能性が高い。

第3槽場　前蔵の東側に長辺を南北にむけて築かれている。石造りで、西側に木の階段を設けるものである。垂壺の口縁部に巻かれていたコンクリートは出土したが、その他のものは、すべて抜き取られていた。よって詳細な槽場の状況を復元することは困難である。

石炭ガラなどで埋め戻されており、戦災面より下層にあたることから戦災以前と考えられ、全体が火災に逢う時期よりは後出するものである。昭和期の煉瓦が埋没していることからみても昭和10年前後の

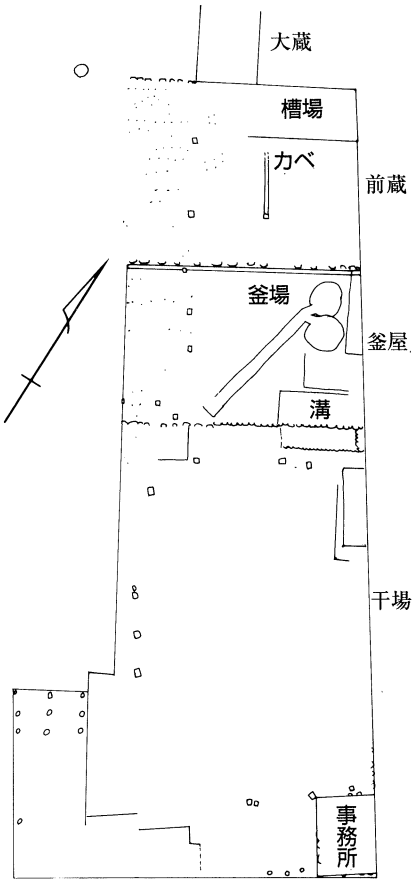


fig. 141　第1遺構面平面図

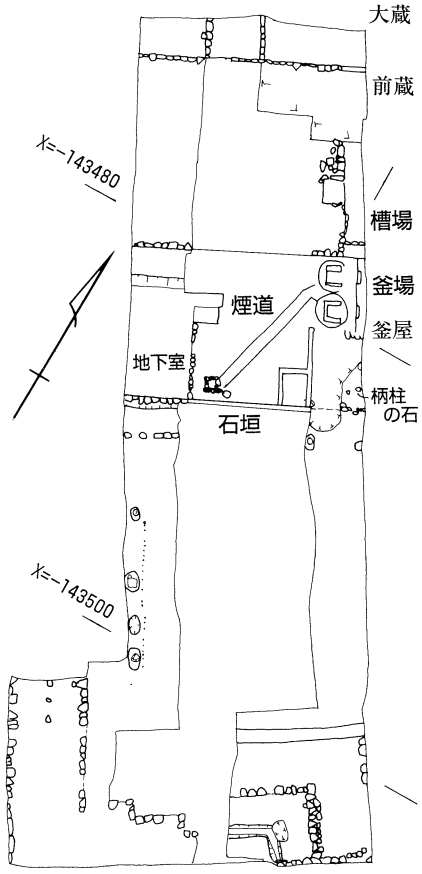


fig. 142　第2遺構面平面図

時期が考えられる。

第２槽場　前蔵の中央やや東側に長辺を東西にむけて築かれている。第２槽場に切られており、僅かに断面によって確認したのみである。底に築造時に使用したとみられる石材を検出したことから、石組の槽場とみられるが、詳細は不明である。

第１槽場　前蔵の東南側に長辺を東西にむけて築かれている。石造りで、北側に木の階段を設けるものである。第３槽場に切られており、僅かに断面によって確認したのみである。底に築造時に使用したとみられる石材を検出したことから、石組の槽場とみられるが、詳細は不明である。切り込み面が、全体の火災に逢う面（焼土面）と一致することから、火災の時期には存在していたと考えられる。

釜　　屋　前蔵の南に隣接する場所が釜屋にあたる。前蔵築造当初には前庭であった可能性がある。後に、掘立柱建物等が築かれ、店舗や会所部屋として使用された時期もあったようである。前蔵南石垣に接する様にして掘り込み地業を伴う礎石列を検出した。この礎石の掘形は、焼土層直上から切り込まれており、また石組み釜場の掘形を切り込んでいることから、釜場より後出であり、全体が焼失した後に、釜屋再建時に設置されたものと考えられる。柱間は、３ｍと４ｍがある。

礎石建物

石組釜場　釜屋に最初に築かれた釜場は、大小２基をセットとするもので、石を組み、漆喰を上から塗って耐火処置をおこなって作るものである。焚き口の側面は面取りを行った方形の石材を組み上げて石垣としており、半地下状となっている。

当初の焚き口については不明であるが、大正年間に作られた焚き口は、煉瓦の塀をつくり、大小２基の焚き口を持つものである。この焚き口の煉瓦塀に使用された煉瓦は全てＪＩＳ規格に合わない大きさのもので、ＪＩＳ規格が制定されるのが大正14年であることから、恐らくそれ以前に製造された煉瓦を使用して築かれた煉瓦塀と考えられる。

ただし、周辺部には、少なくとも２種類の耐火煉瓦が使用されており、そのうち、古いものは、明治

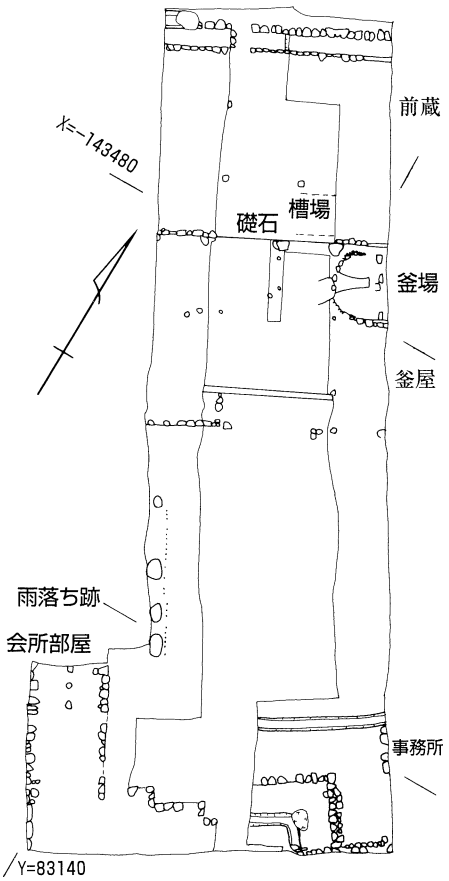


fig. 143　第３遺構面平面図

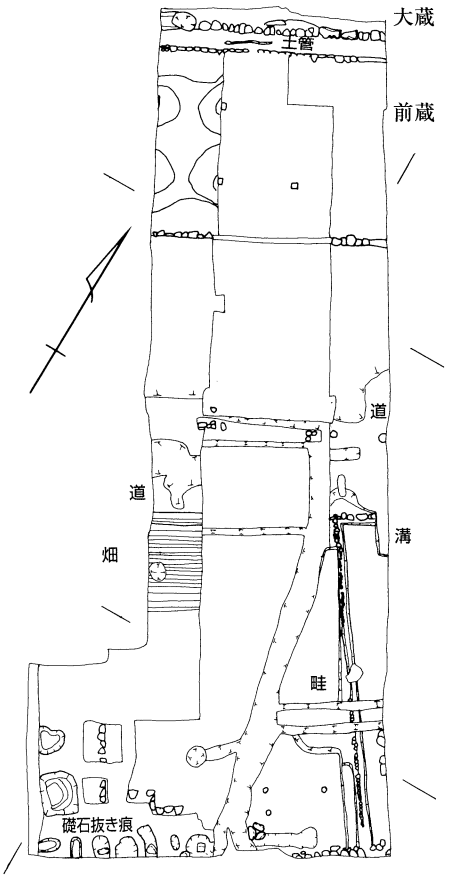


fig. 144　第４遺構面平面図

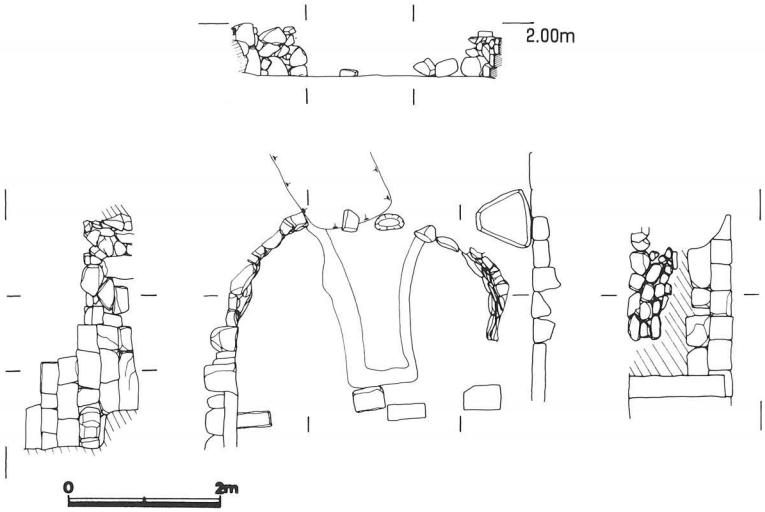


fig. 145　石組竈平面図・断面図

fig. 146　石組竈

20年から25年の間に製造された白煉瓦である。おそらく、部分的にこのころから釜場には耐火煉瓦が使用されていたものとみられる。それともうひとつの煉瓦は昭和10年前後に製造された耐火煉瓦であり、少なくとも２度の造り替えが行われた可能性が窺われる。

石組みの釜場は、江戸期よりの古い伝統を受け継いだものであり、貴重な遺構である。しかし、今回検出した石組み釜の場合、築造年代はあまり明確ではない。白煉瓦の使用から明治20年代には既に存在していたことがわかるが、江戸期にまで遡るかどうかに関しては、不明である。

煉瓦釜場　耐火煉瓦を使用する釜場で、北側にある北釜は直径166cmを測る小釜、南側にある南釜は、直径180cmを測る大釜である。重油用に築かれたもので、ロート状のバーナータイルを焚き口に設け、空気口を設けている。焚き口は余分な空気が入り込まないように石炭用の焚き口を狭くし、煉瓦で詰めている。また、炎の当たる付近に煉瓦を斜めに立てかけたように設置して炎を上に立ちのぼらせる構造も特徴のひとつである。

石組みの釜場は焼土面に覆われており、火災時には存在していたと考えられる。また、煉瓦釜は、昭和30年代前半に多く作られた形式であり、その頃のものであろう。煉瓦釜はその後コンクリートが巻かれ、蒸気式に変化するようであり、これが昭和40年代と考えられる。蒸気式への変化に伴って煙道もその役目を終えるようである。

煙　道　煙道は釜場から南に向かって、釜屋を斜めに横切るようにして築かれている。煉瓦によって作られているが、使用されている煉瓦はＪＩＳ規格に合わないもので、大正年間の築造と考えられる。掘形としては、焼土面の後の建て替え面をさらに切っていることから大正年間でも後半の頃のものと考えられる。なお、築造当初の釜場に伴う煙道もほぼ同じ方向に伸びていたと考えられるが、そ

fig. 147　レンガ組竈

の長さはかなり短いものであることが断面により確認されている。煙道は、石炭で釜を焚いた場合、煤と灰で詰まり易いため、中を掃除するために人が入れる空間を設けている。その上で釜屋内の移動の邪魔にならない様に低く作られている。

掘形の状況から一度補修されており、戦後の建て替え時に行われたものと考えられる。このことから、煙道は、大正期から昭和40年代まで存続していたと考えられる。

釜屋は火災に合う前後から奥行５間とされていたが、火災後、釜屋の建て替え、一部変更が行われた際に、４間に減少する。この時に、釜屋南面に石垣が築かれるが、これは焼土面の上の建て替えによる整地層を切り込んでおり、火災からやや時期をおいて築かれたことが判る。石垣より南には１間分張出があり、中央部分は入口となる。

地下室　釜屋西側に地下室を検出した。地下室の東に階段状の施設を設けるもので、東壁は、自然石（川原石）を乱雑に積み上げたもので、隙間には漆喰が充塡されている。石垣の掘形は、焼土面の後の建て替えに伴う整地層を切り込んでおり、石垣や煙道とほぼ同時に築かれたものとみられる。南には、花崗岩の面取りされた方形の石材が２～３段、北面して積まれている。戦災の面に覆われておりそれ以前に埋没していることが確認されている。かなりの砂によって埋められ、一部にラミナ痕も認められる。このことから昭和期における洪水が考えられるが、この地域は、阪神大水害の被害にあっていないことが確認さている。おそらく海岸地帯に多大な被害をもたらした室戸台風（昭和８年）の可能性が高いと考えられる。

板　間　釜場の南に束柱の礎石とみられる石材が３個検出されている。設置した面と据えるための掘形から、火災後の建て替えに伴うものと考えられる。このことから、釜場の南には、会所部屋のような部屋が設けられていたものとみられる。

中　庭　釜屋の南には、中央部分が庭となっており、桶などを干す干場などに使用されていたものとみられる。

前蔵等が築かれた当初は、釜屋の南に道路があり、道路の南に細い溝が築かれていた。この溝より南は当初畑であったことが、畑の畝の検出により確認できた。洪水等の被害により明治20年代前後に耕作は断念されたようである。

会所部屋　調査区南西部分に東西方向の建物があった。これを会所部屋という。当初は、礎石の建

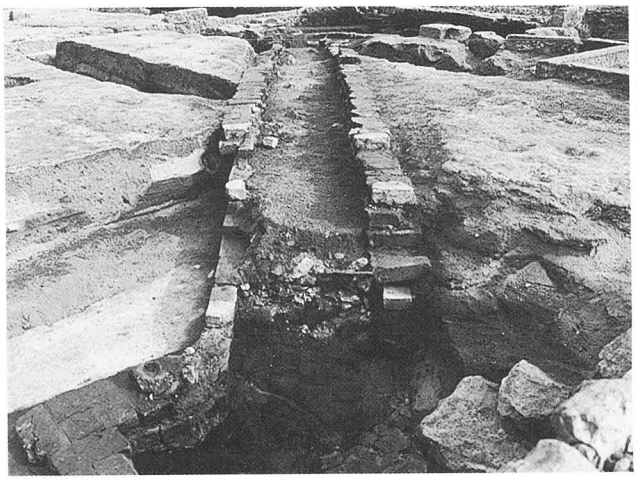


fig. 148　レンガ組竈煙道

fig. 149　地下室石垣

物であったが、後に煉瓦塀の建物に変わるようである。全体が焼土面に覆われており、火災面以前からここに建物があったことがわかる。建物の中には、束柱に伴う小ぶりの礎石が据えられており、酒造蔵のような土間ではなく、張り床が行われていた建物であり、会所部屋等の用途が考えられる。焼失後の建て替えに伴うと思われる煉瓦が、石垣の直上に残されていた。その煉瓦が、大正期の3年から5年頃に焼かれた煉瓦の刻印と酷似する刻印をもつことから、立替えの時期はその頃に行われたものと考えられる。

また、建物の東には、雨落ち溝が設けられていたが、火災と相前後して埋没しており、焼失後に建てられた建物の雨垂れの跡も検出している。これによって、火災の相前後する時期の建物規模のうち、東側の軒先部分を限定することが可能となる。

なお、会所部屋自体もその大半が調査区外となるため、建物規模や詳細な変遷については不明な点も多い。

事務所　調査区南東で検出した建物である。殆どが調査区外に伸びるため、規模等は不明である。火災を前後して建物は大きく変化するようである。

3．まとめ

今回の調査では、西郷地区では初となる石組の釜場を検出したことは大きな成果といえよう。

また、今回の調査で明らかになったことを総合すると、北に大蔵があり、半間の蔵間露地（排水路）を挟んで前蔵があるという典型的な並び蔵の様式をとるものである。前蔵の前に釜屋その前に中庭があり、南に門を設け、中庭を囲む様にして、建物を配置している。また、槽場は半地下式の構造をとるものである。

文献によれば、明治から終戦までは松岡氏所有の蔵であったようで、明治30年代には千石程の造りであったようである。当時の灘五郷の中では小さい造りの方に属しており、そのため、蔵自体もやや規模の小さいものといえる。しかし、そのために、配置が単純であり、明治40年から大正8年頃に書かれた灘の蔵配置とほぼ一致しており、大正期の蔵配置の典型的な事例のひとつとしてあげられるものと考えられる。

fig. 150　調査区全景

22. 脇浜西遺跡（わきはまにし）　第１次調査

１．はじめに

脇浜西遺跡は、西郷川の右岸標高５ｍ前後の海岸縁辺砂堆上に位置している。現在の海岸線から約550ｍ、明治18年作成の『仮製図』から復元される海岸線より約50ｍ内陸に立地している。

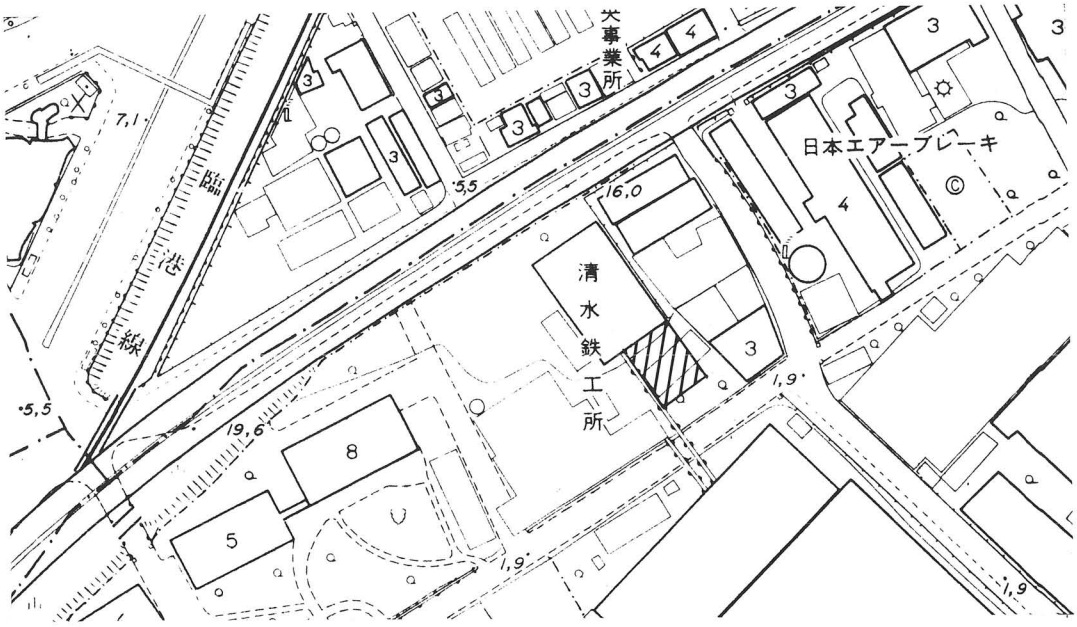


fig. 151
調査地位置図
１：2,500

２．調査の概要

調査は、平成８年11月、平成９年６月に実施した試掘調査の結果に基づいて、南北27ｍ、東西20ｍの範囲について実施した。その結果、現地表下120㎝で室町時代の遺物を含む遺物包含層の下に暗黄褐色粘性砂質土の遺構面を検出した。この遺構面では、掘立柱建物１棟、溝３条、土坑３基、不明遺構１ヵ所を検出した。

なお、遺構を検出した暗黄褐色粘性砂質土以下の層においては、遺物包含層・遺構は発見されなかった。

ＳＢ01　調査区南東部で検出した掘立柱建物である。東西8.2ｍ、南北3.6ｍ以上の規模で、東西５間、南北２間以上と推定される。建物の南側と北側は工場基礎の掘形によって壊滅していると考えられる。建物の掘形は、20㎝～40㎝前後の円形で、30㎝～40㎝の深さを残している。また、直径20㎝前後の柱痕跡を残し、30㎝大の平な河原石を礎盤として用いている柱掘形も検出した。建物の方向は南北の推定梁方向で北35°西である。

ＳＤ01　調査区北西部で検出した溝である。溝の北部でＳＤ02を切って掘られている。幅50㎝、深さ15㎝～20㎝で断面形はＶ字形をしている。溝の北側・南側が工場基礎の掘形によって壊滅している。溝の埋土からは、須恵器・土師器・瓦器などが出土した。

ＳＤ02　調査区北西部で検出したコの字形に巡る溝である。幅1.4～1.2ｍ前後で、深さは25㎝前後を測り、断面形は船底状である。溝が巡る方形壇の内法は一辺8.0ｍある。溝の埋土からは、瓦器椀・皿の完形品、土師器羽釜、須恵器甕片などが多量に出土した。

ＳＤ03　調査区中央部で検出したＬ字形に巡る溝である。幅70㎝前後、深さ15㎝～20㎝前後を測り、断面形は船底状である。溝の南側は工場基礎の撹乱によって壊滅している。溝の東

側は調査区外となる。溝の埋土からは、土師器・須恵器・瓦器が出土している。

ＳＫ01　ＳＤ02の埋没後に掘られた楕円形の土坑である。長径1.2ｍ、短径1.0ｍ、深さ８㎝を計測する。埋土からは土師器・須恵器片が出土している。

ＳＫ02　ＳＤ02の埋没後に掘られた楕円形の土坑である。ＳＤ02の北東隅の西よりに位置する。長径2.5ｍ、短径1.5ｍ、深さ30㎝前後を計測する。断面形は舟底状である。埋土内からは多量の須恵器・瓦器・土師器片が出土した。

ＳＫ03　ＳＤ03掘削前に掘られた台形の土坑である。長辺1.0ｍ、深さ40㎝前後を計測する断面形は舟底状である。埋土内からは、土師器片が出土している。

ＳＸ01　ＳＤ02埋土除去後の底部で確認した落ち込みである。平面形は半月状で長径1.0ｍ短径80㎝、深さ24㎝程度を計測する。ＳＤ02との前後関係は不明で溝内の落ち込みである可能性がある。落ち込み内からは、多量の瓦器・土師器皿等が出土した。

３．ま と め

今回の調査では、近・現代の埋め立て地に近接する立地にも関わらず、中世後期の集落址を検出した。

検出した掘立柱建物と溝とはほぼ同一方位を採り、集落内に一定の区画割が存在していたことを窺わせる。その集落の営まれた時期は、精細な出土遺物の検討が必要であるが、13世紀後半を中心とした時期が考えられ、出土遺物の検出状況から比較的短時期に経営された集落と考えられる。

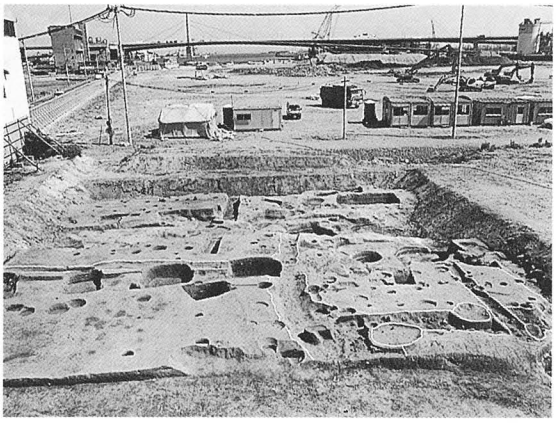


fig. 152　調査区全景

fig. 153　ＳＢ01

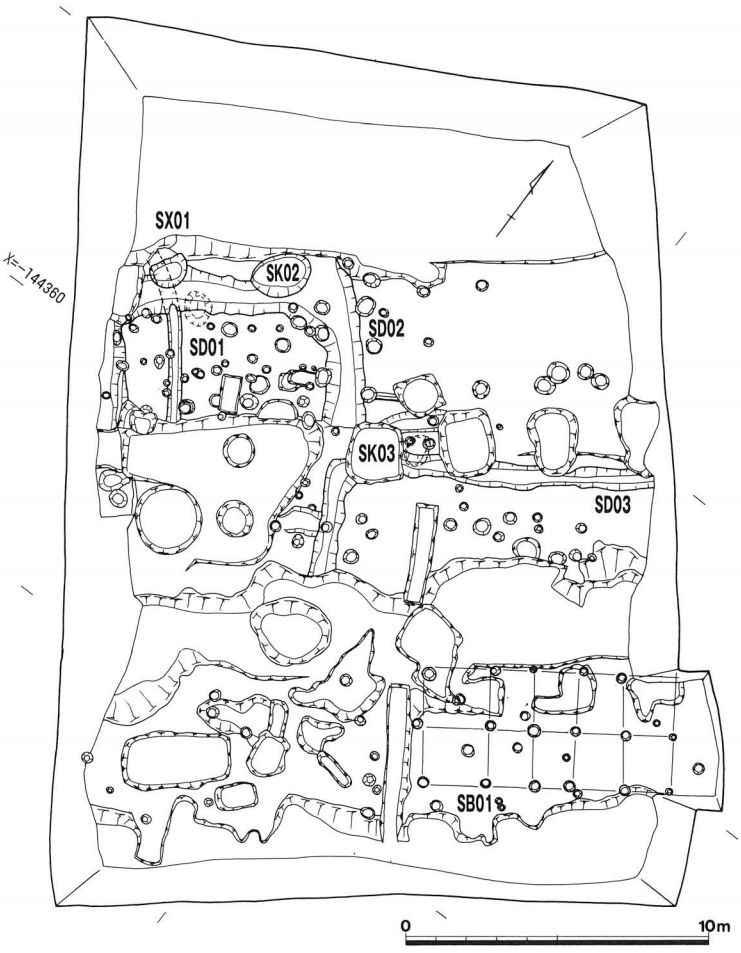


fig. 154　調査区平面図

23. 中山手遺跡（なかやまて）　第２次調査

１．はじめに

当遺跡は、中山手通四丁目に位置する遺跡で、中世の集落跡として周知されている。この付近は諏訪山麓にあり、市街地化している。詳しい遺跡の性格については調査例がなく、規模・性格については不明である。現在、周囲には中宮古墳が点在しているが、中世を遡る集落跡は周知されていない。

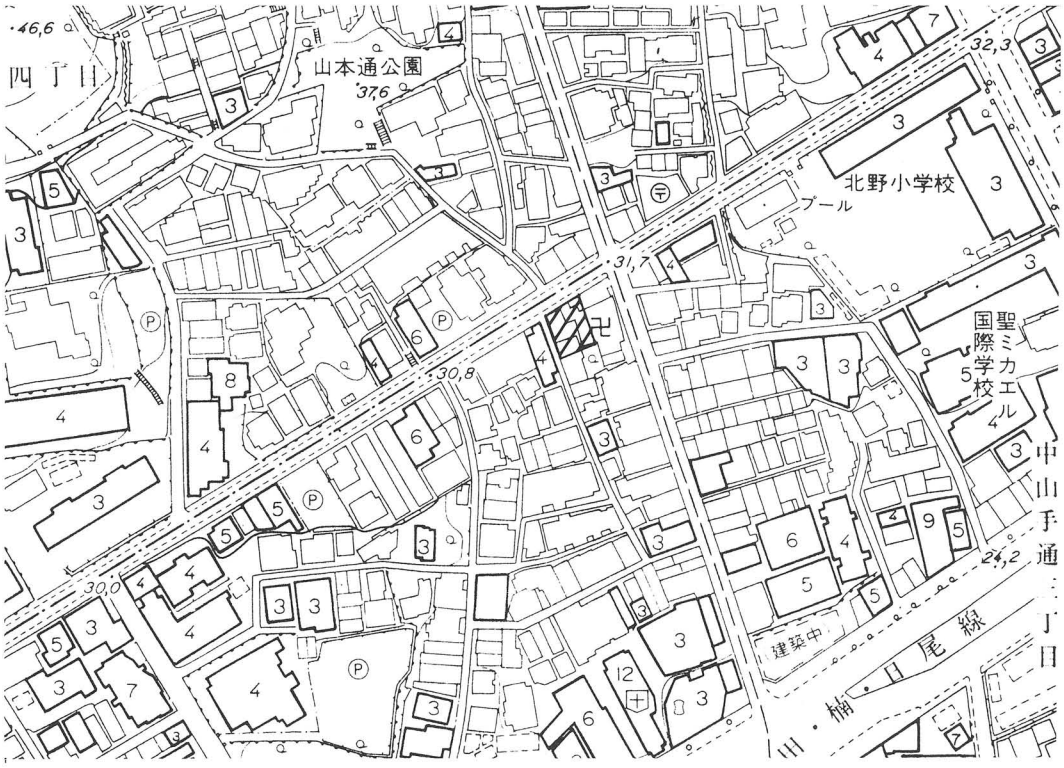


fig. 155
調査地位置図
１：2,500

２．調査の概要

事前確認調査の結果を基にして調査を行い、掘削影響深度を考慮して約210㎝程掘り下げ、最終的に弥生時代末の遺構面を検出した。

基本層序

調査区の基本層序は以下のとおりである。

表層は震災前に存在していた建物用造成盛土と震災後の整地層であった。これらの盛土を除去すると調査区の南過半では、盛土以前の敷地境界をなしていた石垣を確認した。

以下、各地区（Ａ地区：建物建設予定地、Ｂ地区：建物建設予定のうち石垣境より南、Ｃ地区：駐車場建設予定地）共にⅠ層は灰オリーブ色細粒砂５Ｙ4/2（耕作土）、Ⅱ層はオリーブ褐色細粒砂2.5Ｙ4/3（粗粒砂混）、Ⅲ層は暗灰黄色中粒砂2.5Ｙ4/2（粗粒砂混・鉄分含）、Ⅳａ層は黒褐色細粒砂2.5Ｙ3/1（粗粒砂混・マンガン混・炭混・遺物含）、Ⅳｂ層は暗オリーブ褐色中粒砂2.5Ｙ3/3（粗粒砂混・遺物含）、Ｖａ層は暗灰黄色粗粒砂2.5Ｙ4/2、Ｖｂ層は黄褐色シルト2.5Ｙ5/3、Ｖｃ層は灰オリーブ色細粒砂５Ｙ4/2、Ｖｄ層はオリーブ褐色粗粒砂2.5Ｙ4/3（酸化）、Ⅵ層は灰オリーブ色細粒砂５Ｙ4/2であった。

このうちⅣ層は古墳時代前期の遺物包含層と考えられる。また、Ｖ層は弥生時代末の遺構面（地山）である。

落込流路　落込流路は盛土の下の面でⅡ層を肩にして、調査区を斜めに横切るようにA地区の北半とC地区全域で検出した。埋土は①褐色粗粒砂7.5YR4/6（酸化）、②暗灰黄色粗粒2.5Y4/2、③オリーブ褐色粗粒砂2.5Y4/3、④褐色極粗粒砂7.5YR4/6（酸化）、⑤オリーブ褐色粗粒砂2.5Y4/3（③より細かい）、⑥黄灰色粗流砂2.5Y4/1.5、⑦オリーブ褐色粗流砂2.5Y4/3（中粒多い）、⑧黄灰色粗流砂2.5Y4/1.5（⑥に極粗粒砂含）、⑨オリーブ褐色粗粒砂2.5Y4/3、⑩暗灰黄色粗粒砂2.5Y4/2、⑪オリーブ褐色粗粒砂2.5Y4/3、⑫褐色極粗粒砂7.5YR4/6（酸化）、⑬オリーブ褐色粗粒砂2.5Y4/3、⑭黄灰色中粒砂2.5Y4.5/2、⑮オリーブ褐色粗粒砂2.5Y4/3、⑯オリーブ褐色粗粒砂2.5Y4/2、⑰灰オリーブ色中粒5Y4/2、⑱暗褐色極粗粒砂7.5YR3/4（酸化）、⑲オリーブ褐色粗粒砂2.5Y4/2（⑯より粗い）、⑳暗灰黄色細粒砂2.5Y5/2（中粗砂混）、㉑黒褐色極粗粒砂2.5Y3/2であり、調査区の北東から南西に向かって流れ込むように厚くレンズ状堆積を呈していた。これら堆積は遺物等混入物の全くない山砂であるところから、洪水（昭和13年？）による堆積が考えられる。

落込下層　落込流路の下からは、ア：暗オリーブ褐色中粒砂10Y4/1（中粒砂・炭混）、イ：灰色シルト7.5Y4/3（にぶい黄褐色土粒混10YR4/3）、ウ：灰色シルト7.5Y4/3（酸化根跡含）、エ：灰オリーブ色細粒砂7.5Y4/2（中粒砂混・粗粒砂ブロック）、オ：暗オリーブ灰色細粒砂5GY4/1（中粒砂混）、カ：暗灰黄色シルト2.5Y4/2、キ：暗緑灰色細粒砂5Y3/1（中粒砂混）、ク：灰色細粒砂5Y4/1（中粒砂混）、ケ：灰オリーブ色中粒砂7.5Y5/2（粗粒砂混・酸化根跡含）、コ：灰色シルト7.5Y4/1（中粒砂ブロック・炭混）等の層が確認できた。これら堆積は近世の耕作土の可能性がある。

炭・焼土層1・2　A地区・C地区の北西隅では、落込流路埋土下で多量の炭と陶磁器を包含しているマウンド状の高まりを検出した。これらは出土遺物にみられる「諏訪山常磐楼（軒）」の文字と遺物の年代から、江戸末～明治にかけて存在していた料亭もしくは茶屋の火災にともなう火事場整理と投棄であると考えられる。

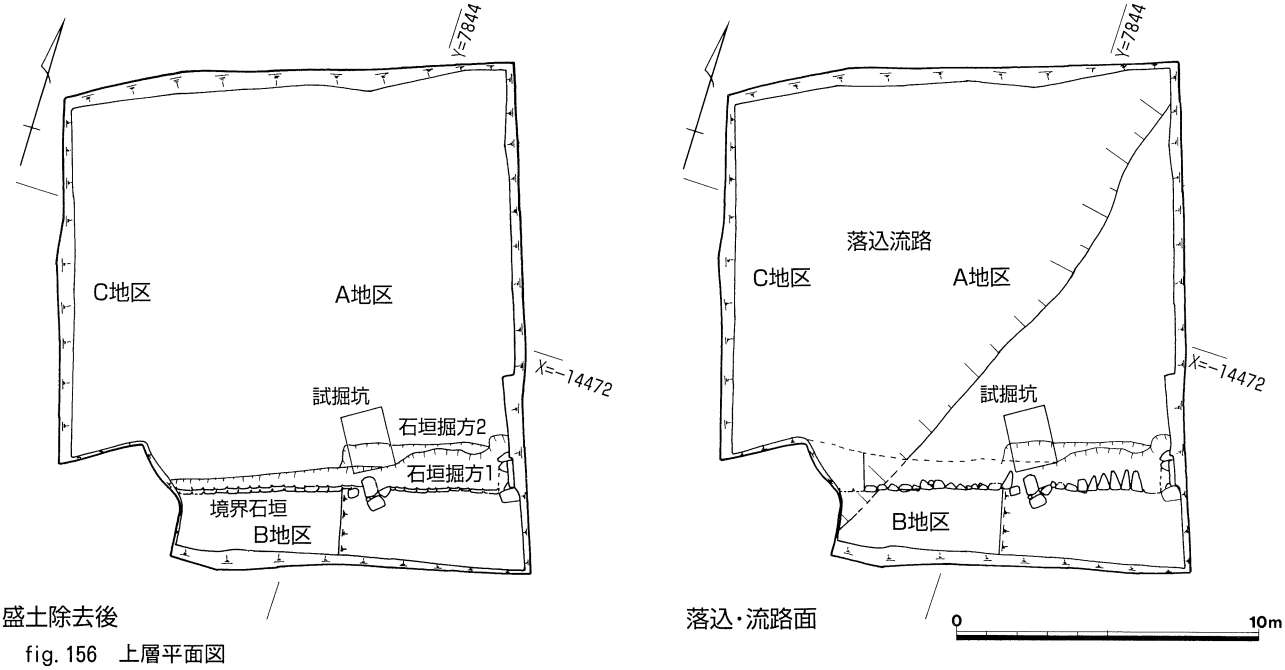


fig. 156　上層平面図

第１遺構面　第１遺構面はＡ地区の落込下層上面・Ⅱ層上面・Ⅲ層上面で検出できた遺構である。

撹乱１～12　いずれも、上部の流路埋土と同じ土で埋まっている点、ベースとしている落込下層面から明治に入る遺物が出土していることから、これらは明治～昭和初期の撹乱と考えられる。

ＳＥ１　調査区の北東隅に位置する井戸である。検出面から１ｍ50㎝程掘削したが、伏流水のため掘削不能となった。埋土は上部の流路埋土で一気に埋まっている。遺物は発見していない。撹乱と同じ時期のものと考えられる。

ＳＤ１　ＳＤ１はＳＥ１の伏流水を排水する溝である。埋土は①暗オリーブ褐色粗粒砂５Ｙ4/4（酸化）、②黒褐色細粒砂2.5Ｙ3/1（粗粒砂混）で、上部の流路埋土により埋まっているので、井戸も含めて撹乱と同じ時期のものと考えられる。

ＳＤ２　ＳＤ２はＡ地区の南を東から西に向かって斜めに流れ、一段下がったＢ地区の南西端に向かって流れる流路である。埋土は①黄褐色極粗粒砂2.5Ｙ5/2（炭混）、②灰オリーブ色細粒砂５Ｙ5/2（炭混）、③灰オリーブ色細粒砂５Ｙ5/3（炭混）、④オリーブ褐色細粗砂2.5Ｙ4/3（炭混）、⑤オリーブ褐色中粒砂2.5Ｙ4/4、⑥暗オリーブ褐色中粒砂2.5Ｙ3/3、⑦灰オリーブ色中粒砂7.5Ｙ6/2（遺物含）、⑧灰オリーブ色細粒砂５Ｙ4/2（炭混）、⑨暗オリーブ褐色細粒砂2.5Ｙ4/4、⑩灰オリーブ色中粒砂7.5Ｙ6/2（遺物含）、⑪オリーブ褐色細粒砂2.5Ｙ4/4、⑫暗褐色極粗粒砂10ＹＲ3/3（酸化・遺物含・灰オリーブ極細粒砂５Ｙ5/2ブロック）であった。特に⑦、⑩層から遺物が多量に出土している。

ＳＫ１　Ａ地区の南東隅位置する土坑である。土坑は一辺90㎝を計る木組みの櫃の様な物が納められていた。中には上層に炭層が充塡されており、下層には灰色土がみられた。遺物は発見していないが、層位的関係から明治～昭和初期のものと考えられる。

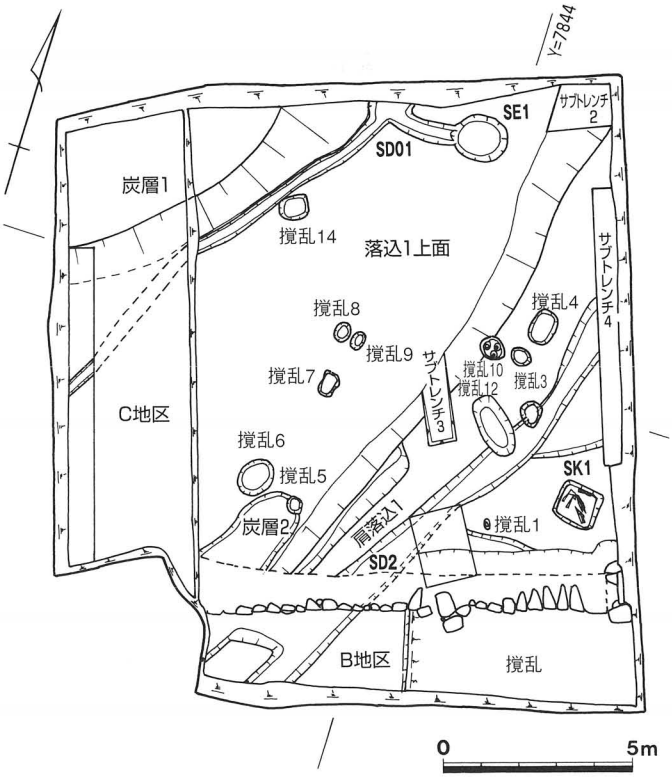


fig. 157　第１遺構面平面図

fig. 158　第１遺構面全景

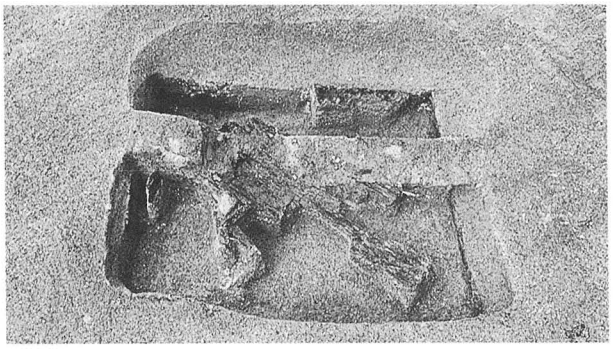


fig. 159　ＳＫ01

第２遺構面　第２遺構面はＡ地区東半にある高まりにかぶっていた、Ⅱ層・Ⅲ層を掘削した面と石垣掘形の下層で検出した灰色層＋褐色砂層を掘削した面、Ｂ地区ＳＤ２の下層に広がっていた灰色層＋褐色砂層を掘削した面で検出した遺構である。

２ＳＰ６　木桶がはめられていた坑で、３枚板でつながれた蓋の下には暗黒灰色砂土が深く続いていた。状況からみて小規模な水くみ井戸の可能性がある。

２ＳＰ７・９　２ＳＰ７には中央に一本の木痕が認められた。２ＳＰ７・９には三本の木痕が認められた。いずれも埋土は暗灰色土であった。遺物は出土していない。

２ＳＤ３　２ＳＤ３はＳＤ２の下層に位置する溝で、方向もほぼ一致している。埋土は①暗灰黄色細粒砂 2.5Y4/4（中粒砂混）、②にぶい黄褐色粗粒砂 10ＹＲ4/3（酸化）、③暗灰黄色中粒砂 2.5Y3.5/2、④黒褐色極粗粒砂 2.5Y3/2、⑤灰オリーブ色細粒砂５Ｙ4/2、⑥黄褐色粗粒砂 2.5Y5/4（暗オリーブ褐色中粒砂 2.5Y3/3 混）であり、埋土中から須恵器を含む古式土師器が出土している。

２ＳＫ１　２ＳＫ１は境界石垣の下からＢ地区にかけて広がる大きな土坑である。埋土は褐灰色土であった。埋土中から須恵器を含む古式土師器が出土している。

２ＳＰ３　２ＳＰ３は２ＳＫ１の東方に位置するピットである。埋土は灰色土で、埋土中から須恵器を含む古式土師器が出土している。

２ＳＰ１・４・５　２ＳＰ１・４・５はＢ地区のＶ層上面で検出したピットである。埋土は２ＳＰ１が褐灰色土、２ＳＰ４・５が暗灰色土であった。出土遺物から２ＳＤ３や２ＳＫ１と同時期の遺構であると考えられる。

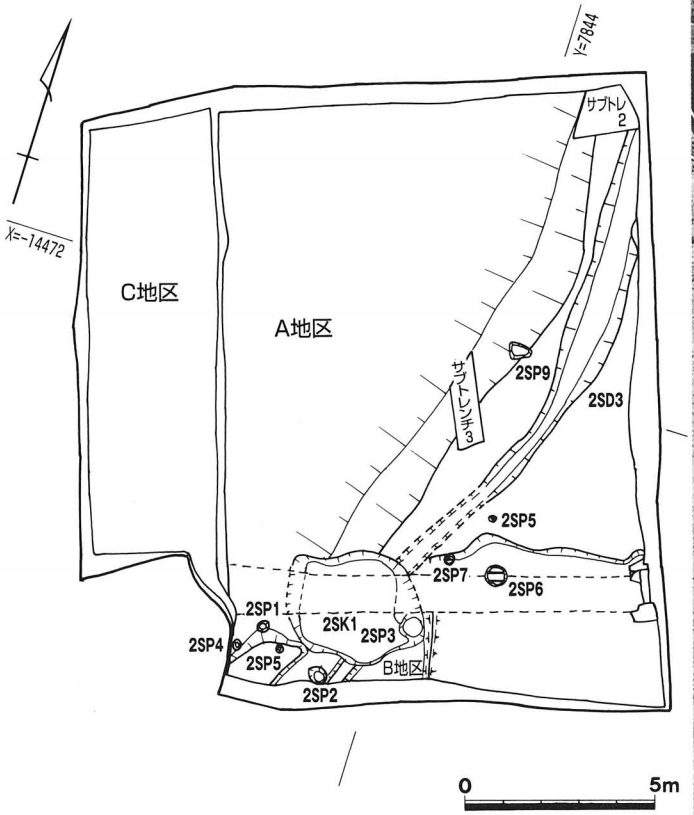


fig. 160　第２遺構面平面図

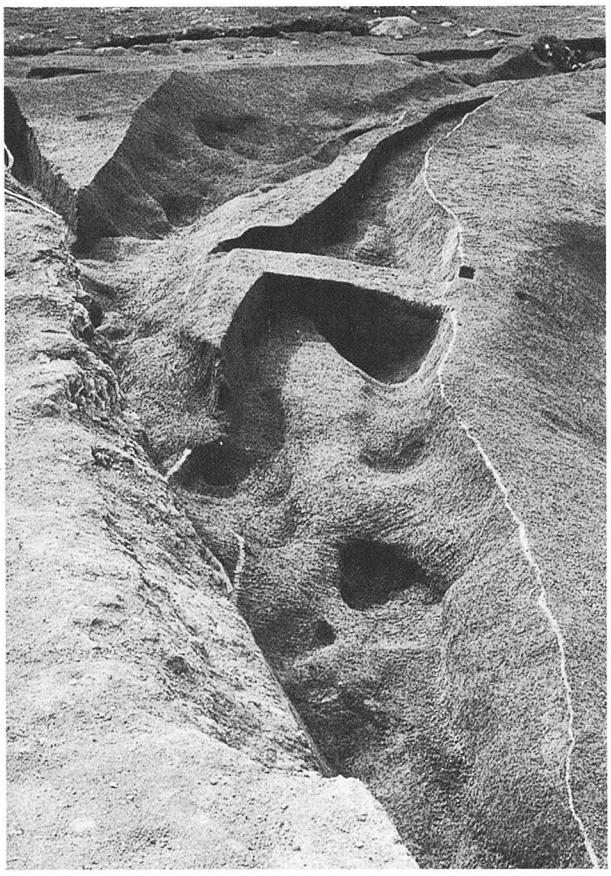


fig. 161　２ＳＤ03

第３遺構面　第３遺構面はＡ地区東半にある高まりにかぶっていたⅣ層を掘削したＶ層上面で検出した遺構である。

３ＳＤ１・２・３　３ＳＤ１・２・３は溝状になる一連の遺構と考えられるものである。埋土は暗茶褐色粗粒砂であった。高坏の破片、韓式土器甕片が出土している。

３ＳＤ４　３ＳＤ４は円弧を描く溝状の遺構である。埋土は暗茶褐色粗粒砂であった。遺物は出土していない。

３ＳＫ１　３ＳＫ１は調査区の東北隅にかかる土坑である。埋土は黄褐色粗粒砂 2.5Ｙ5/4 であった。弥生時代末の土器片が出土している。

３ＳＫ２　３ＳＫ２は落込肩部にかかる不整形の土坑である。埋土は黄褐色粗粒砂 2.5Ｙ5/4 であった。遺物は出土していない。

３ＳＫ３・４・５　３ＳＫ３・４は撹乱によって破壊されていたが元は同じ土壙であったと考えられる。３ＳＫ５は削平された浅い土坑で一部は試掘坑で掘削している。埋土は全て暗茶褐色粗粒砂である。

３ＳＫ７・ＳＰ４　いずれも３ＳＤ４に切られているが、埋土には差違が無く暗茶褐色粗粒砂であった。

３ＳＫ８・10　ＳＫ10をＳＫ８が切る形になっている。いずれも浅い土坑であり、埋土は３ＳＫ８が暗茶褐色粗粒砂、３ＳＫ10が茶褐色土であった。

３ＳＫ６・11・12　いずれも地山の肩部にあり一部が削られている長い楕円形を呈する土坑である。埋土は暗茶褐色粗粒砂であった。

３ＳＰ１・２・３　３ＳＰ１・２・３はいずれも柱穴であるが性格は不明である。埋土は暗茶褐色粗粒砂であった。

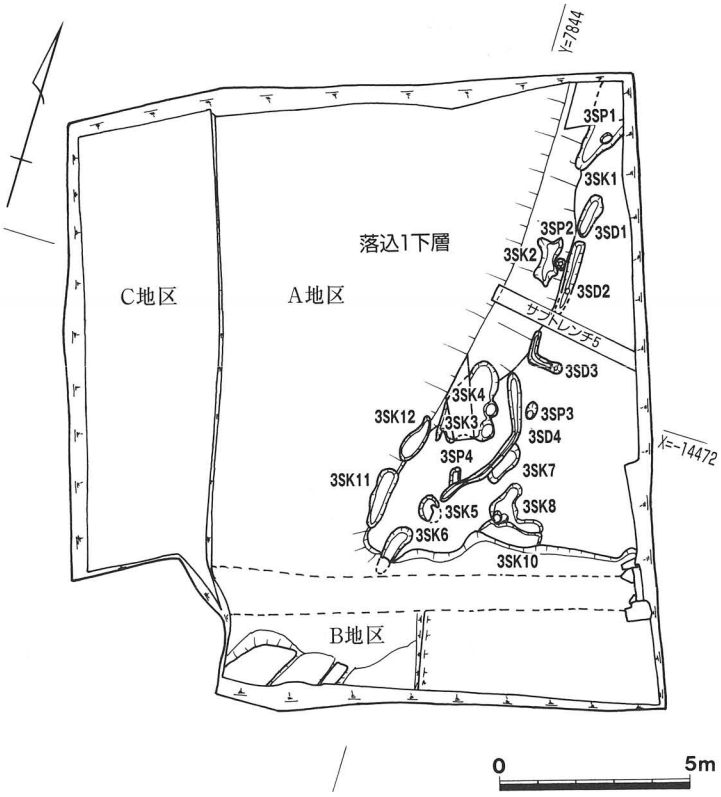


fig. 162　第３遺構面平面図

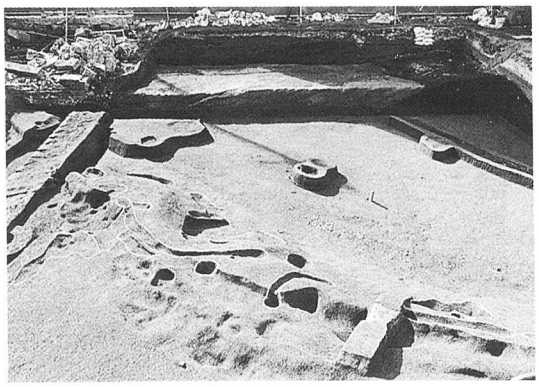
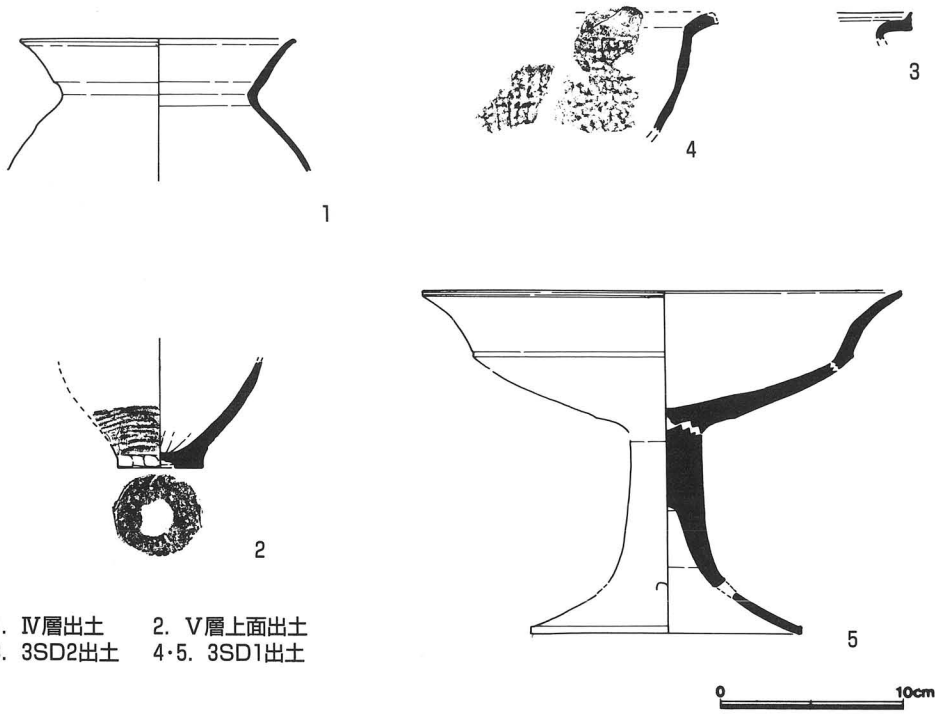


fig. 163　第３遺構面全景

fig. 164　第３遺構面全景



1. Ⅳ層出土　2. Ⅴ層上面出土
3. 3SD2出土　4･5. 3SD1出土

fig. 165
出土遺物実測図

出土遺物　焼土・炭層１・２からは江戸時代末から明治にかけての古伊万里磁器、在地系土器を発見した。これらの遺物は同種類の磁器や古伊万里伝世品、特に「諏訪山常磐楼」の銘から、料亭の台所廻りの火事による投棄と考えられる。

落込下層からは18世紀後半～19世紀の古伊万里磁器と在地系陶器、須恵器、古式土師器が出土した。

第１面遺構からはＳＤ１、ＳＤ２から遺物が出土している。ＳＤ１からは18世紀～19世紀の陶磁器がＳＤ２からは17世紀後半～19世紀の陶磁器が出土している。

第２遺構面からは２ＳＤ３、２ＳＫ１、２ＳＰ３から須恵器と土師器が出土している。

第３遺構面からは３ＳＤ１・２・３、３ＳＫ１から弥生時代末の土器が出土している。

fig. 166　炭層断面

3．ま と め

今回の調査では以下の点が明らかになった。

①洪水による大きな落込流路を検出した。

②「諏訪山常磐楼」の火災の跡を発見した。

③流路の遺物から上流に古墳時代の遺跡の存在が想定できる。

④弥生時代末の集落跡を確認した。

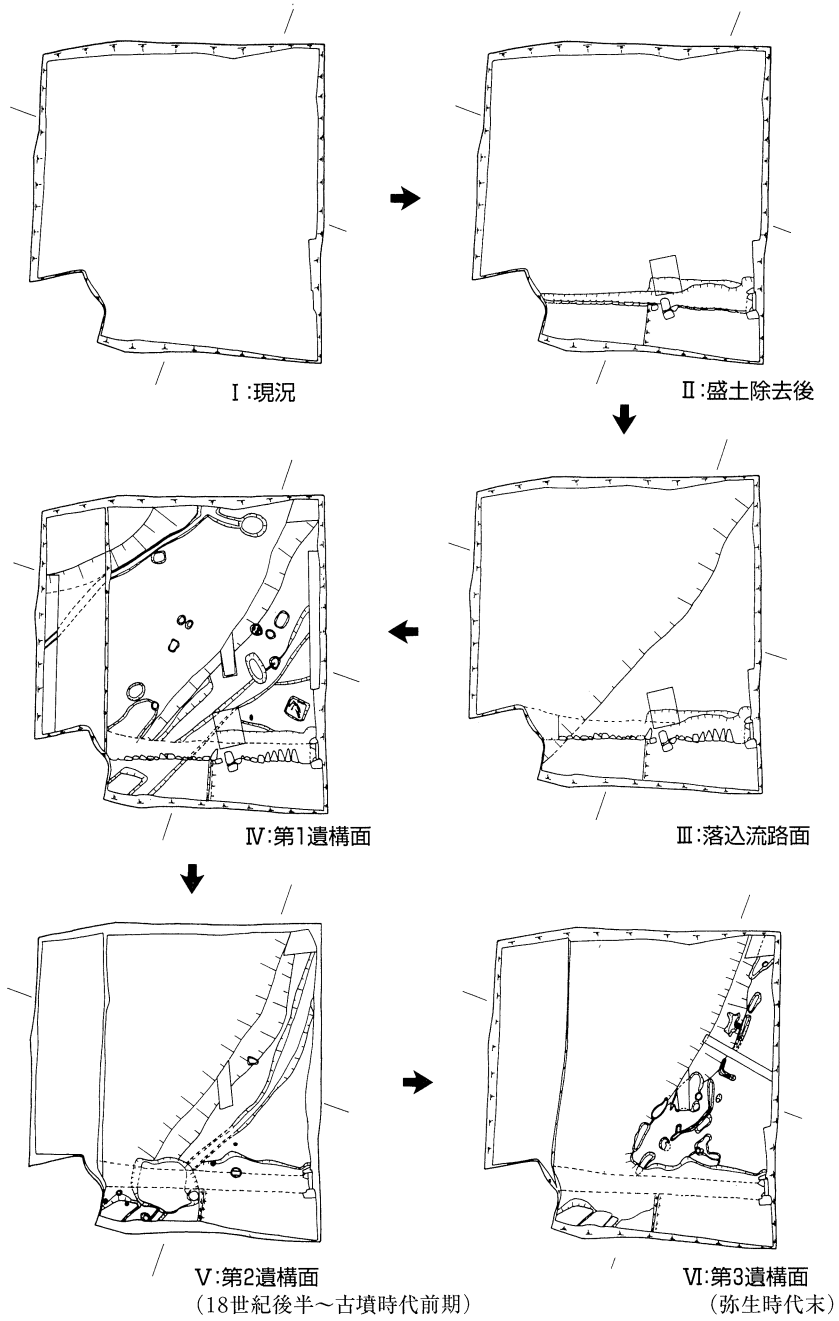
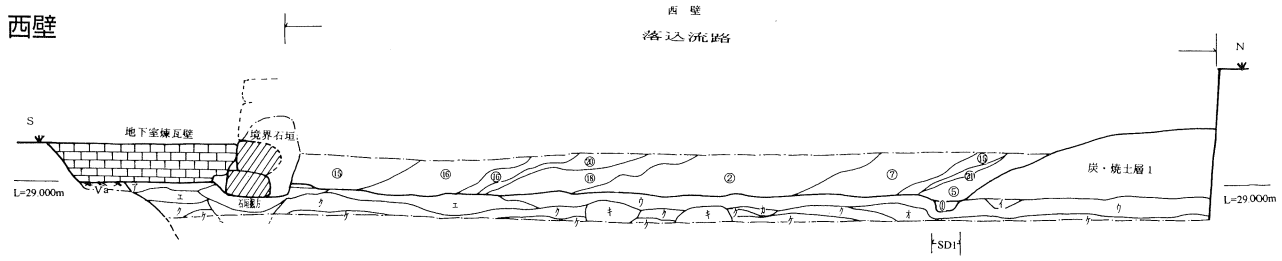
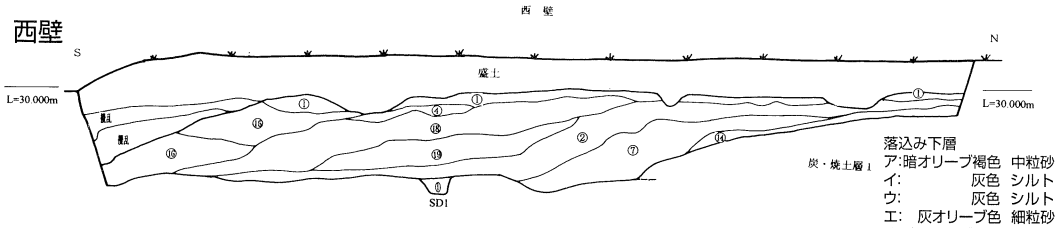


fig. 167　遺構面変遷図

西壁

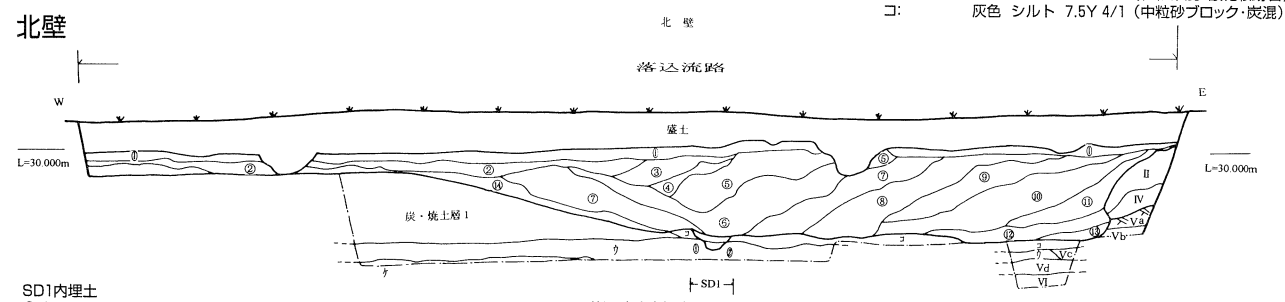


西壁



落込み下層
ア:暗オリーブ褐色 中粒砂 10Y 4/1（中粒砂・炭混）
イ: 灰色 シルト 7.5Y 4/3（にぶい黄褐色土粒混10YR4/3）
ウ: 灰色 シルト 7.5Y 4/3（酸化根跡含）
エ: 灰オリーブ色 細粒砂 7.5Y 4/2（中粒砂混・粗粒砂ブロック）
オ:暗オリーブ灰色 細粒砂 5GY 4/1（中粒砂混）
カ: 暗灰黄色 シルト 2.5Y 4/2
キ: 暗緑灰色 細粒砂 5Y 3/1（中粒砂混）
ク: 灰色 細粒砂 5Y 4/1（中粒砂混）
ケ: 灰オリーブ色 中粒砂 7.5Y 5/2（粗粒砂混・酸化根跡含）
コ: 灰色 シルト 7.5Y 4/1（中粒砂ブロック・炭混）

北壁

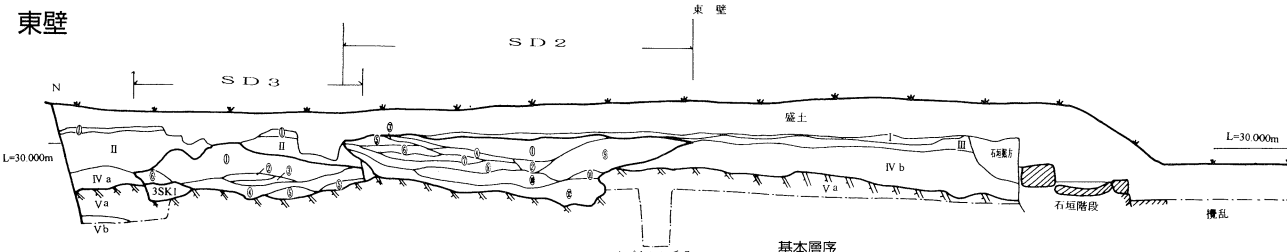


SD1内埋土
①暗オリーブ褐色 粗粒砂 5Y 4/4（酸化）
② 黒褐色 細粒砂 2.5Y 3/1（粗粒砂混）

2SD3内埋土
① 暗灰黄色 細粒砂 2.5Y 4/4（中粒砂混）
② にぶい黄褐色 粗粒砂 10YR4/3（酸化）
③ 暗灰黄色 中粒砂 2.5Y3.5/2
④ 黒褐色極粗粒砂 2.5Y 3/2
⑤ 灰オリーブ色 細粒砂 5Y 4/2（③より細かい）
⑥ 黄褐色 粗粒砂 2.5Y 5/4（暗オリーブ褐色中粒砂2.5Y3/3混）

落込流路内埋土
① 褐色 粗粒砂 7.5YR4/6（酸化）
② 暗灰黄色 粗粒砂 2.5Y 4/2
③ オリーブ褐色 粗粒砂 2.5Y 4/3
④ 褐色極粗粒砂 7.5YR4/6（酸化）
⑤ オリーブ褐色 粗粒砂 2.5Y 4/3（③より細かい）
⑥ 黄灰色 粗粒砂 2.5Y 4/1.5
⑦ オリーブ褐色 粗粒砂 2.5Y 4/3（中粒多い）
⑧ 黄灰色 粗粒砂 2.5Y 4/1.5（⑥に極粗粒砂含）
⑨ オリーブ褐色 粗粒砂 2.5Y 4/3
⑩ 暗灰黄色 粗粒砂 2.5Y 4/2
⑪ オリーブ褐色 粗粒砂 2.5Y 4/3
⑫ 褐色極粗粒砂 7.5YR4/6（酸化）
⑬ オリーブ褐色 粗粒砂 2.5Y 4/3
⑭ 黄灰色 中粒砂 2.5Y 4.5/2
⑮ オリーブ褐色 粗粒砂 2.5Y 4/3
⑯ オリーブ褐色 粗粒砂 2.5Y 4/2
⑰灰オリーブ 色 中粒砂 5Y 4/2
⑱ 暗褐色極粗粒砂 7.5YR3/4（酸化）
⑲ オリーブ褐色 粗粒砂 2.5Y 4/2（⑯より粗い）
⑳ 暗灰黄色 細粒砂 2.5Y 5/2（中粗砂混）
㉑ 黒褐色極粗粒砂 2.5Y 3/2

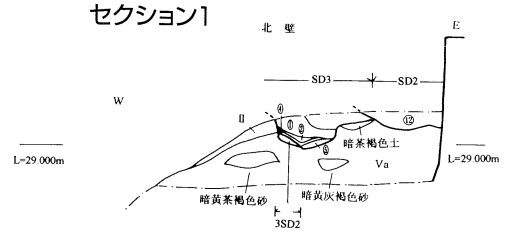
東壁



3SK1内埋土
黄褐色粗粒砂 2.5Y 5/4

基本層序
Ⅰ : 灰オリーブ色 細粒砂 5Y 4/2（耕作土）
Ⅱ : オリーブ褐色 細粒砂 2.5Y 4/3（粗粒砂混）
Ⅲ : 暗灰黄色 中粒砂 2.5Y 4/2（粗粒砂混・鉄分含）
Ⅳa : 黒褐色 細粒砂 2.5Y 3/1（粗粒砂混・マンガン混・炭混・遺物含）
Ⅳb : 暗オリーブ褐色 中粒砂 2.5Y 3/3（粗粒砂混・遺物含）
Va : 暗灰黄色 粗粒砂 2.5Y 4/2
Vb : 黄褐色 シルト 2.5Y 5/3
Vc : 灰オリーブ色 細粒砂 5Y 4/2
Vd : オリーブ褐色 粗粒砂 2.5Y 4/3（酸化）
Ⅵ : 灰オリーブ色 細粒砂 5Y 4/2

サブトレンチ5 セクション1



SD2内埋土
① 黄褐色極粗粒砂 2.5Y 5/2（炭混）
② 灰オリーブ色 細粒砂 5Y 5/2（炭混）
③ 灰オリーブ色 細粒砂 5Y 5/3（炭混）
④ オリーブ褐色 細粒砂 2.5Y 4/3（炭混）
⑤ オリーブ褐色 中粒砂 2.5Y 4/4
⑥暗オリーブ褐色 中粒砂 2.5Y 3/3
⑦ 灰オリーブ色 中粒砂 7.5Y 6/2（遺物含）
⑧ 灰オリーブ色 細粒砂 5Y 4/2（炭混）
⑨暗オリーブ褐色 細粒砂 2.5Y 4/4
⑩ 灰オリーブ色 中粒砂 7.5Y 6/2（遺物含）
⑪ オリーブ褐色 細粒砂 2.5Y 4/4
⑫ 暗褐色極粗粒砂 10YR3/3（酸化・遺物含・灰オリーブ極細粒砂5Y5/2ブロック）

fig. 168 調査区断面図

24. 雲井（くもい）遺跡　第10次調査

1. はじめに

雲井遺跡は神戸市の中心である三宮駅前の神戸市中央区雲井通・旭通に位置する。遺跡は六甲山系の南側の扇状地末端付近に営まれており、これまでに９回の発掘調査が行われて、縄紋時代早期から弥生時代中期にかけての遺構、遺物が見つかっている。

今回の第10次調査は、旭通団地建設事業に伴い、遺跡に影響の及ぶ部分について調査を実施した。

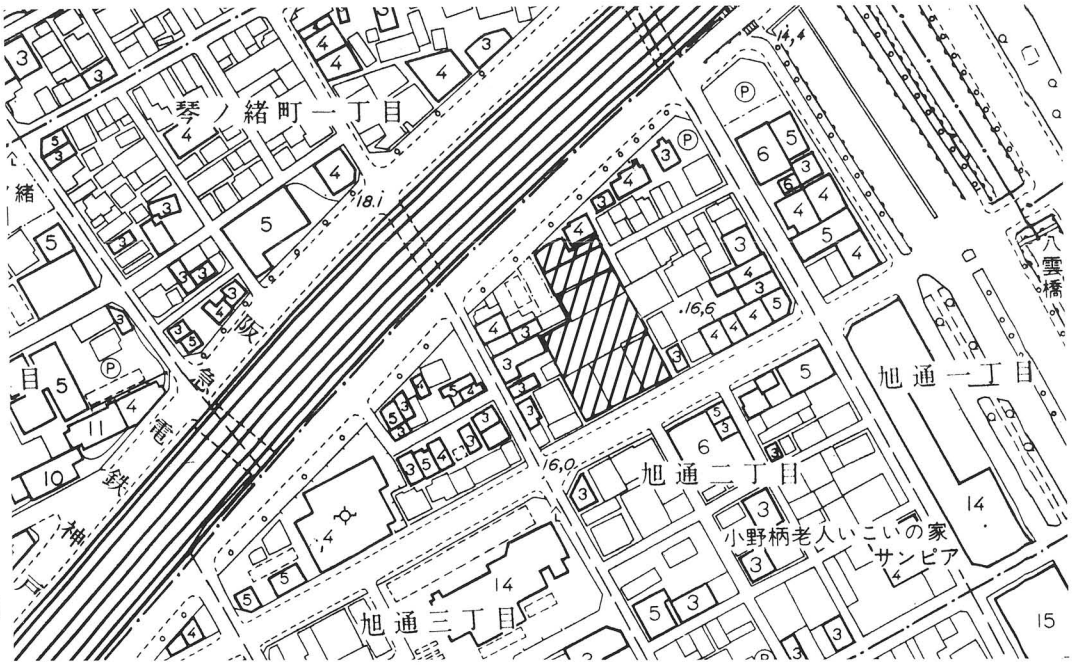


fig. 169
調査地位置図
1：2,500

2. 調査の概要

盛土（50cm）下約10cmで弥生時代の遺物を含む遺物包含層（10cm）があり、その下の黒褐色シルト混中砂上面で古墳時代の遺構を検出した。遺構としては溝15条・ピット多数・掘建柱建物１棟・竪穴式住居１棟を検出した。

掘立柱建物

調査区南西端で検出された建物である。柱堀形は、１辺85～105cm、深さ52～83cmを測る。柱間は、130cm程度と狭いもので、南北４間である。北側の東西は３間であるが、南では、２間しかなく、妻の部分の間数が一致しない。

時代は、出土遺物から、古墳時代後期のＴＫ43～ＴＫ209にかけての時期に当たるとみられる。

竪穴式住居

調査区中央の南で検出された住居址である。１辺６ｍを測るが、北側の⅔が撹乱によって破壊されている。コーナー部分からやや内に対角線上に当たる部分に、柱穴を

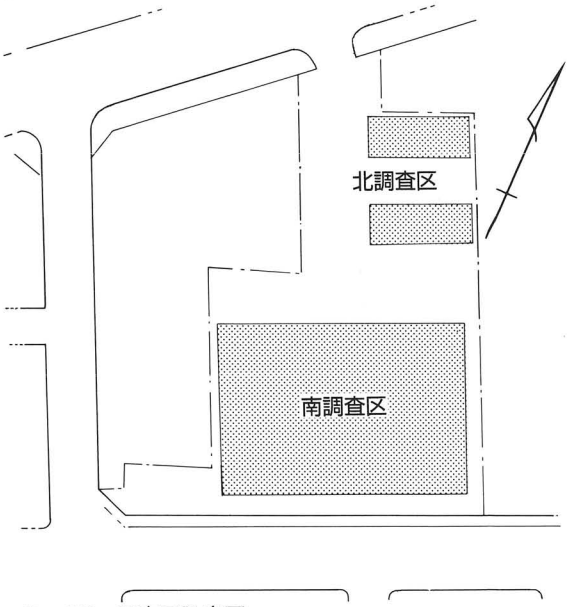


fig. 170　調査区設定図

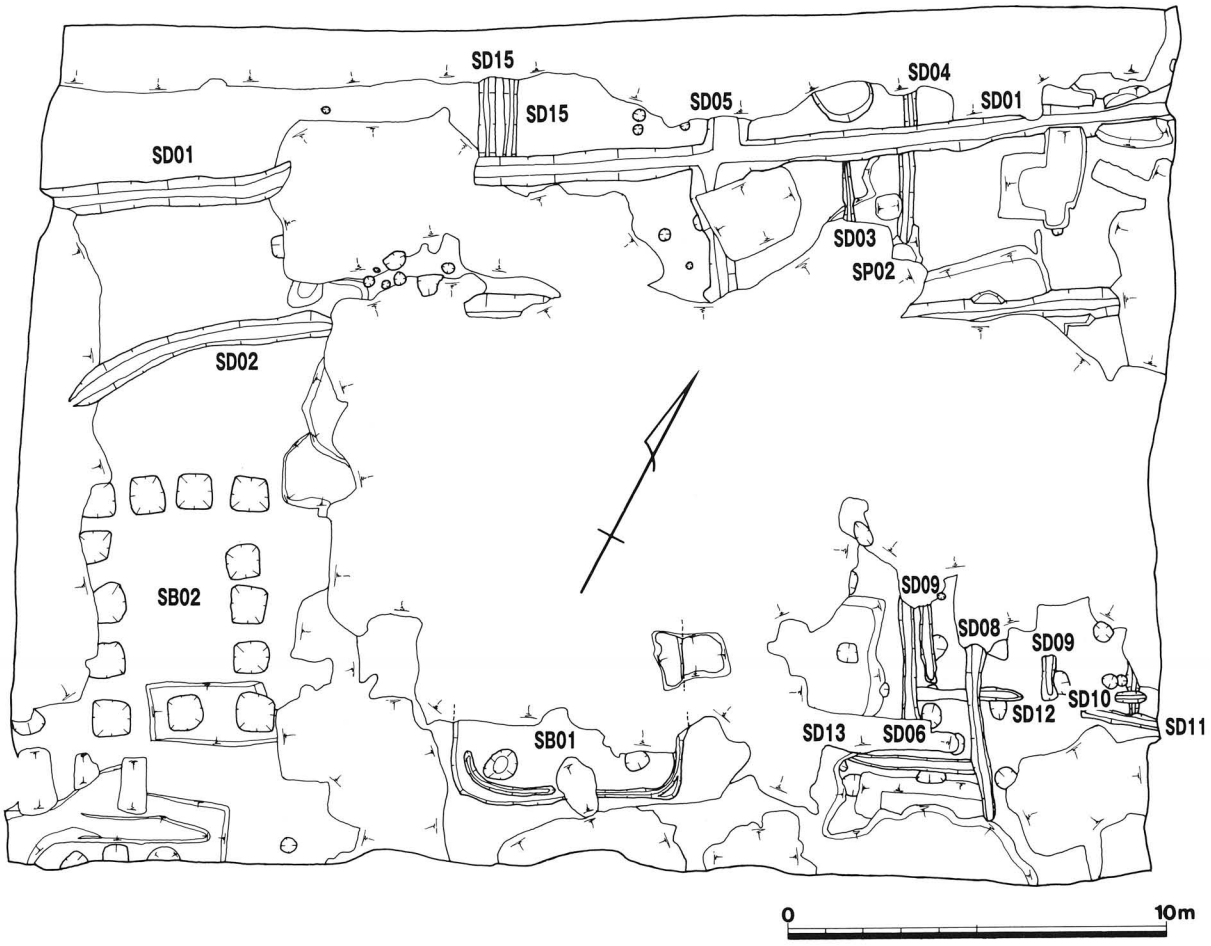


fig. 171　南調査区平面図

fig. 172　北調査区全景

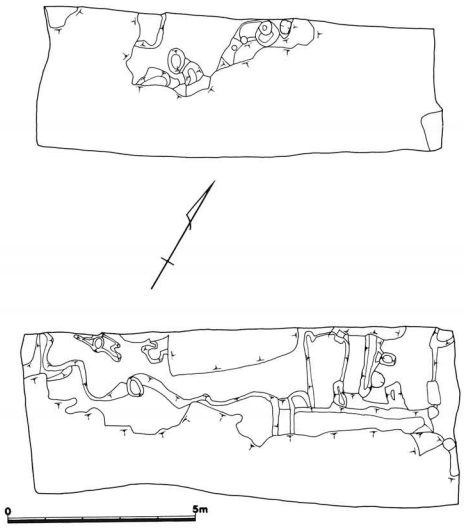


fig. 173　北調査区平面図

それぞれに確認している。また、幅20㎝、深さ５㎝程度の周壁溝をもつ。

床の上面は、焼土と炭におおわれていた。内部から出土した遺物は、床面直上のものは見られなかったが、一部に二次焼成をうけたと思われるものも見受けられた。なお、時期としては、古墳時代後期のＴＫ10～ＭＴ85にかけての時期に当たる。

fig. 174　調査区全景

ＳＤ02　　調査区北側に位置し、東北東から西南西にはしる、幅70㎝、深さ20㎝の溝である。ＳＤ01とほぼ平行にはしるもので、その間隔は、４ｍから4.5ｍである。時期としては、いずれの溝からも、ＴＫ43～ＴＫ209に併行する遺物が出土している。しかし、いずれも埋土上層からの出土であり、作られた時期については、若干逆上る可能性をもつ。

ＳＤ03　　調査区北側に位置し、東北東から西南西にはしる、幅40㎝、深さ10㎝の溝である。

ＳＤ05　　調査区北側に位置し、北北西から南南東にはしる、幅66㎝、深さ28㎝の溝である。

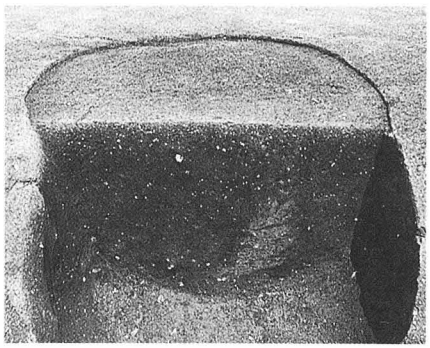


fig. 175　ＳＰ06断面

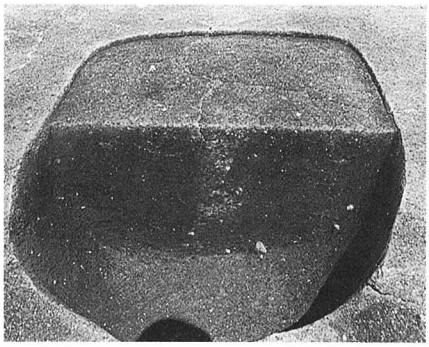


fig. 176　ＳＰ07断面

fig. 177　掘立柱建物

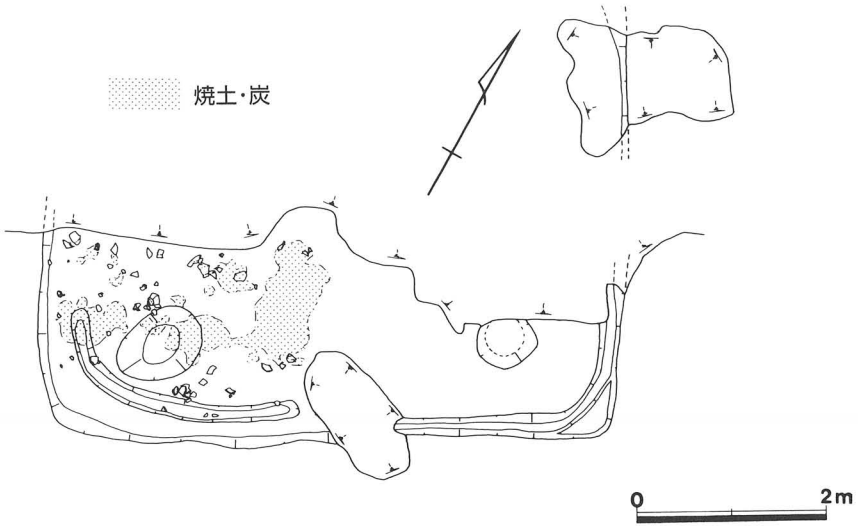


fig. 178　ＳＢ01平面図

ＳＤ06～10　調査区東側に位置し、北北西から南南東にはしる、幅40cm前後、深さ４～10cmの溝である。

ＳＤ14・15　調査区北側に位置し、北北西から南南東にはしる、幅70cm、深さ20cmの溝である。

ピット　深さ30cm前後、直径30～50cm前後のピットを80箇所確認した。いずれも建物になるようなものはみられなかった。

３．ま　と　め

今回の調査では、中央部に大きな撹乱があり、わずかに残された部分の調査となった。

そのなかで、僅かに残った部分から大形の柱堀形をもつ掘立柱建物が検出されたことは、ひとつの成果と言えよう。

これまでも大形の柱掘形をもつ掘立柱建物は、幾つか検出されているが、いずれも平安時代のものである。今回みつかったような１辺１ｍ前後の柱堀形をもつ建物で、古墳時代後期のものは、神戸市では、極僅かに確認されているだけである。

この建物の性格については、６世紀末前後に各地で出現する官衙的な性格のものと比較する必要が認められるが、１棟のみで、建物配置が不明な現在では、保留せざるをえない。しかし、この周辺に、掘立柱建物を中心とした集落が存在する可能性は十分にあると言えよう。

また、雲井遺跡は、弥生時代と縄文時代を中心とする遺跡であるが、今回の調査では、包含層から弥生土器が僅かに検出されたのみで、遺構はまったく確認されておらず、縄文土器もまったく検出されなかった。

また、調査区内の断ち割りを行ったが地表下５ｍにおいても遺物は出土せず、東から西へ急激に落ち込む堆積が確認されたにすぎなかった。なお、隣接する第９次調査地においては弥生時代の遺構の他、縄文土器も確認されている。

これらのことから、雲井遺跡は、西から東へと高くなる地形のなかで、特に今回の調査地付近が急激に高くなる地点にあたるものとみられる。

このため、今回の調査地では、古墳時代後期には、すでに、縄紋時代・弥生時代の堆積層は、削平されていたものと考えられる。

25. 日暮（ひぐれ）遺跡　第15次調査

1．はじめに

調査地は、生田川と西郷川によって形成された複合扇状地上に位置する。調査地の現況地表面の標高は約14mで、北から南に下がる緩傾斜地である。

日暮遺跡の調査は昭和61年の第１次調査から当調査で第15次を数え、弥生時代から鎌倉時代に及ぶ複合遺跡である。

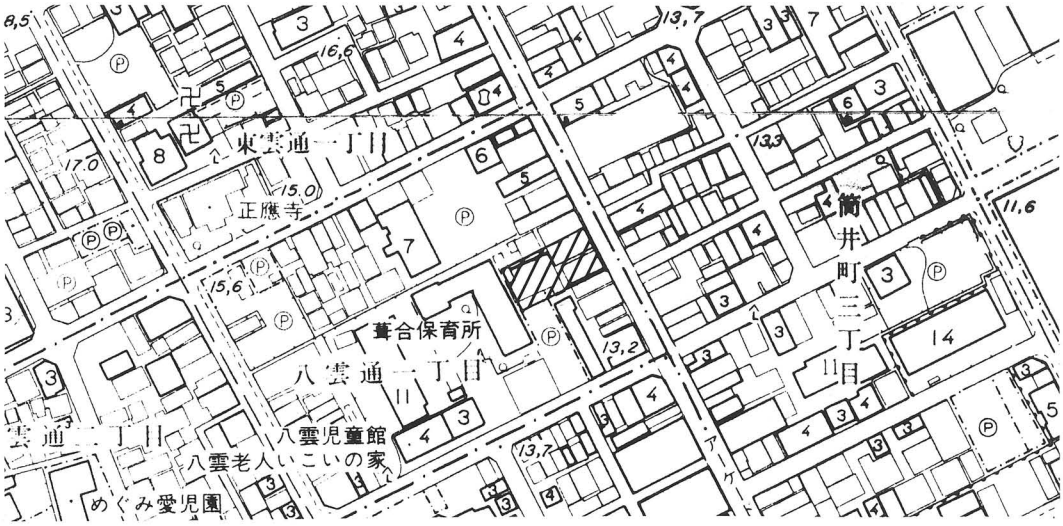


fig. 179
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

調査の手順として建物の基礎となる杭部分の調査約100㎡を先ず行い、基礎杭打設完了後残りの部分の調査を行うこととなった。

基本層序

調査区にはかつて店舗の他に倉庫があり、倉庫の基礎により状況の悪い箇所では、８層まで撹乱を受けているところもある。現代盛土層（１層）の下層に旧耕土・床土（２・３層）が存在する。

４層を削除すると６層上面に牛と考えられる足跡が散見された。（第１遺構面）第１遺構面は標高13.6m前後である。６・７層を削除すると第２遺構面（８層上面）となる。８層を削除すると第３遺構面（９層上面）となる。８層からの出土遺物は、極端に少なくなる。９層以下の層は礫を含み無遺物となる。

４・６・７・８層中からは、土師器・須恵器・瓦器・青磁・白磁・陶器・土錘等が出土した。

第１遺構面

第１遺構面では、井戸状遺構１基・溝状遺構２条・不定形土坑（ＳＸ101）が検出され、特に調査区南西部で牛の足跡が検出された。しかしながら足跡の方向性や水田の区画については不明である。

ＳＥ101

ＳＥ101は、直径1.3m・深さ1.1mの規模で、遺構の上部は旧建物の基礎によりなくなっていると思われる。

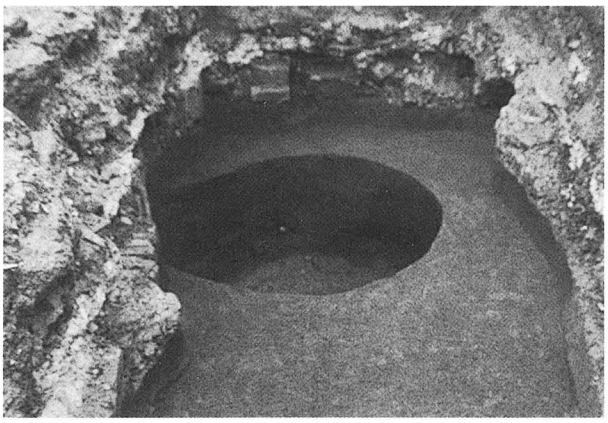


fig. 180　ＳＥ01

遺構内より土師器皿・鍋、須恵器鉢、常滑焼と考えられる壺・甕が出土した。遺物より14世紀頃と考えられる。

第2遺構面　第2遺構面では、畝状遺構と畑を形成する段状遺構が検出された。ほかに調査区北西部でＳＸ201が検出された。

畝状遺構　畝状遺構（ＳＤ201～228）は幅0.2～0.8ｍ・深さ0.05～0.15ｍほどの規模で、畑の畝の谷部分が溝状に検出されたものである。方向は基本的に東西方向である。段状遺構が3カ所検出されたことから、畑が4面あったことが考えられる。

ＳＸ201　ＳＸ201は、溝状遺構として図示しているが、最初に述べたように倉庫の基礎特にオンドル状のものによって炎熱を受け土壌そのものが変質し、遺構として掘削することに難渋した。幅約1.0ｍ・深さ約0.2ｍの規模で、土師器皿、須恵質瓦等が出土した。

調査区東北部には第2遺構面と第3遺構面の間に遺構面が存在した。検出された遺構は、不定形土坑4基とピット15基（Ｐ201～21）である。土師器・須恵器片が少量出土した。ピットは建物等にはまとまらないようである。

第3遺構面　第3遺構面では、土坑6基・流路状遺構1条・ピット2カ所が検出された。

ＳＫ301　ＳＫ301は、直径約2.0ｍ・深さ約0.8ｍの円形の土坑に深さ約0.4ｍの台形状の突起部がとり付いたような形状の遺構である。土師器鍋・瓦質羽釜・須恵器鉢・陶器片・砥石3

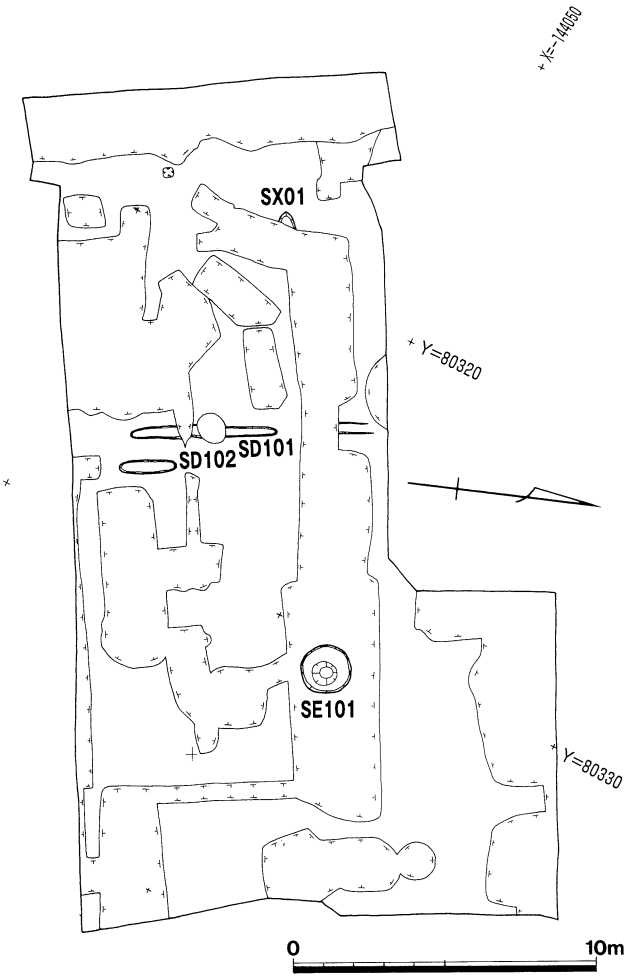


fig. 181　第1遺構面平面図

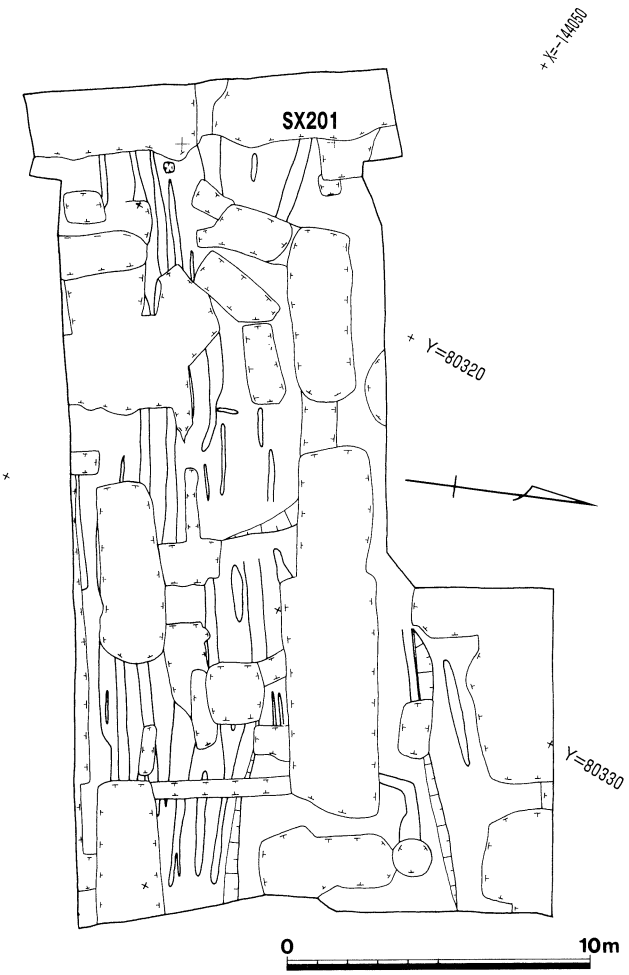


fig. 182　第2遺構面平面図

個等が出土した。

ＳＫ302　ＳＫ302は、１辺約0.8m・深さ約0.5mの隅円方形の土坑である。少量の土師器・須恵器が出土した。

ＳＫ303　ＳＫ303は、検出された部分での規模は１辺約1.0m・深さ約0.5mの方形の土坑である。少量の土師器が出土した。

ＳＫ304　ＳＫ304は、撹乱等によって形状は不明である。深さ約0.4mの土坑で、遺構の上層部で土師器皿片がまとまって出土した。

ＳＤ301　ＳＤ301は、調査区西部で検出された深さ約0.3m程の流路状遺構である。暗茶褐色砂泥が堆積しており、遺物は出土しなかった。

第３遺構面検出の過程で調査区東辺中央部で弥生時代後期後半頃と考えられる甕・甑・鉢が中世の土師器・須恵器とともに、まとまって出土した。当調査地の中世の遺跡が形成される過程で付近から流れこんだものであろうか。

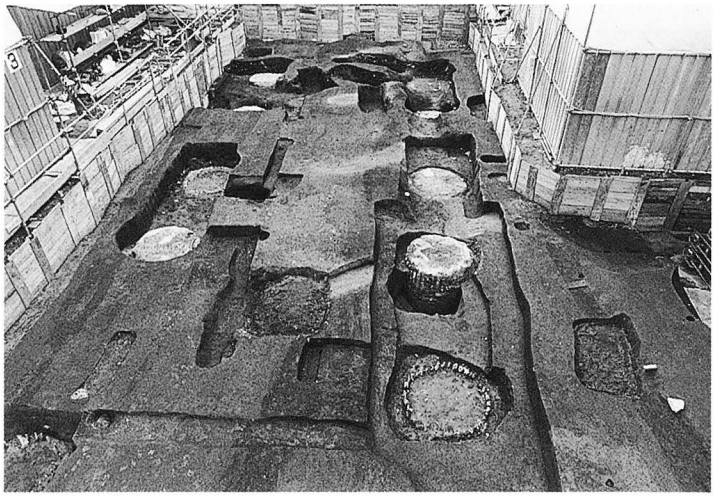


fig. 184　第３遺構面全景

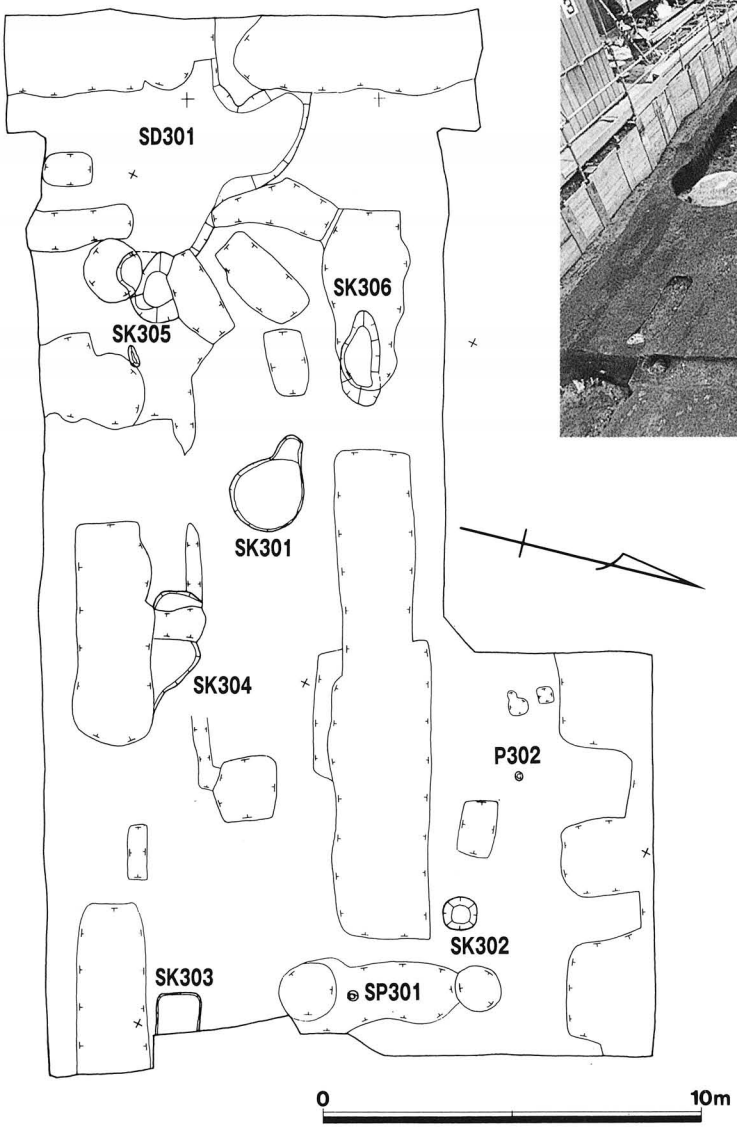


fig. 183　第３遺構面平面図

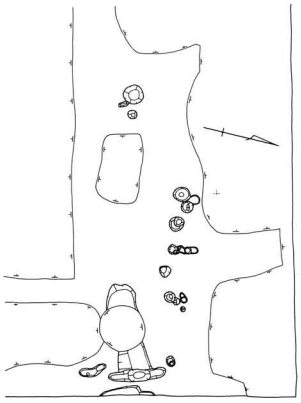
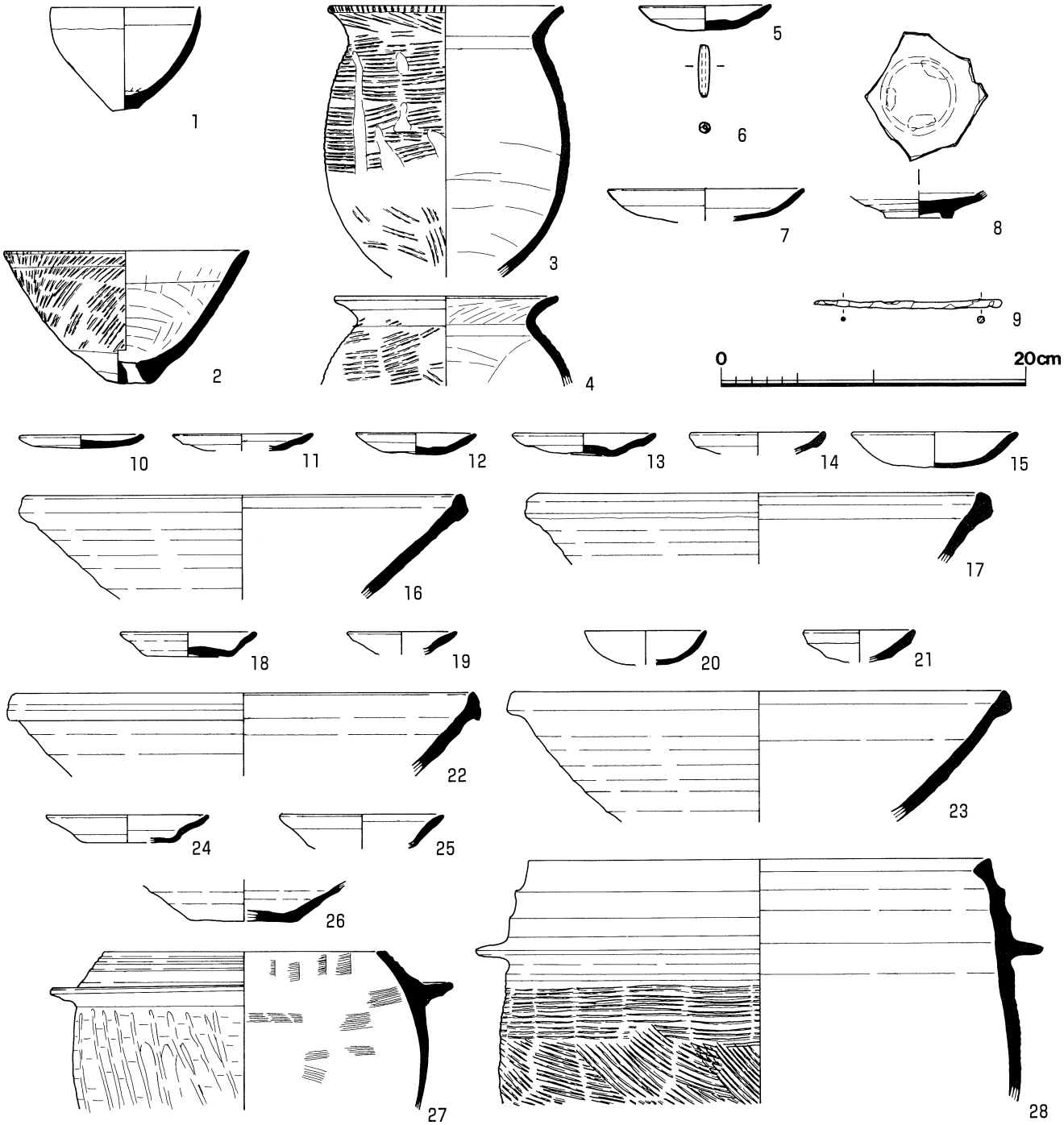


fig. 185　第２～３遺構面平面図

3．ま と め　今回の調査において遺構面は3面検出された。第1・2遺構面は、水田もしくは畑と考えられる遺構面である。第3遺構面も土坑等の遺構が検出されたが、遺構の検出密度としては低いものと思われる。これまでの十数次の調査内容から、当調査地は生活・居住空間ではなく、その縁辺に当たる生産空間のような箇所であろうと考えられる。

第1～第3遺構面までの時期は大差なく、遺物から12世紀後半から14世紀の間に納まるものであると考えられる。



1～4・7・8 包含層2,　5・6 包含層1,　9 包含層3,　10～17 SX201,　18～21 P301,
22～31 SX301

fig. 186　出土遺物実測図

26. 湊川（みなとがわ）遺跡　第３次調査

１．はじめに

湊川遺跡は、旧湊川等小河川によって形成された沖積地に存在しており、微高地には、宇治川南遺跡・六番町遺跡・神楽遺跡等の縄紋時代から鎌倉時代にかけての遺跡が分布している。

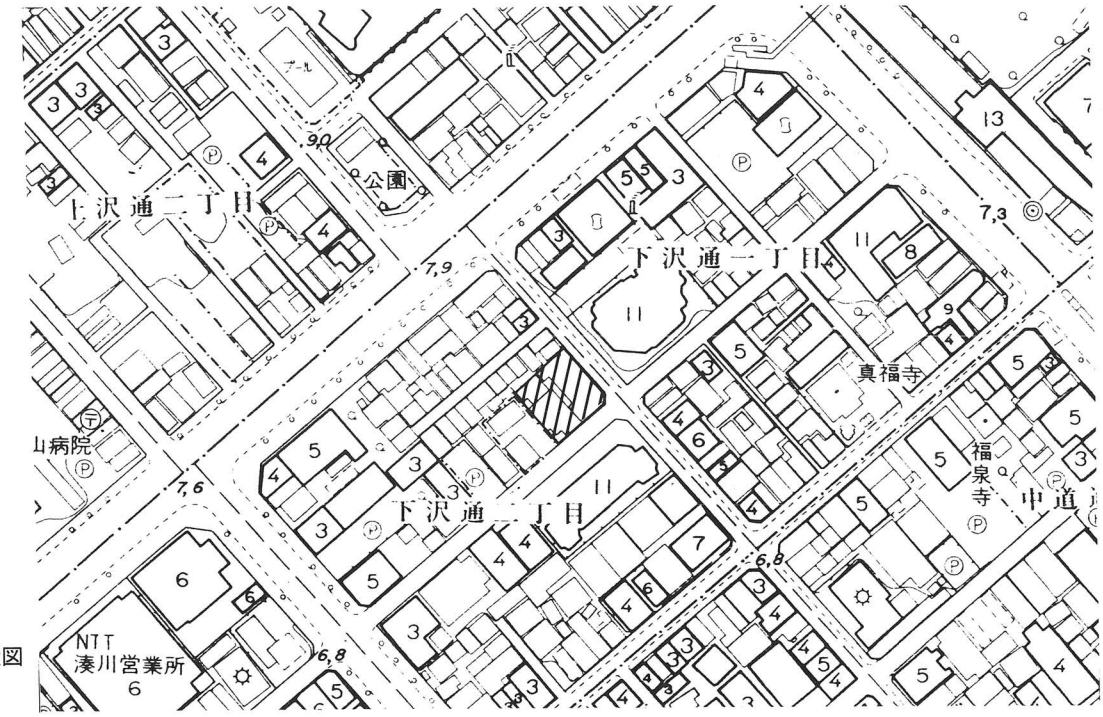


fig. 187
調査地位置図
１：2,500

２．調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設工事に伴うもので、工事の影響の及ぶ範囲を対象とし、当初、全面調査を前提としていたが、杭部分の調査段階で、全域にわたって河道の氾濫源となっていることが、判明したため、部分調査に切り換えた。

基本層序　上層より現代盛土、旧耕土、中世包含層の順で、中世包含層の下層上面が第１遺構面となる。

検出遺構　包含層を除去したあと、遺構検出を行ったが、遺構は部分的にしか確認できず、その大半は近世の河道によって削平されていた。僅かに残存していた遺構は以下の通りである。

ＳＸ01　調査区の北西隅にて検出した遺構で、深さ約30cmを測る。遺構の性格は不明である。

ＳＸ02　ＳＸ02は、最終埋土が近世の洪水砂であり、洪水の直前には湿地帯であった様子で、植物遺体や有機物の土壌化した土が、近世の陶磁器と共に堆積している。その下層には、中世の遺物のみを含む層が存在し、この層が落ち込みの最初の堆積と考えられる。近世埋土の上面には、おそらく奇蹄目であろう足跡が一面に検出された。

護岸石組み　護岸石組みは、中世の包含層を切って掘り込まれている掘形に据えられており、全て花崗岩を使用している。石組みの南東側には、近世の洪水砂中ではあるが、人頭大の転石がみられ、石組みの裏込め石である可能性が考えられる。出土遺物等から、ＳＸ02の下層と同じく中世以降に位置づけられるものと思われる。残存する石組みは基底部である１段（もしくは２段）であり、15列が検出されているが、南西端は近世の洪水によって切られ

ており、更に続いている可能性がある。また、北東端もＳＸ02の最終埋土である洪水砂に切られている状態であるので、北東側へも更に伸びる可能性があり、石組みの規模の詳細は不明である。よって、性格的なものも明確にはできない。

3．ま と め

周辺地域の調査によれば、断片的にではあるが、古墳時代から中世にかけての遺構が確認されている。当調査区内においても包含層からこの時期の遺物が出土しており、遺構の存在する可能性は否定しきれない状況にある。しかしながら、包含層は、僅かに確認されたのみで、遺構面は、近世の河道に切られ、存在していたであろう遺構は、その殆どが削平をうけている。

このような状況から当調査地の状況についての詳細は不明であるとせざるをえない。

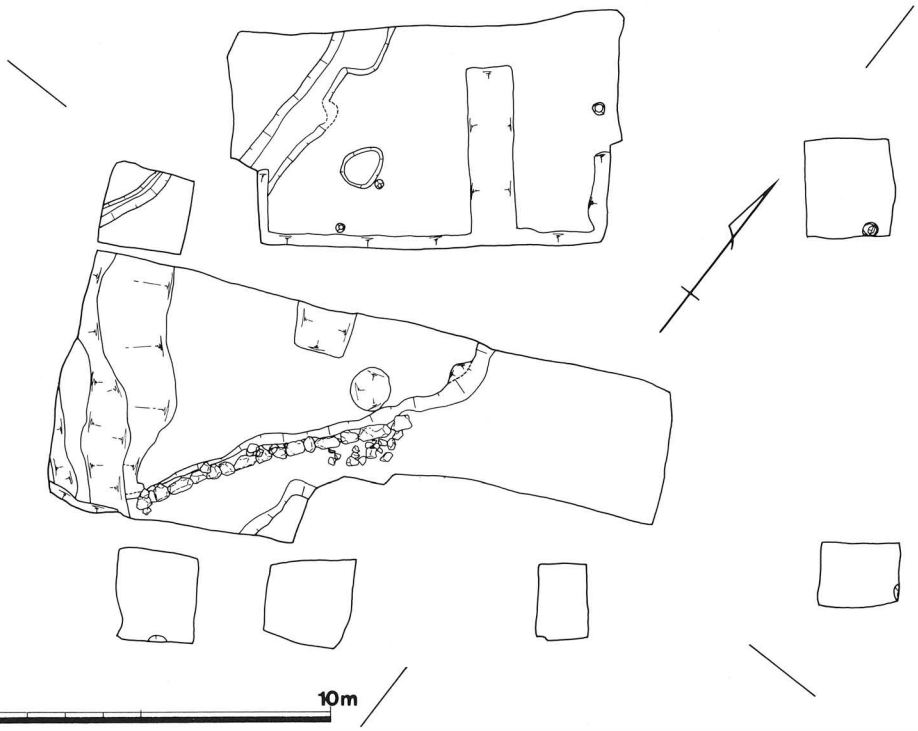


fig. 188
調査区平面図

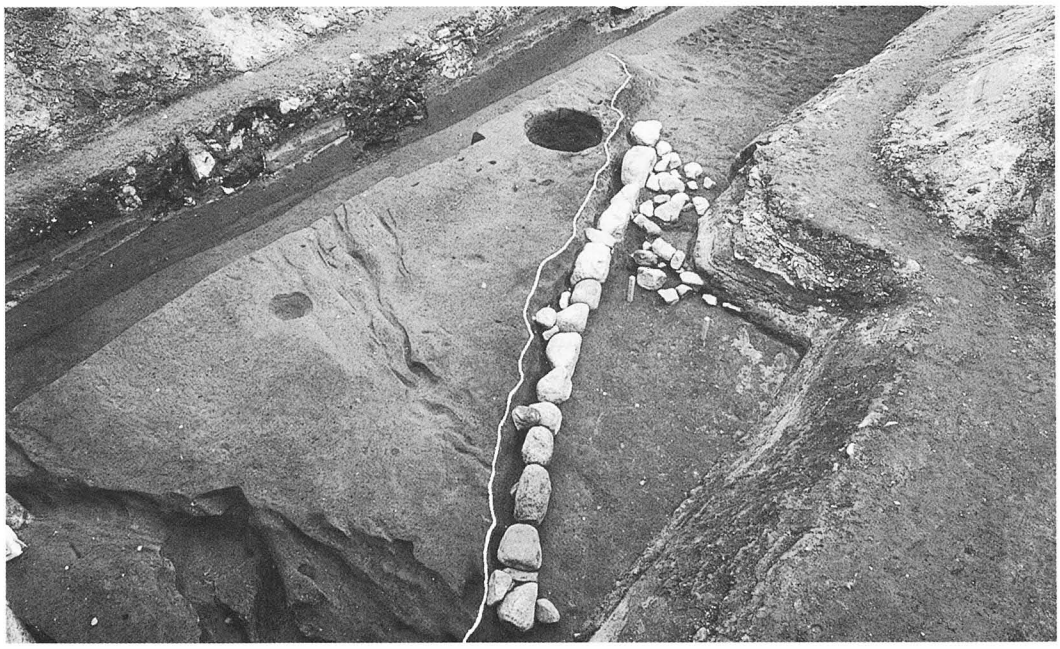


fig. 189
石組み遺構

27. 上沢（かみさわ）遺跡　第８次調査

１．はじめに

上沢遺跡でのこれまでの調査は、平成元年（1989）に神戸市教育委員会が行った第１次調査が最初である。その時の調査では縄文時代晩期から弥生時代前期の自然流路、弥生時代後期の集落跡等が見つかっている。その後、平成７年の第２次調査では、弥生時代の水田面が見つかっている。さらに平成８年に隣接地で調査された第３次調査では、弥生時代前期、弥生時代後期、古墳時代初頭、奈良～平安時代、中世と各時代の遺構が発見され、複合大遺跡であることが判明している。

今回の調査は山手幹線拡幅に伴う調査で、拡幅される道路の歩道部分に当たる。今回の調査地は第３次調査範囲に東と西で接している。

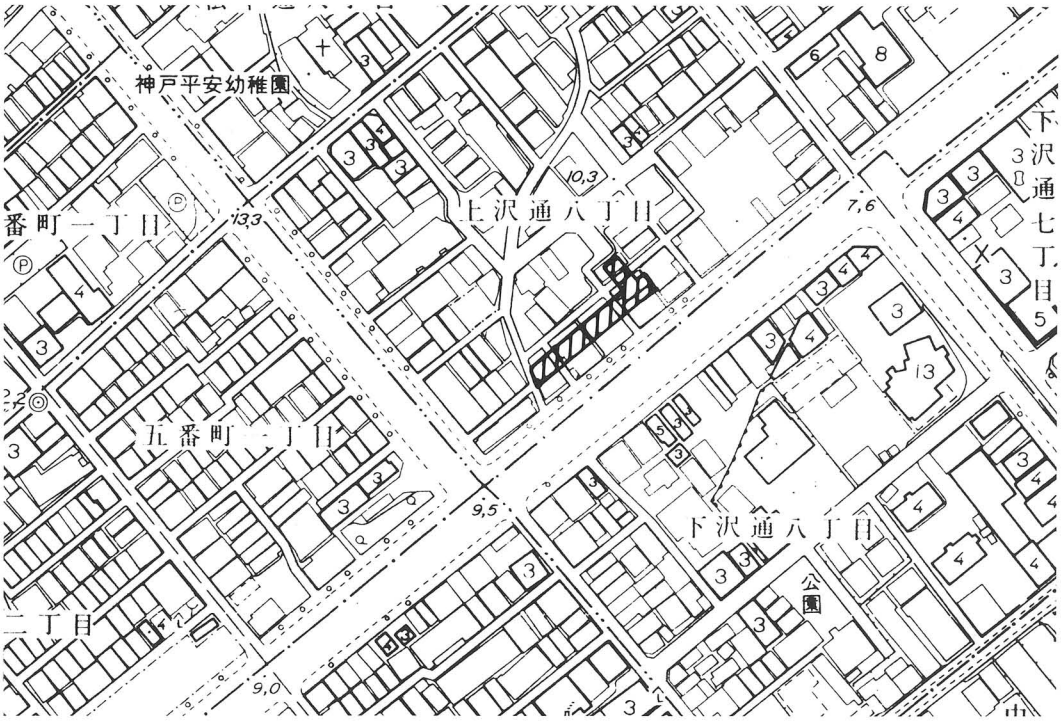


fig. 190
調査地位置図
１：2,500

２．調査の概要

基本層序は盛土、旧耕作土、旧床土、茶褐色砂質シルト層の包含層となる。見つかった遺構面は中世・平安時代の第１遺構面、弥生時代後期・古墳時代・奈良時代の第２遺構面、弥生時代前期の第３遺構面であった。弥生時代前期の遺構面に関しては、調査区の西半部では第３遺構面として検出したが、東半部では第２遺構面と同一面で検出している。

第１遺構面

第１遺構面で見つかった遺構は土坑７基、溝３条、井戸１基、ピット約100基である。遺構は調査区の西半部に比較的集中している。

ＳＫ01　ＳＫ01は長径１ｍ、短径90㎝、深さ14㎝の楕円形の土坑で、拳大の礫が詰まっていた。出土遺物は少ないが、12世紀のものと思われる。

ＳＫ02　ＳＫ02は調査区外に延びるため、全体の規模は知り得ないが、円形の浅い土坑である。検出した最大径は2.9ｍで深さは10㎝であった。12世紀のものと思われる。

ＳＫ07　ＳＫ07は直径65㎝、深さ６㎝の円形の土坑で、土師器の皿が数点出土した。12世紀のものと思われる。

ＳＥ01　ＳＥ01は直径1.7ｍの井戸で、深さは底部まで1.3ｍで、底部からさらに20㎝の深さを持って曲物がはめ込まれている。掘形の上面は円形であるが、途中からは方形に穿たれていた。底部の平面形は一辺90㎝の正方形である。底部に埋め込まれていた曲物は直径40㎝であった。曲物を埋め込むための掘形は、曲物の大きさと同じである。曲物の残存している高さは20㎝であった。

井戸内の埋土はシルト質極細砂を基本とするが、中位では井戸枠と思われる材が崩れたように埋没していた。出土した井戸枠は、元来構成されていた井戸枠の一部しかなく、殆どが原位置を留めていない。また、その井戸枠材に重なり、拳大から人頭大の礫が投げ込まれたような状況で出土している。井戸枠の材にはホゾ穴を穿ったものや杭状のものがある。曲物の中はシルトが堆積し、拳大の礫が入れられていた。

出土遺物は須恵器・土師器・白磁・土錘・砥石である。これらの遺物から判断して、この井戸は12世紀のものと思われる。

fig. 191　ＳＥ01

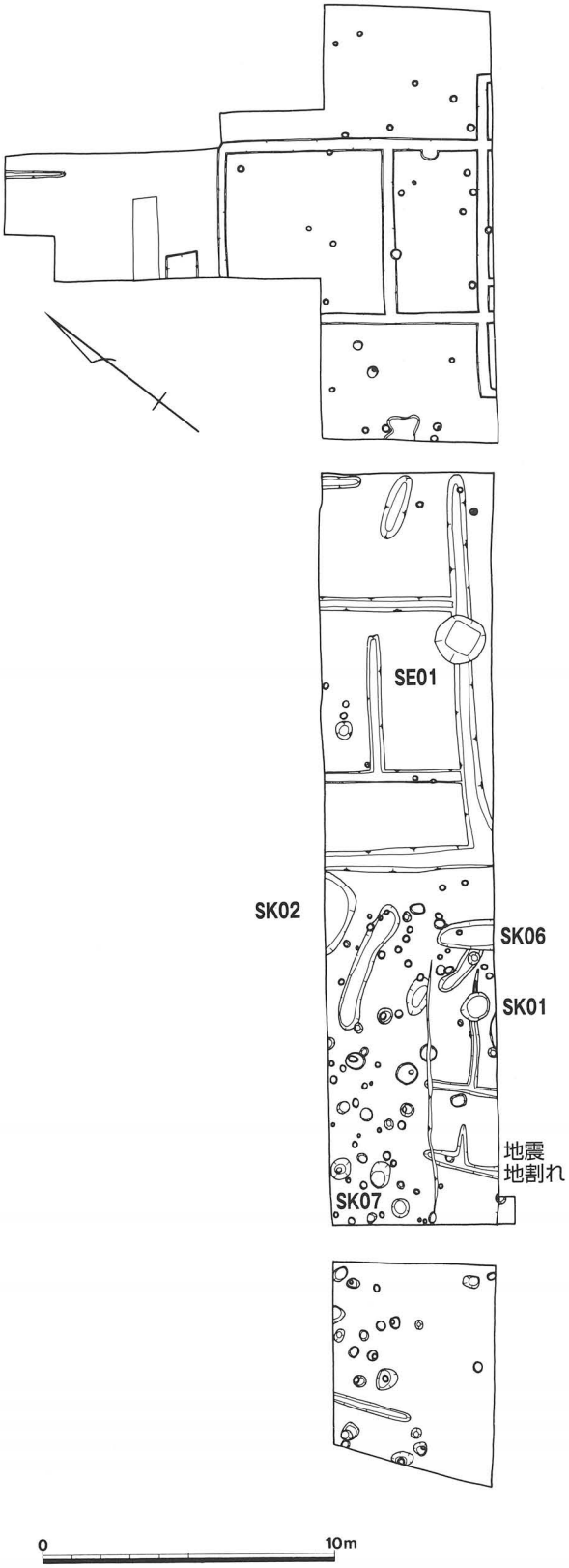


fig. 192　第１遺構面平面図

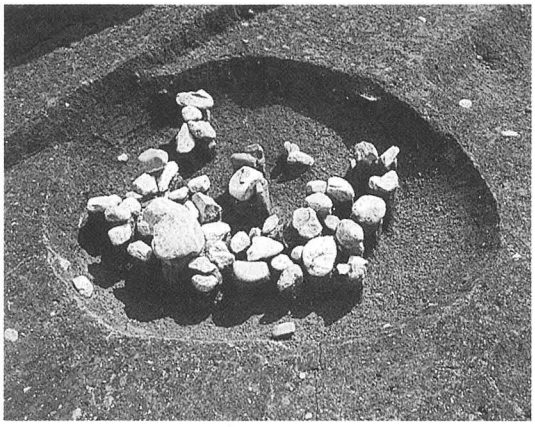


fig. 193　ＳＫ01

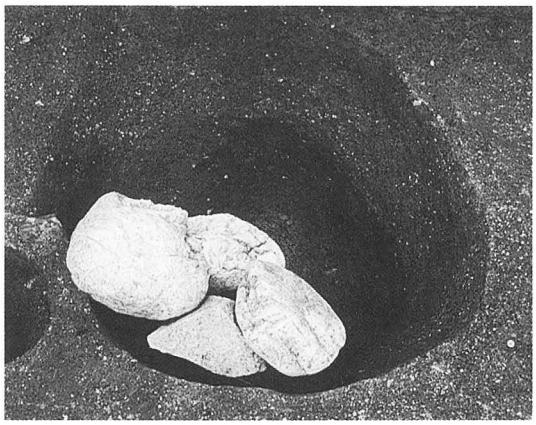


fig. 194　ＳＰ04

fig. 195　第１遺構面全景

ピット　ピットは多く見つかっているが、柵列状に並ぶものはいくらかあるが、掘立柱建物を構成するものは分かっていない。ピットの時期は12世紀のものと、平安時代と思われるものがある。

第２遺構面　第２遺構面では掘立柱建物６棟、土坑18基、溝４条、ピット200基以上が見つかった。遺構は調査区全体に分布している。

ＳＢ201　ＳＢ201は調査区の東端部で見つかった掘立柱建物である。建物の規模は東西３間（７ｍ）南北２間（4.2ｍ）で、柱間隔は2.2ｍ～2.5ｍである。柱穴は直径70㎝内外、深さは40㎝内外のもので、平面形は円形か楕円形であった。柱穴の中には拳大の礫が詰め込まれているものもあった。側柱のみの掘立柱建物である。

ＳＢ202　ＳＢ202は調査区の中央部で見つかった掘立柱建物である。建物の一部が調査区の南側に延びる。建物の規模は東西２間（４ｍ）南北３間（4.5ｍ）で、柱間隔は東西が２ｍ、南北が1.5ｍである。柱穴は直径65㎝～70㎝、深さ30㎝内外で平面形は円形である。この建物も側柱のみの掘立柱建物である。

ＳＢ203　ＳＢ203は調査区の中央部で見つかったＳＢ202に先行する掘立柱建物である。建物は調査区の北側に延びるため、全体の規模は不明である。東西は２間（4.6ｍ）で南北は１間以上（4.3ｍ以上）である。柱間隔は東西が2.3ｍ、南北が2.1ｍである。柱穴は直径65㎝～80㎝、深さ30㎝内外で平面形は円形である。側柱のみの掘立柱建物である。

ＳＢ204　ＳＢ204は調査区の中央部で見つかった掘立柱建物である。建物は調査区の北側に延びるため全体の規模は不明である。東西は３間（4.8ｍ）で南北は１間以上（2.9ｍ以上）で